
仮面ライダー SHADOW ~福音の疾風~

NAVAHO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー SHADOW ～福音の疾風～

【Nコード】

N3253W

【作者名】

NAVAHO

【あらすじ】

……………記憶にあるあの人は、誰よりも傷ついていて、それでいて優しかった……………

一人ぼっちの少年は、ある夜に一人の男と出会う。

男の名は、シャドームーン。

予告編（前書き）

この小説は、仮面ライダーBLACK RX新世紀エヴァンゲリオンのクロスオーバー小説です。

エヴァンゲリオンの登場人物が、原作とは、年齢と経歴、性格が違っていきますので、それらに嫌悪感を感じる方がいましたら、回れ右をお願いします。

予告編

仮面ライダーShadow 福音の疾風

予告編……

1988年……

かつてこの島国には、大いなる悪意を持った存在が潜んでいた……
人智を超えた生命力と絶大なる力を持ち、人々を恐怖へと導いてきた。同じ悪意を持った闇の住人達を従えて……

滅びる時それは、こう言った。

”人間の心に悪がある限り。必ず蘇る！……！……！忘れるな……！！！”

その言葉通り、人間は己の悪なる欲望に忠実だった……

1990年……

それは、この星を囲う闇の中にいた……闇の名を”怪魔界”とい
った……

自らの星を食い散らかし、他者を食い物のように扱ってきたそれは、
人間の醜悪な権化そのものだった……

自分の故郷では飽き足らず、それは地球に手を伸ばしてきたのだ……

それもまた、滅びの時、こういった。

”人間が罪を重ねる時、新たな怪魔界が生まれ、地球を攻撃するで
あろう！……！全てはお前達人間どもの罪だ！……！”

今でも人間は、罪を重ねている……

時は流れて2000年……

人類はこの年……地獄を見た。

大地震、津波に代表される天災に加え、荒れた国々で発生した内乱

……

まさに、生きるか死ぬかの地獄の日々でしかなかった……

災厄の中心である南極……

「非常事態、非常事態。総員、防御服着用。第二層以下の作業員は、至急セントラルドグマ上部へと避難してください」

「表面の発光を止めろ！！！！予定限界値を超えてる！！！！」

「アダムにダイブした遺伝子は、既に物理的融合を果たしています」

「ATフィールドが、全て開放されていきます！！！！」

「槍だ！！！！槍を引き戻せ！！！！」

「駄目だ！！！！磁場が保てない！！！！」

「沈んでいくぞ！！！！」

「わずかでもいい、被害を最小限に食い止める！！！！」

「ガフの扉が開くと同時に、熱源処理を開始！！！！」

「凄い……歩き始めた……」

「地上からも歩行を確認！！！！」

「コンマ一秒でもいい！！奴自身にアンチATフィールドに干渉可能なエネルギーを絞り出させるんだ！！！！」

「すでに変換システムがセットされています!!!」

「カウントダウン進行中!!!!!!」

「S2機関と起爆装置がリンクされています。解除不可能!!!!!!」

「羽を広げている!!!!地上に出るぞ!!!!!!」

それは、圧倒的な熱量と共に南極の氷を溶かし、光の羽を広げた……

真っ赤に染まった大地より巨大なる光の巨人が声にならぬ叫び声を上げる……

その大地より、巨人を見つめる影が二つ……

「フフフフフフ。アレが人間どもを滅ぼすのか：ククククク。我らが祖が滅ぼした者達がか？ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ!!!」

声を高らかにして笑った。その影の傍らに跪く黒いフードを被ったもう一つの影は、

「そのようですね。ですが、それ以上に人間は人間の手によって滅ぶやもしれませんが……」

「フフフフ。奢れる人間共め。今しばらくまで、お前達は蘇った我自身の手によって滅ぶのだ。アレも例外ではない」

影の頭部の双方についている人間のものとは思えない複眼のような

赤い目が大地に立つ巨人に向けられる。

「我ら”ゴルゴム”の民以外に生きるものは必要はないですか…創世王様」

悪夢は三度……

圧倒的な力を持って……

地獄より蘇る悪しき神官達……

「人間どもの抹殺と文化、文明の破壊。蘇りし我らのなさねばならぬ仕事……」

「奢りぶった人間どもに我らゴルゴムの鉄槌を……」

「ホホホホホホ。人類の最期を見届けたいものだわ」

神官達を束ねる黒い大神官長……

「全ては創世王様の意志が優先する……」

2014年……誕生

青年は、緑の石を継ぎ戦場へ立った……

二度と戻らぬ日々……そして、かなえられぬ夢……

あるのは、己に与えられたたった一つの牙だけ……

全ては、命をかけて救ってくれた恩人との誓いの為に……

変身せよ……仮面ライダーShadow

「世紀王が……何故？」

「予期せぬ反逆者……」

「倒すだけだ……お前達ゴルゴムを……」

漆黒の闇の中よりいでし銀の戦士……

2011年9月3日 始動

「人間は…弱いから、お互いに傷つけあい、奪い合い、殺しあう…
だけど、僕は人間を信じる…だから、戦う。それだけで十分だか
ら……」

予告編（後書き）

初めまして、NAVAHOです。

よろしく願いします。

本編は、九月三日に投稿の予定です。

序章 誕生……2014年(前編) 「……シャドームーン……」 (前書き)

前回の予告通り、本日本編掲載です。

ぜひぜひ、よろしくお願ひします……!!

序章 誕生……2014年（前編） 「……シャドームーン……」

2014年 第二東京市 市立第二東京小学校

日暮れ近くになった校舎と校庭には誰も居らず、辺りは不気味な静けさに包まれていた……

ほんの少し前には、子供達が校庭で賑やかに遊んでいたのに今では、その面影すら全く無い。

変わりに聞こえてくるのは、環状線から聞こえてくるクラクションぐらいなものだった。

しかしながら、その雰囲気を利用しておきたいのか、外にはあの子供らの賑やかな気配がかすかに残っている。

ふと窓の向こうを見れば、子供らはまだ遊んでいるのかもしれない。そんな期待さえ持ってしまう。

だが、実際には幽霊のようにかすかな気配でしかなく、実物は居ないのであるが……

”グウウウ……ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”あ”アアアアア
……”

校庭の隅に植えられているイチヨウの木からそれは校舎を見つめていた……

「ふう〜。夏しかないのは、何となく辛いですね」

老教師がただ一人職員室で団扇で扇ぎながら、書類を作成していた。
暑い……

あのセカンドインパクトの影響で日本には四季が無くなり夏しかなくなつたために、団扇は生活には無くてはならないものとなっている。

”セカンド・インパクト” 西暦2000年9月13日に起きた20世紀最後の”地獄”

南極に落下した大質量隕石によつて怒つた最大のカストロフィー…

二度の世界大戦以上に混乱した世界はまさに地獄そのものであり、三十億近い人命が失われた……

その傷跡は深く、世界各国の気候はガラリと変わり、その影響で日本から四季が無くなつたのだった……

額に汗をにじませ、時折眼鏡を外しては掛け直すの繰り返し……
その傍ら作業の方は、順調に進み、時計の針が午後八時を回ったところで終わる事となった。

「やっと今日のお勤めが終わりました」

肩の荷が取れたのか、老教師は職員室に備え付けられている冷蔵庫から麦茶を取り出しコップに注いだ……

”グウウウウ……”

「？」

獣のような唸り声が耳に入って来た。何だろうか？

老教師は、首をかしげながら職員室に目をやったがそこには何も無かった……いや、何も居ない……

「……野良犬ですか？」

2014年 第二東京市 喫茶店 ディアボロ……

「お疲れ様です。 店長」

赤いエプロンに似た制服を着た少年の面影を残した中性的な青年が元氣よく声を上げた。

「おお、お疲れ！！シンジ」

人懐っこい笑みを浮かべている少年に、店長もまた顔をほころばせていた。

「それにしても、この一ヶ月はきつかったんじゃないのか？お前……悪いな。二人バイトが居なくなっちゃまったばかりに」

「いえ、そうでもないですよ。その分、お給料は上げていただきましたから」

「こいつめ！！あの素直だったお前はどこへ行ったんだ。このやろっ」

軽くシンジを小突きながら店長は”がはは”と豪快な笑い声を立てた。シンジも”ははは”と苦笑いを立てた。

店長は、かなり年配の方でどことなくダンディーな髭と大き目の色眼鏡が良く似合うちょい悪親父である。

「後は、こっちでやっておくからお前は、風呂入ってさっさと寝ろ。」

明日も早いんだからな」

「そういう店長は、早朝からサーフィンに行くんでしょ」

40を過ぎてても年齢で未だに結婚もせず遊び続ける店長に苦笑しながら、シンジは自分に宛がわれた己の自室へとたたと行儀の悪い音を立てながら厨房から出て行った。

「やれやれ……あいつがここに着てから12年か……そういえば、あいつは今頃どうしているだろうな。まったく先輩に何も断りをいれずに勝手に出て行きやがって……」

店長は、昔、旧東京市に開いていた場所の常連であり後輩であった青年をシンジに重ねるように思い出していた。

「おい、今何をやっているんだ？光太郎……」

彼が投げかけた視線の向こうには、四人の男女が笑っている古ぼけた写真立が一つ……

「しみつたれた事を言うなんて俺らしくないな。明日は思いっきり波に乗るしかないな。これはよ……!!!」

シリアスは自分には合わない。店長は、直に気持ちを切り替えて後片付けをそこそこにして自室へと引き上げていったのだ。

碓シンジ 年齢18歳。第二東京市の公立高校に通うごく普通の青年である。

シンジは、濡れた髪をそのままにしてベットにどかっと腰を下ろして、大学の案内を見ていた。

今年の彼は、所謂受験生であり、将来について真剣に考えなくてはいけない年齢である。

彼自身とくにやりたいことがあるわけではなかった。故に、何処へ行こうか良くわからないというのが心情であった。

「うん。やっぱりここで暮らしたかったら地元に落ち着くしかないかな……………」

やりたいことは無いのだが、ここで働きたいというのがシンジの思っていることだった。

彼がここへ来たのは今から12年前

彼が6歳の頃……………

あの頃、僕は一人ぼっちだった……ただ、泣いているだけに過ぎなかった幼少の自分。

三歳の頃に母を亡くし、父親に捨てられた。自分を疎んじる親戚に対して僕は心を閉ざし、自分を”知らない人間”だと思い込むようになったのだ……

だが、そんな彼にも唯一心を開く事のできる友達が居た。

「こっちだよ。今日は、ミルクを用意したからね」

物置同然の離れに唯一の訪問者。それは白い猫だった。唯一悪意がなく純粹に自分を慕ってくれる猫に暗い表情が僅かに明るくなる。

最初は、餌目当てかと思ったが実はそうではないらしい。気がついてらいつも自分の周りに居て、直に寄って来るのだ。

そんな小さな友人に対して僕は、今日も笑いかけた……

「ねえ！！！さっさとどっかへやってよ！！！！お金ならもう貰ったんだから！！！！！」

いつもいつも僕の話は、お金お金って…なんだろうね。僕は……

「おいおい…世間体があるんだぞ。施設にやるにもお金がかかるし……大体な、もう少しの辛抱だろ」

「私は嫌よ！！！！あの女の息子にお金かけるなんて！！！！お金はあの子のためだけに使わせていただくわ！！！！」

「だったら、どうするんだ！！！！人殺しの子をすてるか！！！！！？捨てたら捨てたで、俺たちの世間体が……」

毎日、毎日おじとおばは僕に絡んでくるお金のことで喧嘩をし、そのくせ僕を捨てたいと思っているのに自分達が汚れる事を凄く嫌っている。

「みゃ〜〜〜〜……」

嫌な気持ちで一杯の僕の手を猫はぺろぺろと舐めた。何だか凄くこそばいよ……

猫はあまり人に懐かないのに、僕にはいつも懐くんだよね。このこ以外にも居るんだけど、そのこは時々鼠を捕まえてきては外へ放り出しておいてくれた。

「僕……何だか嫌になってきたよ。おとうさんもおかあさんもどうして、僕を捨てたんだろ……やつぱり、お金……それと何……僕よりも大事なものがあつたの？」

自分に対して他人はいつも否定ばかりだった。誰かに話しかけて欲しかった、話を聞いて欲しかった……

ただそれだけのことを望んではいけないんですか？

ねえ……

「少し……外を出ようかな……」

シンジは猫を抱えて夜の外へ出て行った……

それ以来……シンジはここへ戻る事はなかった……

……記憶にあるあの人は、誰よりも傷ついていて、それでいて優しかった……

当てもなく夜の街をシンジは人目に付かぬように歩いた。

彼がよく行く場所は決まっていたいつもの森である。そこに行けば、人の温もりはなくとも何かを感じる事ができる。

だから、森が大好きだった……

その夜に彼とであったのだ……

シンジはいつものように小高い丘の上に座って、空を眺めた。

「うわゝ、すごい満月……ぼく初めてだよ」

あの家のことを忘れたいのかシンジは、自分の頭上の上で輝く満月を見た。

「みゃあ〜」

付いてきた猫も同様らしい……

叔父と叔母が寝静まるまでここで月を見ている事にしよう……

幼稚園では、寝ないで夜更かししている子供のところへお化けが来てお化けにしてしまうという絵本を読んだ……

自分をあの家から連れ出して、それ以上に楽しいことができるのならシンジはお化けに攫われたかった……

だけど、現実にそんなお化けは居ない……希望を持つだけ無駄かもしれない……

昼間の蒸し暑い気候とは打って変わって今夜はとても清々しい風が頬に当たってきて気持ちがいい……

このままここでずっと座っていよう……シンジは猫を抱え込むようにしてそのまま丘の上で自分を唯一優しく照らしてくれる月を瞳に焼き付けるように……

カシャン……カツーン……カシャン……カツーン……

それは、唐突にシンジの耳に入ってきた……

カシャン……カツーン……カシャン……カツーン……

まるで鎧を来た誰かが歩いてくるような音が……

カシャン……カツーン……カシャン……カツーン……

次第にそれがこっちへ近づいてくる……

カシャン……カツーン……カシャン……カツーン……

「こんな時間に何故、此処に居るんだい？」

シンジが振り返るとそこには彼が今までに見たことの無い男が居たのだ。

さび付いた銀色の鎧のような体と飛蝗に似た仮面のような顔に浮かぶ緑色の目が自分を見ていた……

「…おじさん、誰？」

シンジは、不思議そうに銀の男を見上げた。他人対して大きな苦手意識のあるシンジだったが、この男からそんな苦手意識が出てこなかった。

なぜなら、この男からは、今まで自分を疎んじてきた人たちとは違った何かがあるからだ。

「ふっ…そうだな。俺から名乗らなくちゃいけないよな」

男はシンジに目線を合わせるべく膝を付いた。

「俺の名は、シャドームーン……君は？」

優しく語り掛けてくる男にシンジは、

「ぼくは、碇シンジです」

「シンジ君か…どうして遅い時間に一人でこんな場所に居るんだい？家族と喧嘩でもしたのか？」

「……………」

シャドームーンの言葉にシンジは表情を曇らせて俯いてしまった。質問が悪かったと思いシャドームーンは

「すまない。失礼なことを言ってしまったようだ。ここに一人で来たからには、相当辛い事が遭ったんだね。俺でよければ話してくれないかな？そのまま抱え込んでばかりじゃ何にも解決しないよ」

「……………ずっと前にお母さんが死んで…お父さんがぼくを捨てたの……………」

シンジの口から語られたのは、六歳になるまでに送った不幸な日々だった。叔父叔母夫妻に疎まれ、学校、町では”人殺しの子”と指差され虐められ続けた日々…

家族は居らず、友人すら彼の周りにはいない。たとえ、話があっても周りがそれを許さなかった。

”あいつの親は人殺しの親だと…”

その言葉一つでみんなはシンジを避け、疎んだ……

「そうか…それは、辛い事を聞いてしまったね。話してくれた君も言うのは辛かったんだね」

シャドームーンの自分を労わってくれる言葉にシンジは泣いた。ただ、嬉しかったのだ。こうやって話を聞いてくれる事に……

(…父親に文句を言ってやりたいけど、言ったところでシンジ君の受けた傷が癒える訳じゃない。だけど、このままその家に帰したら……)

シンジの話に嘘は無い。体中にある痣や傷が何よりの証拠だし、この子の目には、光そのものが崩れかけようとしているのだ…このままではいけないと……

「シンジ君……よければこのまま俺と一緒に行かないか？その家に君が帰らなかったとしても、父親もその夫婦も熱心に探そうとはしないだろう…第一、そんな場所へ君を帰すわけには行かない」

シャドームーンの言葉にシンジは、信じられないものをみるような目で彼を見つめた。

「でも………」

「いいさ。子供はいつかは離れていくもんさ。君の場合それが極端に早かったただけでいいんじゃないかい？」

緑色の目がふつとシンジに微笑んだ。ずっとあの家から離れたいと願っていたシンジにとって彼はチャンスそのものだと思った。

差し出された彼の手を取った……そして、二人と一匹は丘の上から歩き出した……

「あの夜の間はずっと傍にいてくれたんだ……そしてここに連れてきてくれた」

シャドームーンは、シンジをここに連れてきてくれた。

まさにここは、彼の望んだ幸せがあった……

彼は一つの窓をずっと見つめてから、数十分後にマスターがやってきた

今より若いマスターが、自分を見て………

「いいぞ坊主。今日からお前は俺の息子だ。はははは結婚してないのに子持ちになっちまったぜ」

マスターは大笑いしながら自分を抱きかえてくれた。

ぼくも嬉しくて、笑った。

”そうやって笑っているほうが君には似合っているよ。シンジ君”

振り返ったとき、シャドームーンは姿を消していた………

あの後、傍にいてくれたシャドームーンを探したけど何処にもいなかった。

何処へ行ったんだろうといつも考えていた。もしかしたら、僕みたいな子供のところへ言って家族を探してあげているんだらうか？

そう思うと何だか、もう一度会いたくなつた……

彼のことを知りたくて、確証もないたわいのない噂でいいから彼のことか聞きたかった。

マスターに聞くとこんな話を聞かされた……

「そいつは、もしかしたら仮面ライダーだったかもしれないな。運がいいなお前さんは、そいつは誰よりもいかしているタフな野郎のことを言うんだ」

マスターが言った仮面ライダーは、赤い目に黒い身体を持った異形のバイク乗りのことだったが。自分が会ったのは、銀色の身体に緑色の目をしていた……

マスターが言うには、青い仮面に赤い仮面といわれていて正確な姿は誰も知らないらしい……

マスターが言うには、幼少の頃からあるらしくその時に、お世話に

なった喫茶店の親父さんもよく話していたらしい…

白いバイク、赤いバイク云々……………

「仮面ライダーか……………もしかしたら、あのシャドームーンって仮面ライダーだったのかもしれないな」

バイクには乗っていないかったけど、ただそんな雰囲気は彼にはあったと思う。

シャドームーンに連れられてここへきたのだ……………

あの明るくて優しい店長のところへ連れてきてくれたこの場所で穏やかに過ごしたい。それが彼の願いだった……………

いつもまにか疲れが出てきたのか、シンジはゆっくりと瞼を閉じて寝息を立てた……………

「みやあ〜？」

部屋の主を確認するように一匹の年老いた白猫が入って来た。ベツトの上で寝ているシンジを確認したら白猫はそのまま彼の傍に寄り添うように身体を横にした。

旧東京都近郊……

セカンド・インパクトの動乱期に起こったN2爆弾によるテロによりかつての首都はみるも無残な姿を晒していた。

海中に没し朽ちた高層ビル群を見る限りまさにこの世の終わりをあらわすには十分すぎた……

海面に映える月に映りこむ異形の姿が存在した……

甲高い声を上げながら、飛行している人間蝙蝠……

蝙蝠は朽ちた都市群の一つへ舞い降りる。

月明かりに照らされた白いフードを被った三人の人影の下へ……

「ダロム様、バラオム様、ビシユム様。ただいま到着しました」

「待つて居ったぞ。蝙蝠怪人」

親しい友人を歓迎するかのように不自然に白い頬を吊り上げながらダロムは笑った……

「はっ！……シャドームーンの居場所が分かりました。奴は今、第一二東京市周辺の山に居ます」

「そうか……ご苦労であった。では、引き続きシャドームーンの監視

を続けるのだ」

ダロムは必要な事さえ聞ければよかったのか、そのまま蝙蝠怪人を解放した。

「ふッ、なるほど…奴はまだ生きて居ったのか。よりによって第二東京市か」

のっぺりとした青い顔の双方に浮かぶ鋭い目をぎらつかせながらバラオムは左側にいるビシユムに目を向けた。

顔の半分は美女で、残り半分は奇怪な刺青のような模様があつてはつきり言つて彼女の美貌を台無しにしていた。

それでいて、美と醜が自然に融合した妖しい雰囲気を持っている……

「ええ…ですが、あそこは我々の息が掛かっています。気にする事など必要ないでしょう」

ビシユムは、バラオムが何か言いたそうにしているのを察していたが、彼女は気にすることなく言葉を続ける。

「ダロム。私達がしなければならぬことは、キングストーンの回収ですか…」

「そうだ。創世王様が居られる以上、我ら以外にキングストーンは必要ない」

「キングストーンエネルギーは恐るべき威力を持つ。危険な種は早急に摘み取らなければならない」

「ええ……確かにあの軟弱な人間等にはもつたいないでしょうね」
ビシユムはぞつとするような笑みで二人に微笑んだ。その目は、何処までも冷たく恐ろしいものだった……

……誰も知ることのない古の神殿の玉座

白い石で出来た玉座にその二人はいた。黒いフードを被った男とその男に背を向けるような形で蜘蛛の巣のような天井の隙間から見える星を見上げて……

「大神官長ダンテムよ……闇はどうしている」

「は……創世王様。既に胎動しております。あなたの望むままに人間どもを恐怖へと駆り立てるでしょう」

「フフフフフフ。そうか……ならばいい。後は、あの星の世界への道しるべを見つけてはな……」

「は……すでに鍵は六つ揃えております」

ダンテムの脳裏に、鎖で巻きつかれた赤い宝玉を抱いた異形の怪物

たちの姿が映った……

「そっか……ならいい」

「は………」

「我らの祖が辿ってきた道を再び探すためには、あともう一年待たねばなるまいか……」

創世王は、星に何を見出したのか何処か遠い世界を語るかのような口調で言ったのだった……

……
彼等の頭上には、赤いルビーのような六つの球体が浮かんでいた……

「はあ……はあ………」

廃工場の壁際で激しく息をついている影が一つ……

体中が軋み、激痛が走る。彼は痛みを耐えるように歩き出した……

「くっ……俺は、一体いつまで生きるんだ？」

影は自嘲気味に笑った。そうだ自分は既に二度も死んでいる……
それなのに生きているのだ。体に刻まれた呪いと戦いながら今も闇
の中で生きている……

「ならば…安らかに眠らせた上げましょうか？シャドームーン」

背後から声がした。そこには、白いフードを被った女が一人……

「うふふふふふふ…お久しぶりですね。シャドームーン様」

半面の美貌と半面の醜悪を内包した貌をゆっくりと微笑ました……

「……お前は……ま、まさか？そ、そんなはずは……」

影には見覚えのある女だった……そう、この女はかつて自分の部下
であり、自分をに呪いを振りかけた忌まわしき存在の片割れだ。ビ
シユムと言った……

「うふふふふふふ……驚かれたようですね、シャドームーン。ええ、
私は死にましたよ…あなたのその人間の心によってね」

ビシユムは、瞳に凄まじい憎悪の念を込めて影の主であるシャドー
ムーンを睨んだ。

廃工場の影から、銀色の体を持った影がその全貌を顕にした……

2014年……第二東京市立小学校

始業のチャイムが鳴り、児童が騒がしい様で各々の席に着いている頃、職員室では

「本日を持って、我が校で教鞭を取ってくれる事となった」五所川原”先生です”

「”五所川原 卓”です。皆さん、よろしく願います”

新しく赴任してきた先生を紹介していた。

比較的ハンサムな顔立ちで笑顔がとても爽やかな印象を受ける男性である。

軽いミーティングを終えて、職員は各々の担当された持ち場へ行った。

「そういえば、林田先生。今日、お休みでしたけど…どうしたんでしょうか？」

「珍しいな。今まで休んだ事なんてないのに、ましてや連絡なんて入れないなんて……」

隣り合わせの席では教師達が一つ分空いた席を見てそんな会話を始めたのだった。

そのときに、五所川原の目が僅かに動いた……

「五所川原先生。これから教室へ行くんで私についてきてください」

「はい……分かりました」

微笑を浮かべて彼は、先導する教師の後へ続いた。

教師の後ろ姿を見ながら……

(……………少し、配慮が足りませんでしたね。今度からは慎重にしないと次がありません……………)

彼らを通った廊下の北側の窓の向こうに見える焼却炉の中……

首元に二つほどの穴が空き、木乃伊のように干からびた林田の姿がそこにあつた……………

教職員の机に置かれたラジオからは、昨夜起きたニュースを報じていた。

<昨夜… x付近の工場で爆発事故がありました。警察としては、何者かの悪質な悪戯として調査を……………>

2014年 喫茶店 デイアポロ

肌寒い空気を感じながらシンジは目覚めた。

「もうマスターは行ったかな？」

休みの日はいつもそうだ。幼少の頃はよく海へつれて行って遊んでもらえた。御蔭さまでサーフィンは得意だ。

夏休みは、愉快的な友人達と一緒に遊びに行った。

「40過ぎて…遊び続けるなんて…さすがに僕はあんな風になりたくないな」

自分の理想としては、平凡だがそれなりに仕事をして幸せな生活を送りたいと思っている。

普通すぎるが、それがシンジの望みだった……

「嫁も貰わずに孫ができたら、あの人はどうするのか？」

たぶん、大笑いして孫を遊びに連れまわすだろう……

実を言うと自分もマスターに付いていきたくはあったんだけど、今日はやらなければならぬことがあるのだ。

シンジは部屋に掛けられた表彰状に目を通して……

「今日は、道場へ顔をださなくちゃいけないんだよね」

そう言って部屋に掛けてある道着を持って、キッチンで軽く朝食を済ませてシンジは出かけていった……

第三東京市のとある一室……

そこに彼は居た。かつて古代に生息した甲冑魚のような鱗を思わせる皮膚を持ち、赤いマントにリングと蛇をもしたエンブレムを模した盾と剣を従えた不自然なほど青白い肌をした男が……

名を” 剣神 オレビス ” といった。

ジッと動かず彼は、目の前に広がる闇だけをジッと見つめていた。

「……どうしたのですか？オレビス……あなたが倒したいと思っ
たシャドームーン討伐の命が下ったのにこんな所で？」

浮かび上がるように現れたのはビシウムである。

「……………」

オレビスは何も語らなかった。

「そうですか？あなたの望む戦いではないのですね」

何かをさとつたかのようなビシウムの言葉にオレビスは……

「ああ……私の求めている戦いではない。だから、その頼みは聞けな
い……………」

オレビスの言葉にビシウムは、納得したかのように頷いた。

「そうでしたね。あなたは、自分の戦いのためにゴルゴムに身を寄
せているだけでしたね……………」

「そうだ。私を利用したければいいさ、三神官。だが、私が
望まぬ戦いは引き受けぬぞ」

「分かっていますよ。ただ、あなたの同郷である”剣聖”を倒した
シャドームーンと戦う事を考えていたらと思っ……………」

「……………剣聖は、自らをその欲に身を任せて滅ぼされたのだ。自業自
得だ……………」

オレビスの言葉はとても冷たいものだった。剣聖は、20年以上前の皆既日食の儀式に嬉々として土足で上がりこんだ上に利用され、非業の死を遂げた。

彼の最期は同情するが、それ以上の感情をオレビスは持ち合わせていなかった。

「そうですか…それなら特に何も言いません。あなたの望む戦いができればいいですね」

そう言ってビシュムは、再び闇の中へ消えていった。

残されたのは、剣神 オレビス。

彼の名を示す”剣神”。その名を示す通り。戦いでしか生きられない剣そのものを現していた。

彼が望む戦い。それは純粹な強さと強さのぶつかり合いである。故に己の欲に任せて振るう剣など彼は持ち合わせていなかったのだ…

「どれだけ待てばいいのだ…もう、三度の儀式を経ても現れぬ」

……………続く

序章 誕生……2014年（前編） 「……シャドームーン……」（後書き）

連続投稿です、まだまだ続きますよ。

序章 誕生……2014年 中編 (1)「……関連……」(前書き)

中編その1です。

2014年 第二東京市 赤心少林館

シンジはいつものように道場で鍛錬を繰り返していた。

華奢に見えてシンジの身体はかなり引き締まっていて、無駄の無いしなやかな筋肉を有している。

動きには無駄はなく、風を切る音が鳴る。

「お、今日も張り切っているな。シンジ君は……」

人のよさそうな中年の男が愛想の良い笑みを浮かべてそう述べた。

「あれ？チヨロさん…今日は、用事があつたんじゃ？」

自分のところのマスターは遊びにいつているのに対して、チヨロという男は、かなりの働き者である。

「ああ……良君が早めに終わらせてくれたから、出番がなくてね」

”ははは”と笑い声を立てながら、チヨロは言った。

こんなにも人のよさそうな彼であるが、昔泥棒をやっていたという話をここで働いているハルミさんから聞いたことがある……

その特技は体の間接を自在に外す事ができるということ……以前、見

せてもらった……

なるほど、これなら何処からでも入れるし、逃げられると納得してしまっただ。

「良さんは、師範は…今日ここに来るのですか？」

「来るんじゃないかな？それにシンジ君は、今日…師範の試験を受けるんだから……」

「ええ…だから、こつやって練習しているんです」

再び、鍛錬を始めたシンジ。その様子にチヨロは、かつて同じ赤心少林拳を学んだ青年の姿を重ねた……

シンジが拳法を習いだしたのは、マスターの元へやってきてから一カ月後の事だった。

その理由は、”強くなりたかった”からだ。マスターから聞かされた仮面ライダーの話。

あのシャドームーンもきつと仮面ライダーだと彼は確信していた。

今度会った時に、強くなった自分を見てもらいたい。人知れず何処かで、誰かを助けているであろう彼の想いに応えたかったから……

強くなって、かつての自分のように泣いている人のために何かかできる力が欲しかった……

ただそれだけだった……

道場の中心でシンジは、これまで己が培ってきた全ての技術を披露した。

純粹なまでの思いに支えられた技の一つ一つに精神が通い、高い完成度を示す……

「これは…凄いな」

この道場の最高師範である良は、彼の技量に感服した。

彼の実力は、既に自分をも超えているのだから……経験が浅いところを除いても十分すぎる……

かなり熱心に鍛錬をしていたが、それ以上に彼の”才能”というものを
見せ付けられた。

「やはり……仮面ライダーは凄いな」

良は、かつて自分が見たあのライダーを思い出した。五つの腕を持ち、
シンジが出合った者と同じ銀色の仮面を付けた金の精神を持つ
た戦士の姿を……

元より、シンジは力で訴える事を好まない性分だった。どちらかとい
うと、他人が傷つくぐらいなら自分がというのが性分である。

そんな彼がこうも熱心に拳法の修練を重ねるのは、自身の人生を変
えたシャドームーンの影響が強いのだろう。

自分も彼に憧れて拳法を習いだしたのだ。シンジも同じだ。彼から
聞いた話だが、シンジ自身もライダーと出会うことによって変わ
れたと言った。

同じ共通の理由を持つもの同士であるが故に頬が緩むのが止められ
なかった。

その間にもシンジの演技は終わった。

「うん。見違えるほど強くなったね。シンジ君、素晴らしい拳法だ
ったよ」

合格のようだ…シンジは、笑みを浮かべて…

「ありがとうございます。師範……」

この日、彼は一つのことをやり遂げた……

第二東京市 市立第二小学校……

放課後の校舎は、まさに不思議な世界だった……

70年代、高度成長期のころには”学校の怪談”と評されて数々の怪奇現象が学校を舞台に語られたものだ……

それは、あの頃は経済が爆発的な進歩を遂げた影で貧しさとそこから来る多くの死の匂いが漂っていたからだった……

90年代のあの荒んだ時代にも再び”怪談”は語られた……

特に語れられた舞台は、音楽室、校庭、そして理科室……

「シャドームーンの探索ですか？大神官様……」

不気味にエアープンプがぶくぶくと鳴りながら、水槽に酸素を送り込んでいる傍では、五所川原と白いフードを着た二人の人物が向かい合っていた……

「その通りだ。寸前のところで逃げられてしまった……」

バラオムは忌々しそうに穿き捨てた。あのシャドームーンには個人的な私怨が彼にはあった。

あの男のおかげでビシユムは一度死んだのだ……今、彼がしてやりたいことはシャドームーンを八つ裂きにしてやりたかったのだ……

「あれは、ビシユムの詰め甘さが原因だ。それ以上のことは、あ
るまい……」

「……?!?!?なに……」

なんでもないことを言うかのような口調のダロムにバラオムは、彼をにらみ付けた。

「まあ、そんな事はどうでもいい。今は早く奴の居場所を突き止めねばなるまい……」

自分から言っておいたことを勝手に自己完結をしたダロムに、何か言っただけでやりたいバラオムだったが、彼の言葉が正論だけに何も言えなかった……

「はい……大神官様の仰せの通りに……私こと”タランチュラ怪人”」

にお任せください」

ニイっと笑った五所川原の顔は人のものではなく、蜘蛛が笑ったかのような顔だった……

「期待しておるぞ……」

ダロムも笑みで応えた……

彼の目に映ったのは先ほどの五所川原の姿はなかった。在ったのは、人間と蜘蛛をあわせたかのような恐ろしい顔立ちをした怪人だった……

紅い夕日が差し込む廊下を女教師が誰かを探すかのような仕草で歩いていた。

「どこへいったのかしら？五所川原先生……」

”こつこつ”とヒールの音を響かせながら、通り過ぎる教室を確認しながら進んでいった……

時折、低学年が描いた絵が不気味に見えた……

「？」

何かの気配が、背後から感じられた……

「何かしら？もう生徒は誰も残っていないはずよ……」

時刻は既に五時半を回っているので、誰も残ってなどいないはずだ

……

ふと床を見たときに、大きな蜘蛛の影がサツと横切った……

「！！！！？！！な……何！！！！？」

顔を強張らせながら、教師は影が居るであろう天井を見上げた。

「……な、なにもいないじゃない……」

ホツとして、彼女は再び五所川原を探すために歩き始めた時。

視界にあった天地が逆転し、教師は廊下の床を真上にあるのを見た。

「な、なに！！！！いやあああああ！！！！！！誰か！！！！！！誰か助けて！！！！！！！！」

「こっちか！ー！」

西側の階段の真上から聞こえてきた。

シンジは急いで、声のする場所へ足を走らせる。そこで、彼はみた。

「なっ！ー！！？何だ…アレは………」

彼が見たもの、それは女性の体が逆さづりになって宙を飛んでいく光景だったのだ。

信じられない光景に目を見張ったシンジだったが、すぐに気を引き締めて宙を真つ直ぐ飛んでいく女性を追った……

理科室から出た五所川原は、いきなり不機嫌な表情をあらわにした。

「……！！……三神官様が直々においでなさった時に、失態を犯してくれるなよ………」

舌打ちをしながら、彼は不機嫌な原因がある先へと足を進めたのだ
った……

五所川原が出て行った理科室では、ダロムとバラオムが残っていた。

「…人海戦術を得意とする蜘蛛怪人を強化した、タランチュラ怪人
……」

早速、彼等の自慢の怪人がその恐るべき力を発揮しているのだ。バ
ラオムは期待の思いを語った。

「…捨て駒もそれなりに、優秀でなくてはものごとは運ばんさ…バ
ラオム……」

ダロムは、怪人に興味は無かった。彼が関心を抱くものは唯一つ……

「シャドームーン…かならずや、お前のキングストーン。ゴルゴム
に返してもらおうぞ……」

ダロムの言葉にバラオムは頷いた。今回のシャドームーン討伐に傘
下しなかったあの男がいれば、ここまで自分やビシユムの手を煩わ
せる事など無かったのと思った。

(…シャドームーンもそうだが、剣神め。戦う理由がないだど!!
!!ふざけるな。ゴルゴムの意にそぐわないものが居ればそれだけ
で理由は十分なはずだ!!!)

異質な光景を追ってシンジは、いつのまにか校舎の屋上の入り口に
来た。

「どこだ？どこに居るんだ……」

立ち入り禁止を促すプレートをどけて、強引に鎖の策を超えてシン
ジは屋上へと足を進めた。

屋上に出たとき、少し強い温い風が頬をかすめた……

既に太陽は傾きかけていて夕闇に照らされた紅い光景が彼の目の前
に広がっていたのだった……

「……確かにこっちへ来たと思うんだけど……」

シンジは、何も無い屋上を探索してみることにした。だが、周り
は自分以外の気配は存在していない……

不思議だ……あれほどの信じられない事があったのにこつても静かにな
れるものだろうか？

何か残っているものは無いか？シンジは薄暗い中、目を凝らして足
元を注意深く凝視しながら歩いた。

何かがあった。それは、銀色の糸だった…

「これは、凄く細い糸だな……」

摘んでみるとおり、それは繊細で今までに見た事が無いほど細いのだ…

だが、かなり頑丈な作りだ。

「ん…ここにも…あ、あそこにも……」

糸があつた周りに目を凝らしてみると同様の糸が無数奇妙な感覚をあけて足元に散らばっていたのだ。

だが、よく見るとそれらはまるで束ねてあつたものが、離れてしまったようにも見える……

「ま、まさか…これで?!?!?!」

シンジの頭にとんでもない仮設が浮上したのだ。だが、そんなものが現実に起こりうるのか？

「…?!?!?!」

糸の先に屋上のフェンスに裁縫の玉結びのように絡まっている光景が……

「まさか……」

シンジは、これまでにない奇妙な気持ちを抑えながらその先にある

ものを見るために足を進めようとした時だった……

”グウウウウウ……アアアアアア”ア”ア”ア……………!!!”

耳に妙な奇声が聞こえてきた。その瞬間、シンジはとっさに前方へ飛び出した……

何かが振り落とされる。振り返ったシンジが見たものは、コンクリートを貫く長く強靱な昆虫の脚だった……

「!!!!!!?!!」

シンジの視界に一番に飛び込んできたのは、乳白色の八つの目だった。

蜘蛛と人間を掛け合わせたかのような独特のフォルムを持ち、背中からは八本の脚が生えていた……

日本で見る蜘蛛と違い、外国産の蜘蛛を思わせる紅く毒々しい腹が脈を打っている光景は見るものに生理的嫌悪感を与えるには十分だった……

”グウウウウ……アアアアアア!!!!!!”

唸り声を上げながら、タランチュラ怪人はシンジ目掛けて飛び掛ってきた。

「なんだ!!!!こいつは!!!!!!?」

とっさの攻撃に何とかシンジは、避けることができたが、半ばパニックを起こしてしまっていつもの冷静さを欠いていたのだ……

ゆえに、態勢を整えられるはずも無く無様に転がるしかなかった……

タランチュラ怪人は、長い脚と口から吐く糸を校旗を掲げるポールに絡めて一気にシンジの真正面へ降りたつた。

”グウウウ！！！！！！アアアアアアアア！！！！！！！！！！”

「しまった！！！！うわああ！！！！！！」

タランチュラ怪人に押し倒されてしまった。

怪人は、外顎を忙しく動かしながらシンジの首元へ顔を近づけてくる……

シンジからは見えなかったが、何かをすることだけは理解していた。だが、それをされてしまったら自分の命はない……

直感がそう告げているのだ……

「こいつめ！！！！！！」

このままやられてなるものかとシンジは、怪人の腹に思いっきり蹴りを加え、そのまま前方へ投げ飛ばした。

怪人の重心が前に傾いていたおかげである……まさに不幸中の幸いでも言っべきだろう……

「まったく。人間如きに遅れをとるとは、情けない同胞だ…いや、こんな屑は同胞でもない」

苛立った口調で彼は、サツと右手を上げた。

呼応するように暗がりの中から、三体のタランチュラ怪人が群がるように集まり、死体をむさぼった……

その脇には、糸でくるめられた繭のようなものがあつた……

そこから、女性の腕と思われる干からびたものがはみ出していたのだ
つた……………

家に帰ったシンジは、たまりに溜まっていた新聞を手当たり次第に開き始めた。

何かが起きている。自分の周りで……シンジは、それを知りたかつた。

「この日も…二人…その前は……三人も……」

様々な行方不明者が、ここ最近多発しているのだ。治安が特に言い訳ではないが、それでも同じ町でこんなにも行方不明者が多発する

だろうか？

「まさか、あの蜘蛛が……」

シンジは、先ほど見たおぞましい生き物が閉まっているのかと思うと何故か怖いと思った。一体、何のために……

「今朝の工場の件も……まさか……」

シンジは昨日の廃工場の一件もなにかあるのではと思った。

あの工場は、セカンドインパクト以前に閉鎖されたものだ。マスターの話では、第二次大戦中に兵器を作っていて、そのときの事故で亡くなった亡霊が出るので誰も近寄らないのだそうだ。

以前、近くを通り過ぎたことがあったが、昼間見ても気味が悪い場所だった。

そんな場所で、爆発事故が起きるだろうか？何か起きたのかもしれない。それには、あの蜘蛛の怪人が関わっている。

確証は無いがつながりが感じられ、それを確かめるためにシンジは表に止めてあったバイクを走らせるべく、部屋をそのままにして出て行った……

バイクにまたがり、出て行くシンジの姿を彼らは見ていた。ダロムとバラオムである……

「まさか、タランチュラ怪人を…生身で倒すとは……」

バラオムは偶然とはいえ、自らの組織が誇る怪人が一体死に、その原因である青年に驚いていた。

「ふん……所詮は、捨て駒だ。役に立たないのであれば、それ以外にありえない……」

「……………」

ダロムの口調にまたも何も言えなかった……

「まあ。奴をもしかしたら、ゴルゴムにと思ったが…愚かなものよの……自ら死へ踏み込もうとするのはな……」

「ああ……惜しい事だ」

「我らも行くとするか、バラオム。ビシユムに合流するために……」

昨夜、爆発事件があったとされる廃工場……

警察関係者の車両が紅く染まり、体液を抜かれたかつては警官だったモノ達が至る所に報知されていた……

工場の至る所は昨夜の凄まじい出来事を物語るような凄まじい破壊による傷跡があった……

廃工場から離れた洞窟に彼は居た……

「はあ、はあ、追っ手が多すぎる……」

シャドームーンである。銀色の体の至る所から出血し、意識が朦朧とするのを感じた。

外には、奴らが”ゴルゴム”の大軍が自分を探しているのだ……

”グウウウ……アアアアア……”

タランチュラ怪人の群れが……下顎を動かしながら、移動する様は、見る人が見れば嫌悪感を催すほどのものだろう……

「探すのです。タランチュラ怪人……シャドームーンを……」

群れを宙に浮かんで見下ろすようにビシユムが指示を出す。指示を聞いた怪人の群れは、至る所を隈なく搜索する。

至らない怪人たちを内心、罵りながらビシウム自身も工場周辺を探
す。

何処にもいない……あの時、小賢しいことに、シャドームーンは……

ビシウムの脳裏に、シャドームーンが投げつけてきた紅い刀身を持
った短剣によつて頬に傷を付けられた光景が浮かんだ……

思い出すだけで忌まわしい……自分のこの手で殺してやらねば気が
すまない……

その際に逃げられた……何処へ……何処へ逃げた……シャドームーン
!!!!!!!!!!!!

シンジは、バイクを公道で走らせていた。目的地は、事件のあった
廃工場……

何かがあるかも知れない。ただ、漠然としているが関係がある。そ
れを確かめなければならぬ……

危険な事である事は、十分に承知している。だけど、自分はそこへ
行かねばならないという何かが内に渦巻いているのだ……

分からなかった。何故だろうか？

昨夜、久しぶりにシャドームーンの事を思い出した……

（まさか…彼に何かがあったのか？なら、それなら…行かなくちゃ、だって、彼は僕をあそこから助け出してくれたんだから！！！！）

そこに彼が居る事を自分は確信しているかも知れない。かつて、聞かされた仮面ライダー達が現れた時期、このような得体の知れない事件が数多く報道されたのも事実なのだから……

80年代に、女優の月岡ゆかりが謎の死を遂げ、黒松という教授が変死体となって発見された……

今でも迷宮入りな事件である。勝手な憶測かもしれないが、もしかしたらそこには自分の想像を超える何かがあったと思う……

そして、その想像を超えるものの中に彼ら”仮面ライダー”達はいた……

この町で起ころうとしている事件もそうした何かが関わっている。だとしたら、そこにシャドームーンも居る……

序章 誕生……2014年 中編 (1)「……関連……」(後書き)

続きましては、中編2に続きます。

序章 誕生……2014年(中篇2)「……罪……」(前書き)

中編2です。

序章 誕生……2014年（中篇2）「……罪……」

シンジは、途中で不穏なものを感じたのかバイクから降りて木々をかいくぐりながら灰工場へ向かっていく。

「……やっぱり、居たよ……」

案の定、あの蜘蛛の化け物が工場付近を三匹ほどごろついていたのだった……

「そのまま。近づくのは無理だよ……どうみても……」

学校で遭遇したときは、とにかく勢いに任せて倒すことができたが、もう一度やれといわれたら絶対にできない……

それでも今日、拳法の師範代の器量を認められたのに、なんだか情けない気がする……

だが、あんな怪物相手では、人間の技は通用しない……

「どうしようか？一応、武器はあるには、あるんだけど……」

シンジは肩にかけたショルダーバックにつめてある火炎瓶に視線を向けた。

これらは、出発する前に急ごしらえで作った武器だ。作り方は、お世話になっているマスターに教わった。

暗い想像が脳裏を駆け巡ったが、すぐに気持ちを切り替える。悪いことを考えたところで、どうにかできるといふことなんてないのだから……

「彼は…どこにいるんだろうか？」

確信がないのだが、彼がこの件に関わっているとシンジは思っていたのだ……

シャドームーンが……

当のシャドームーンは、洞窟の中で身を潜めて様子を伺っていたのだが…

視線の先に居るタランチュラ怪人の内の一匹が何かをかぎつけたようにこちらのほうへ頭部を向けてきたのだった……

「しまった!!？」

驚きの声を上げたと同時に、タランチュラ怪人の口から大量の糸が噴射されシャドームーンの首に絡みついた。

「見つかりましたか……」

怪人たちの騒ぎようからビシユムは、にやりと笑った。彼女にとって朗報だから……

彼女の笑みに呼応するように切られた傷から、一滴の血が滴り始めたのだった……

怪人たちが一箇所に集まり始めたのだった。当然、それはビシユムだけではなく、物陰から様子を伺っていたシンジにも何かがあったと気づかせるには十分なものだった。

「何かがあるんだ。いるかな……」

脳裏に幼い頃に自分に優しく接してくれた銀色の体を持った男の姿が浮かんだ……

彼が危機に陥っているのなら、助けた上げたいとシンジは思った。仮に助け出しても自分は戦えない……

ならば、どうすれば……

「できる」とは……………」

シンジは持ってきた火炎瓶と近くに止めてあるバイクを交互に見た
……………」

「くっ…！！！！こいつめ！！！！」

シャドームーンは、首に絡みついた糸の束を力の限りつかみ、思い
つきりスイングしてタランチュラ怪人を近くの岩場にたたきつけた。
だがすぐに別の怪人による攻撃が開始され、シャドームーンの四肢
は高い強度の糸によって締め上げられる……………」

”ギギギギギギ”と筋肉が締め付けられ、骨がきしみ始める……………」

”グああああ！！！！！！！！”

”あ”あ”あ”あ”ああああ”アアアアア”

数体の怪人たちがシャドームーンを取り囲む。

「ホホホホホ…無様なものですね。シャドームーン様」

皮肉な言葉を浴びせると共に、ビシユムがやってきた。

「…ビシユムっ！！！」

緑色の目に怒りを浮かべてシャドームーンは彼女をにらんだ。

「ホホホホホ。 光栄です。 また名前を呼んでいただけるとは…
…」

彼女の口調こそは懐かしいものへの暖かい言葉にも聞こえるが、その表情は険しく、憎悪に満ち溢れていた……

「ビシユム…その辺でよいだろう」

二人のやり取りに口を挟むような形で、ダロムが現れた。 続いてバラオムも……

「こんな奴に口を聞く必要は無いぞ。 ビシユム…」

シャドームーンに関心を寄せている彼女が気に入らないのか、釘をさすような言葉をバラオムは掛けた。

「三神官っ！！っ！！！！」

シャドームーンに発言は許さんといわんばかりに、タランチュラ怪

人達は彼を拘束する糸に力をこめたのだった……

「ご苦労だ、タランチュラ怪人……」

バラオムは、気を利かせた怪人たちに賛辞の言葉を掛けた。ダロムは、常にシャドームーンのベルトの奥にある緑色の光を放つキング・ストーンにのみ関心を抱いていた。

「シャドームーン。いや、秋月信彦といおうか……」

ダロムの口から、かつての名を呼ばれたシャドームーンは僅かに動揺の色を示した。

「……キングストーンを返してもらおうぞ……」

「くっ！！！？」

白い右手から、鋭い五本の爪がシャドームーンに向けられるような形で伸びた……

拘束されているシャドームーンは、動こうにも動けなかった。力が衰えた自分ではこの状況を打開することはできない……

ここまでか……と覚悟したときだった……

”ゴオオン！！！！ブオオオオン！！！！”

何かがこちらへ向かってくるのだった。配管から吹き出る爆音のよ
うだ……

「ん……あれは？」

バラオムは、見覚えのあるバイクがライトもつけずにこちらへ向かってくるのを見た。あれは、確か……

「あの男か……」

ダロムがバラオムの疑問に応えるように声を発した。

そうだ……あのバイクは……

一気に加速するようにこちらへ来る。

「愚かな……大人しくしていればいいものを……」

バラオムは、バイクに標準を合わせるようにして指先をむけ、強力なエネルギーの波を発射した。

だが、間一髪のところまで回避されたとのだ……

バイクに乗っているのは、シンジだった。ただ無我夢中で走った……

思考さえおぼつかないほど、今の彼は一直線に走る。かつての恩人を助けるために……

持ってきたバックを力任せに彼らが固まっているところへ投げつけた。

「おのれ……こしゃくなことを……」

回避されたのが気に入らなかったのか、バラオムはシンジが投げつけてきたバツクにエネルギーの波をぶつけようとした。

「待て！！！！バラオム！！！！」

制止するダロムの言葉はむなしく、バツクの中にあつた大量の火炎瓶に引火し、爆発と大量の炎が彼らを襲った。

”ギャアアアアアア！！！！！！”

”キイイイイイイイ！！！！！！”

悲鳴のような声を上げてタランチュラ怪人たちは炎から逃げ出し、彼らの陣形が完全に乱れてしまった。

「静まれ！！！！静まるのだ！！！！！！！！」

バラオムが、怪人たちを落ち着かせるために怒声を上げた。そんな彼にビシウムは

「あなたが、引き起こしたことでしょ……」

とつめたい言葉を投げかけるのだった……

「ん？シャドームーン！！！！！！」

ビシウムはシャドームーンがいなくなったことに気がついた。先ほど炎で糸がもろくなり焼き切れてしまっていたのだった……

彼女が見た先には、バイクの後部座席にまたがって高速で去ってい

く彼の姿があったのだ……

三道の道路に出た二人は、さらに加速してより遠くへ行く……

「大丈夫ですか？シャドームーンさん」

いきなり現れて助けてくれた青年が自分に話しかけてきた。

「ああ、ありがとう。助けてくれて……君は……」

「覚えてませんか？十二年前に夜に、ディアボロに連れて行ってくれたでしょ」

少し笑うような声で語りかけてきた。

「シンジ君か！！?!……君なのか……」

どうやら、あのときであった少年が成長した青年だった……

「そうですよ。ずっと、あなたにもう一度会いたくて何度も探したんですよ」

シンジの声は、懐かしい響きで一杯だった。

シャドームーンのほうも同じだった。まさか、あのときの少年が成長して自分の危機を救ってくれるなんて誰が想像しただろうと……

「そうか……」

彼の好意にもう一度、感謝の言葉を掛けたいと思ったが……

シンジはサイドミラーに白い影が三つ、宙を浮いて追いかけてくるのを見た。

「追ってきた！……！つかまっててください！……！」

アクセルをさらに掛けて、バイクを加速させる。

蜘蛛の怪物たちはいない。追ってきているのは、あの白いフードの三人だけ……

「忌々しい奴だ……」

バラオムは苛立ちの声を上げて、もう一度攻撃を開始しようとしたが……

「お待ちなさい。バラオム……見なさい……」

ビシユムの視線の先を追うと、急なカーブがあった。ガードレールの先は、険しい崖である……

「……ビシユム……」

バラオムが他に言おうとするものの、ビシユムは聞く耳を持たずに、目から高速で光弾を発射させて、シンジらがのるバイクの後輪に命中させた。

「しまった！……ブレーキが利かない！……！！！」

「シンジ！……！！！」

後輪のタイヤが裂け、勢いそのままにバイクがガードレールをつきやぶり、深い崖へと落ちていった……

何処と無く頼りない感触を感じた数秒後、激しい痛みと共にシンジの意識がブラックアウトした……

虫の息のシンジを背中に背負いながらシャドームーンは、森を走っていた。

「はあ、はあ……まだ、追ってくるか!!?」

振り返ったら、直ぐ真後ろに奴らが居るかもしれない。彼は、己の記憶の奥に巢食う悪夢の再現だと感じていた。

「逃げても無駄だ。シャドームーン」

森を駆ける銀色の人影を見て、白いローブの男は口を裂くような笑みを浮かべた。

「あれが、かつての我らの世紀王か…情けない。我らから逃げる事しかできないとは………」

白いローブの奥にある青くのっぺりとした顔に鋭い眼光を放つ目をぎらつかせながら、銀色の影に落胆の声を上げていた。

「フン。創世王様が完全復活をなされた今、世紀王など不要。だが、あのキングストーンは貴重だ。バラオム」

「なるほど、あの石の力は絶大なパワーを持っている。故に野放しなど出来んな」

バラオムと呼ばれた男は、意思を固めたのかシャドームーンを追跡すべく夜の空を舞った。

続くようにもう一人の男、ダロムも夜に溶け込むように消えていった……

「……………」

ビシユムも無言のまま二人より少し遅れて、闇に消えた……………」

「う……………う……………」

「大丈夫だ。もう少しだけでいい…頑張ってくれ」

傷にうめき声を上げるシンジにシャドームーンは、必死に呼びかけた。

「何処でもいい。やつらから身を隠せる場所が欲しい」

緑色のマクロアイが周囲を探索する。そこであるものを捕らえた。

蠍を模した古びたエンブレムを……………」

その下には”DEATHTRON”の文字が……………」

「はあ、はあ、はあ……………」

シャドームーンは疲れていた。蘇った神官達から何とか身を隠す事ができたものが見つかるのは時間の問題でしかなかった。

偶然にも洞窟を見つけることが出来た。いや、洞窟というよりは明らかに人口のものとしか思えない空洞だった……………

金属製の床は所々が錆びており、また苔が群生している。

記憶の奥底にあるゴルゴムの神殿とは違い、純粋な人間の科学力で作られてはいるが、こんな人気の無い場所に規模の大きい地下基地を作るからには、碌でもない人間には違いない。

だが、身を隠せてシンジを治療できるのならそんな事などどうでもいいことであった。

「何か使えるものはないのか……………」

治療できるものを探すべく、シャドームーンは基地の奥へと歩みを進めたのだった。

「ここが治療室か……………」

ここにあるのは、悪しき野望の成れの果てと化した骸だけかもしれないが、それでも彼は希望を捨てなかった。

彼を助けられる何かがあると信じて……………

治療室は、嚴重なロックがしかれていたが力任せにこじ開け、シャドームーンは室内へ足を進めた。

完全防備だったためか室内は、いつでも使える状態だった。

「う……………」

膝を付くようにシャドームーンは倒れた。力が入らない。むしろ時間が経つことに失われていくのを感じる。

「どうすればいい……………このままでは……………」

あの三人がここを見つけるのは時間の問題だろう。だが、彼らを倒す力はもはや自分にはない。

シンジを護る事も……………

そして、彼らは自分のキングストーンを奪い、再びあの悪夢を再現するに違いない。だからこそ、渡すわけには行かなかった。

立ち止まるしかなかった彼の脳裏にある希望が浮かんだ。それは恐ろしく残酷な運命を生み出す事であったが……

……自らの手で……

「何て奴だ。俺は……結局ゴルゴムと何にも変わらないのか……」
彼の心に激しい自己嫌悪が生まれた。記憶を取り戻した時以上の凄まじいモノが吹き荒れた……

（うつ……そうか…僕は、やられちゃったんだ。あの白い奴らに……）

白濁とした意識を覚醒してシンジは、苦しんでいるシャドームーンを見た。

「……どうしたんですか？シャドームーンさん。どうして泣いているんです……」

シンジは、彼が酷い自己嫌悪に陥っているのを感じていた。

「うっ……うっ……シンジ。お前はこんな目にあわせた俺を心配するのか？」

搾り出すような声にシンジは、

「悪いのは、あなたじゃなくてゴルゴムでしょう。だって、あなたは僕を必死で護ろうとしてくれたから。こうやって話すことだってできるんだから……」

何故、こんな目にあわせた自分を氣遣ってくれるのだ。…シンジ。
お前は光太郎と同じだ……

「うっ……うっ……」

「しっかりしろ……しっかりするんだ……」

再び傷にうめきだしたシンジにシャドームーンは、必死で呼びかけた。だが、出血の量があまりに酷すぎる。

先ほどの恐ろしく悪魔じみた案が再びシャドームーンを襲う……

だが、それでも構わないと思った。この青年を死なせたくない。どんな形であろうと生きてもらいたかった。

「俺は、どこまでも落ちぶれるんだな。だけど…それでも構わない
! ! ! !」

シャドームーンは、シンジを寝台に載せて指先に力を集中した。

「シンジ。もうお前は人間じゃなくなる。だが、お前を救うためにはこれしかないんだ! ! ! !」

指先から伸びる光は、シンジの身体の至る所に当たり、彼の姿を少しずつ変貌させていった……

「……………許してくれ……………」

声を震わせたシャドームーンの声が室内に響き渡った……………

どれだけの時間が経っただろうか…そんな感覚を感じる暇さえなく、
彼は力を寝台に横たわる青年に注いだ……………

死に掛けていた肉体が胎動し、新たな”力”をみなぎらせていく。

「後は、俺の命であるキングストーンを……………」

最後にベルトに抱いている緑色の光っている石をシンジの腰につけられたベルトに託した……………」

もう自分には、この石を扱えるだけの体力は無い…ゴルゴムに渡すぐらいなら…………この青年を生かすために使いたかった……………」

「なんだ…ここは？」

「生意気な人間どもの作った施設であろう」

三神官は、足元に転がる白骨化した黒尽くめの死体を横目に施設を進んでいった。

「ふん…………我らの真似のつもりか。身の程知らずが」

バラオムは、侮蔑の目で施設を見た。はっきり言って、下らなかつた。

たかが人間の分際で支配者を目指すなど……………汚らしい……………

「ですが、これが人間の行き先ですよ。ホホホホホ」

嬉々とした表情を浮かべながらビシウムは言った。

どんな人間だろうが、滅びる様はどれも心地良い。故に作った当人の心情など知ったことではない。

ダロムの方は、特に興味が無いのか無言のまま歩みを進める。

「バラオム、ビシウムよ、そんなことよりキングストーンの回収だ」

彼の関心は月の石キングストーンだけであつた……………

「向こうから来たようだぞ……………」

カシャン……………カッーン……………カシャン……………カッーン……………

バラオムは、奥から聞こえてくるレッグトリガーの独特の音からそう応えた。

「ん…それにしては、生命の波動が極端に薄い…これは…!!…!!?」

ダロムは、直にその理由に気がついた。

そう、彼が求めているものがそこに無かったのだから……

苦々しく思っていると、自分達の眼前に銀色の影が立ちふさがった

……

「悪いが、此処から先は行かせないぞ。三神官！……！」

シャドームーンである。彼のベルトに、キング・ストーンは無かった……

彼は三神官、目掛けて飛び掛った。

「フン……。こちらもだ、シャドームーン。お前になど構っている暇はないのだ」

ダロムは、シャドームーン目掛けて右手を突き出した。

「くっ！……！」

シャドームーンを襲ったのは、強力な念力だった。

吹き飛ばされ、彼は壁にぶつかってしまった。衝撃により配管が吹き飛び、スクラップの金属音が木霊した。

だが此処で倒れては駄目だ。まだやらなければならないことがある……それは……

「三神官を何とかしないと、駄目だ。シンジを護らなければ……！」

自らの力の源を無くした彼の力など底がしれている。だが、やらね

ばなるまい。

彼に勝手な業を押し付けてしまった。自分出来る唯一の償いなら

……

近づいてくる三つの気配に向かってシャドームーンは歩き出した……

ダロムを始めとした三神官にとって、キングストーンがないシャドームーンなど、煩わしいだけだった。

「むん！……！」

ダロムの念力により鉄筋が降り注ぎ、シャドームーンの身体を容赦なく痛めつける。

「ぐあっ！……！」

背中と頭に走る衝撃に耐えながらもシャドームーンはダロムに飛び掛る。

「しぶとい奴め！……！」

バラオムは、ダロムに飛び掛らんとするシャドームーン目掛けて指先から強力なエネルギーの波をぶつけた。

「ぐ……うっ……！！……うわあああああ！！……！！……！」

強化された外骨格であるリプラス・フォームから激しい火花が飛び散る。

「あれが…創世王だ……」

背後から声がした。それは、自分にとってとても馴染み深い響きを持ったものだった……

そう…自分の声だ……

振り返ったシンジの目に、映ったのは……

……続く……

序章 誕生……2014年(中篇2)「……罪……」(後書き)

続きましては、後編、最後です。

序章 誕生 2014年 (後編) 「……………夜明け……………」 (前書き)

ラストパートです。どうぞー!!!

” あれが…創世王だ…………”

自分とまったく同じ声を発する人物を確かめるべく振り返ったシンジが見たものは…………

「ん?…ここは……………」

少しずつ意識が覚醒しつつ、自らの身体に異変を感じていた。

体中に何か大きな力が駆け巡っている。それは、あの夢に出てきた蝗の勢いに感覚が良く似ている。

少しずつ明確になっていく視界が見たのは、黒く変化した自分の手だった…………

「う、これは?!?!?」

さらに変化が進む。その手が昆虫を思わせる皮膚と化しさらに強固な鎧のようなものへ…………

そして、彼は見た…………鏡に映し出された己の姿を…………

彼は逃げた。

もしかしたら、自分の行為が追い詰めてしまったかもしれない。彼がこの決断を下すことは、想像がつかないほどに辛く重いことだったろう……

自分がこのまま遠くへ逃げることを彼は望んでいるだろう……だからこそ、やっていけるだけの力を自分に与えたのだ。

だけど、彼には悪いがそんな事はできない……

「あなたを見捨てたりできない……」

シンジは、幼い頃に誰からも相手にされなかった時に真摯に自分と向き合い手を差し伸べてくれたシャドームーンのことをどうしても見捨てることはできなかった。

このまま逃げたら、絶対に後悔する……だからこそ、行かなければならないと……

すでに人のそれをはるかに超越した体にさらに巨大な力が脈動していくのを感じた……

手術室のタイルに、レッグトリガー独特の機械音が木霊した……

「う……なんだ？ベルトがやけに疼くな……」

自身の腹につけられたベルトの中にある何かが激しく動いているのをシンジは感じるのだった……

とある廃墟でそれは目覚めた……

暗く、長い年月をかけて積み重なった埃が目立つ場所だった……

古代の神殿を思わせる場所で、神への穀物を捧げるための台座と思われるところにそれは、置かれていた……

プレートには……戦闘型 生体二輪車 バトルホッパー 蝗龍”こ
うりゅう”

”…ドクン…ドクン…”

体内の奥深くにある人口脳サイバネティックブレインが意識を覚醒
させていく……

蝗を思わせる目を赤く光らせたと同時に、赤茶色を基調としたボデ
ィーにその生命力をみなぎらせ、駆動音をならし、荒々しくクラッ
シャーを唸らせ、巻きつく鎖を破壊していく…

自らを封じる戒めの鎖を引き千切り、蝗龍は台座を飛び出した……

キングストーンを抱いた新しい戦士の鼓動を感じて……

神殿内を爆走し、長い回廊を経て、蝗龍は夜の闇へと消えていった
……

「煩わせおつて……」

バラオムは忌々しい視線を倒れているシャドームーンに投げかけた
と同時に両手を彼に向けた。

「バラオム…止めなどささなくてもよい…どうせ、こやつは直ぐに
死ぬ……」

ダロムは関心が無いような調子でそういった。バラオムは、シャド
ームーンを自らの手で殺したかった。それに水を差されたことにム
ツとした視線をダロムに向けた。

だが…

「少なくとも…ビシユムはそう望んでいるだろう……」

「……………」

ふと視線を向けた先には、穏やかな笑みを浮かべるビシユムの姿があった。どうやら、このままシャドームーンが朽ちていくのを楽しみたいようだった……

「まあ、それもいいだろう……」

バラオムは、両手を収めてそう言い放った。ビシユムが望むのならと……

「……………そうか……」

ダロムは内心、バラオムを嘲っていた。

(…以前もお前は、ビシユムを気にかけていたな…お前の甘さはそれだというのに、分かんのか?)

バラオムは、組織のものに関しては非常に甘いところがある。特に、捨て駒同然の怪人に情までもっているのだ……

情を持っているといっても表立って、怪人のために動くようなことはない。

(…まあいい。今は、キングストーンだ……)

ダロムがシャドームーンが護っていたとされる通路の奥へと歩もう

としたときだった……

”カツン…カシャーん……カツン……カシャーん……”

「ん…なんだ？」

ダロムは、突然頭によぎった波動に信じられないといわんばかりに、赤い目を大きく見開いた。

「なんだと…世紀王だと！！！！？」

そこには、蝗の姿を模した銀色の装甲を身に纏った男がこちらに向かって歩いてくる光景があったのだ。

”カツン…カシャーん……カツン……カシャーん……”

足に付けられたトリガーを鳴らしながらゆっくり二人の神官の元へと近づいてくる。

薄れ掛けた意識の中、シャドームーンは

「…目覚めたんだな。シンジ……」

その声は、酷く震えていた……

「なぜ…逃げなかった……」

その言葉と共にシャドームーンの意識が暗転した……薄れていく意識の中…忌まわしいあの声が耳に木霊した……

”人間の心に悪がある限り。必ず蘇る!!!!!!!!!!忘れるな!!!!!!”

おぼろげながら、崩れていく神殿の姿を見た…………

「シャドームーンに似ているな…………」

変化する前のシャドームーンに似ているものの彼と違って装甲の筋は生物的な筋肉を模しており、機械的な印象を思わせる銀に生物的な脈動感を与えていたのだ…………

「奴からキングストーンのエナジーを感じる…………」

ダロムがそういった瞬間、その銀色の男は三人目掛けて大きく飛翔したのだ。

「!!!!!!!!?!!!!」

「!!!!!!!!?!!??!!!!」

「ええい!!!!!!!!!!ぞかし!!!!!!!!!!」

バラオムは、両手からエネルギーの波を銀色の男にぶつけるが、寸前のところで回避されたと思ったたらこちらへ全速力で向かってきた。

「なんだと！！！！！！」

驚きの声をあげる前に、懐まで、もぐりこまれた！！！！

「はああああ！！！！！！！」

気迫を伴った声と共に、肘打ちをバラオムは食らわされてしまった。

「ぐおっ！！！！！！！」

感じた衝撃にバラオムは、思わず膝を突いてしまった。

「！！！？！！貴様……！」

膝を付かされたことに屈辱を感じ、強烈な敵意を銀色の男に向けるバラオムであった。

「バラオム！！！！！！！」

「ビシユム！？！」

背後では、バラオムに引くような動作をした後にビシユムは、両目から強力なエネルギーの塊を高速で放つ。

エネルギーの塊を銀色の男は、もろに食らってしまい、銀色の身体に火花が飛び散った。

だが、銀色の男は攻撃を諸共せず二人へ向かっていった。

「うわあああああああ!!!!!!!!!」

咆哮を上げながら、銀色の男こと碇シンジは、体中を巡る凄まじい力の赴くままに二人につかみかかる。

「フン!!!!!!」

バラオムは両手を掲げて、緑色に光る壁を発生させるものの変化したシンジのパワーはそれをいとも簡単に砕いてしまった。

「おのれ……シャドームーンも余計なことをしてくれる……」

ダロムは、距離を置いて

「ムウウウン!!!!!!」

念力を発生させて、鉄筋等をシンジにぶつけるが、あまり良い効果が上がられない……

「こんなもの!!!!!!」

力任せに鉄筋をつかみ、三神官へシンジはそれを投げつけた。

「なんという力だ……厄介な……」

凄まじい力に、ダロムはこの場は一旦引いたほうがいいと考えた。だが、ただ引くだけと言う事は考えてなどいなかった

「タランチュラ怪人！！！！！」

サツと手を上げると、いつの間にか基地内の至る所で八つの光をともした異形の影が一斉に動き出した。

「…大神官様……」

「おお、来たか…」

バラオムのところへ現れたのは、五所川原である。その顔はすでに人間のものではなくなっていた……

「あ奴を始末し、キングストーンを手に入れるのだ！！！！！」

「お任せを……」

五所川原は、顔だけではなく全体を変化させた。彼の変化に合わせてるように蜘蛛の怪人たちがシンジを取り囲むように集まり始めたのだ……

「全ては、ゴルゴムと大神官様のために……」

五所川原の変化は終わった。他の蜘蛛の怪人よりもはるかに大きな巨体を誇る怪人がそこにいた……

「この場合は、任せたぞ……」

ダロムはニヤリと笑みを浮かべてその場を後にした。

（それにしても…なんて身体だ…ニトログリセリンを入られた気分だ……）

シンジは、シャドームーンを助けたい一身で飛び出したものの、肝心の自身の身体の扱いにくさに手を焼いていた。

「!!!?!!!!!!」

そんな彼の事情を汲み取る理由も義理も無い怪人たちが一斉にシンジに襲い掛かってきた。

外顎を向きだしにして、タランチュラ怪人が飛び掛ってくる。

「はああ!?!?!」

怪人の顔面を両断するようにして手刀を繰り出した。

” ギイイイ…… ”

繰り出された手刀によって、怪人の頭骨が割れ、中の臓物が勢いよく飛び出した。

「えっ！！！！」

凄まじいパワーである。ここまでとは、シンジ自身も驚いていたと同時にあまりに強い力に恐れすら抱いた……

「くっ！！？！！！」

驚くまもなく、怪人たちはシンジに群がるように飛び掛ってきた。

彼自身経験したことの無い力の扱いと戦いにシンジは戸惑っていた

……

” ギイイ！！！！！”

” ギイイ！！！！！”

戸惑う彼が好都合なのか、タランチュラ怪人たちは一斉に糸を吹きかけた。

「！！！！？！！！！！」

強力な糸が絡みつき、シンジを締め上げる。

「所詮は…宝の持ち腐れ…キングストーンを渡せ！！！！！」

一回り大きなタランチュラ怪人が、群がるほかの怪人たちを押しつけてシンジの元へやってくる。

直接、彼の持つキングストーンを奪うために……

「…キングストーン…」

シンジは、聞きなれない単語に疑問符を浮かべたものの、直ぐにそれが何なのか分かった。自分を助けるために、シャドームーンが与えてくれた彼にとって命とも言えるものだ……

” 渡せない…絶対にお前達になんかにこれを！！！！”

自身を助けるために死を覚悟した彼の意思を無駄にはしたくなかった。だからこそ、彼は自分を助けるために戦うために生きて……

それを、このおぞましい悪魔達に渡してしまつたら……

” 創世王”

夢の中に現れたあの黒い魔王につながる彼らに渡してはならないと

……

強い意志を緑色の目に燃え上がらせ、シンジは力任せに糸を千切り、迫ってくる五所川原が変化した怪人に鋭い拳をぶつけたのだった。

「うっ！！！！ぐあああああ！！！！！」

その威力に五所川原は他の怪人たちを巻き込んで後方へ吹っ飛ばされた。

戸惑って肩に力が入りすぎていたが、自身のやるべき事を自覚し、シンジは本来の戦い方を少しずつよみがえらせていく……

「…赤心少林券……」

呼吸を整え、シンジは向かってくる怪人に鋭い蹴りと拳をぶつけた。声を上げることなく、怪人は沈黙した……それだけ凄まじい衝撃が襲ってきたのだ……

” ギイイイアアアア！！！！”

仲間が倒されたことに怒りの声を上げながら、怪人が向かってきたが……

「そこか……」

シンジは、完全に怪人の動きを補足していた。強く生まれ変わった知覚神経の発達もそうだが、幼い頃より鍛えてきた修練の結果が大いに生かされていたのだ。

銀の拳が醜悪な怪人の顔面を捉え、蹴りがその赤い腹に衝撃を与えていく。

また一匹、怪人が沈黙する……

その頃、三神官達は、この廃墟の中枢といえる場所に来ていた……

「ここは？」

バラオムが疑問の声を上げる。

「この基地の中枢ですか？ダロム……」

ビシユムが確認を取るようにダロムに問いかけた。

「そうだ……ここを刺激してやれば、あ奴を死にぞくないこと始末できる……」

「そ、それでは、今、奴と戦っているタランチュラ怪人たちは、どうするのだ？」

ダロムの同胞を犠牲とする非情な作戦に抗議の声を上げるバラオムであったが……

「所詮、怪人など捨て駒だ……ゴルゴムの栄誉のためなら……」

「そ、そうか……やむ終えんな。それでは……」

ダロムの言葉にバラオムは沈黙するしかなかった。強く影響させる言葉を彼が言えなかったからだ……

「ムウウウウウウン！！！！！！」

念力で基地の中枢にある動力炉に刺激をダロムは与えた……

久方ぶりに活性化し始めた動力炉のメーターが異常な勢いで上がっていき、蒸気が飛び出し、至る所で軋む音が響きだしたのだった…

「キング・ストーンは惜しいところだが、あ奴を野放しにはできぬ……」

ダロムはそう言って、この基地を後にするのだった……

不気味な振動が基地内を木霊し始めた……

「ん…いつたい、何だ、この地響きは……」

シンジもいきなり始まった不自然な事態をいぶかしんだのだが、直ぐにその考えを切り離し、目の前にいる怪人を倒すことに集中する。

すでに怪人のほとんどは倒され、残っているのはリーダー格の五所川原だけであった……

「すべては……!!!!ゴルゴムの……!!!!!!」

五所川原は、シンジを倒すために奮戦するものの力任せに突撃するだけで、シンジが駆使する技の前では、全てが無駄になっていった

……

「ぐおおお!!!!……」

身体を襲う痛みによるめく五所川原の変化した怪人……

「これで最後だ……」

シンジは、本能が命じるままに飛び上がった。脚に備え付けられたレッグトリガーによって、身体が大きく飛翔する。

緑色の矢じりのような淡い光を脚に纏わせ、怪人目掛けてそれを打ち込んだ。

「あああああ!!!!……!!!!……」

臨界を越えたダメージが体中に火をつけるような痛みが走り、最後の怪人は倒れた……

そして……原子の炎となって消えた……

怪人を倒したと同時に、床が大きく揺れ始めた。

「な、何だ!!!まさか、あの白い奴らが!!!?」

今、気が付いたが、あの三人が居なくなっていたのだった……

さらに、基地全体が激しくゆれ、老朽化した施設が崩壊し始めた……

……

「シャドームーンさん!!!!!!」

シンジは、見た。瓦礫に埋もれようとしている恩人の姿を……

居ても立っても居られず、彼の元へ駆け出した。

(……また……ここなのか……)

シャドームーンを見た。異様な邪気に包まれた神殿が崩壊していく
光景を……

また、ここで自分は終わるのだろうか？

”死ぬな、シャドームーン。かならず戻ってくるからな……”

「……光太郎……」

薄れ行く意識の中、兄弟の声が聞こえた……

「戻ってきてくれたのか……」

彼は見た。自身の銀色の体と対象をなす漆黒の体を持った男が膝を
突き、手を差し伸べている光景を……

そして、幼子のように抱えられ、その場を後にした……

シャドームーンを背負いながらシンジは崩壊する施設をひたすら走
った。

だが、爆発の勢いは凄まじく彼の行く手を容赦なく阻むのだった…

「絶対に…諦めるものか！！！！！」

容赦の無い事態にシンジは、おのれに言い聞かせるようにしてひたすら走った……

幼い頃は、いつも諦めかけていた自分だったが、これだけは絶対に諦め切れなかった。自分を助けてくれ、命をも救ってくれたこの人を見殺しになど、絶対にできなかったからだ……

”ゴウン…ゴウン！！！！”

シンジにとって聞きなれた駆動音が響いた。そして、それは、爆発の炎を突き抜け、彼の目の前に現れた。

それは、赤茶色を基調とした蝗を模したバイクであった…

「お前は……」

突然現れたバイクに声を上げたシンジだったが、頭の中に何かが駆け巡った。

「そうか…お前は、味方なんだな」

シンジの声に呼応するように両目を紅く点灯させた。

「じゃあ、頼むよ！！！！」

時間が無いので、急いでバイクに跨り、シャドームーンとともにシ

ンジは崩壊する基地から脱出するのだった……

基地は、激しい爆発に巻き込まれ、崩壊するのだった……

小高い丘に三神官はいた……

「これで奴も、シャドームーンも終わりだ……」

ダロムは、爆発し炎上した基地を見てそう思ったのだったが……

「あれは……!!!」

バラオムは、爆発の中を突き抜けてくる影を見た。

それは蝗を模したバイクに跨った銀色の男とシャドームーンであったからだ……

「……おのれ……」

ダロムは、忌々しそうに言った。だが、直ぐに攻撃できる状態では

なかったもので、何もできなかった。

「これは、大神官長様と創世王様に報告しておかなければならない事態になりましたね……」

ビシユムも内心、憎い男が殺せなかったことに怒りを感じていたのだが、気をなんとかして落ち着けていうのだった。

三神官は忌々しそうに、視線をシンジに向けた後、空に溶け込むようにしてその場から消えた……

すでに夜が明けようとしていた……

「俺は…助かったのか……」

シャドームーンは、穏やかな朝日の日差しとともに意識を覚醒させた……

「気が付いたんですか……!! シャドームーンさん……!!」

ふと声が発せられた方をみるとそこには、自分に酷似した銀色の男が心配そうに見下ろしていたのだ。

仮面に似た顔に表情は無いが、その雰囲気から察することができた。

「シンジか…そうか、あの時助けてくれたのは…君だったのか……」

「ええ、ですが、彼が着てくれたおかげです…」

シンジがさした方向には、赤茶色のバトルホッパーのようなバイクが止まっていた。見たことがある…

確かあのバイクは、ゴルゴムの所有する遺跡の中にあっと思ったと思う。

先代の創世王候補として争った世紀王が使っていたものだ……

「そうか…ありがとう。そして…すまない……」

「何を、謝るんですか？シャドームーンさん」

突然、後悔に苦しむような態度になったシャドームーンにシンジは戸惑いの声を上げた…

「君を助けるためとはいえ、俺は…君にとんでもない運命を押し付けてしまった…許してくれとはいわない……す、すまない……」

その声にシンジは、反論した。

「……これは仕方がなかったんでしょう。こうでもしてまであなたは僕を助けようとした生きてもらいたかったから…僕だって死ぬた

くなかった。助けてくれたんだから、自分を責めるのはやめてください。僕は、今、生きています。これは、あなたのおかげなんですよ……」

表情のない仮面のような顔の双方に浮かぶ緑色の目がシャドームーンを見る。

彼は驚いたようにこういった

「そうか…お前は、俺を許してくれるのか？」

かつては、洗脳されたといういい訳すら通らない罪を犯し、彼から人間としての生を奪った自分を青年は許すと言った。

「あなたが後悔したこと、悔やんだこと、悲しんだことは全て僕がこのキングストーンと共に引き継ぎます……だから、もう苦しむ必要なんてないんですよ……」

その言葉に、シャドームーンは悟った。もう償えることは無くなったことと自身の力と業を背負い新しい道を切り開くために新生した戦士の誕生を嬉しく思った……

「ありがとう…シンジ。あの日、君を助けたのに、今は、君に救われたな……」

シャドームーンは、緑色の目に喜色を浮かべて笑った。かつて、一人で居ることに泣いていた少年がこんなにも立派になったことが嬉しかったのだ……

次第に意識が薄れていくのを、シャドームーンは感じた。

「なあ、シンジ。新しい名前を俺が決めていいか？」

「ええ…構いません。いえ、ぜひそうしてください……」

シンジも感じていたのだ。シャドームーンに死の影が色濃く現れていくのを……

そして、それが自身の力ではどうしようもないということも……

「仮面ライダーシャドウ…その姿を、そう名乗れ……」

かつて、兄弟同然の青年がそう名乗り、自身の悪行を止めるために戦った……

「はい…ですが、それは、僕の名前ではありません……」

驚いた様子でシャドームーンは、変化したシンジの顔を見た。

「それは、僕とあなたの名前です……」

「そうか……」

シャドームーンの声に笑みの色が浮かんだ。心にあるのは、純粋な喜びだった……

「ありがとう……シンジ君……」

それが…彼の最後の言葉だった……

「…シャドームーンさん」

シンジにも分かった。もう、彼が安らかに息を引き取ったことを……
力尽きた亡骸を抱きしめ、シンジは声を押し殺して泣いた……………
……………

とある場所…

「なるほどな…異端の世紀王というわけか……………三神官よ」

その声を発しているのは、荘厳な玉座に座する影であった……………

「はい…創世王様……………」

ダロムは、恭しく頭を下げて玉座のものに言葉を返した……………

「そうかしこまるな。アクシデントはつき物だ。その世紀王は面白いな……………」

「は？」

バラオムが創世王の意図が分からないといわんばかりに疑問符を上げた。

「生誕の儀でもないのに、そのようなものが出てくることは今までに前例がなかったのにな…一年後の儀に大きな意味を持つかもしれないな……」

創世王は、三神官に背後を見るように視線を向けた。そこには、紅い球体を抱く異形の怪物たちが鎖によって捕縛されている光景があった……

彼ら以外にもこの場に一人……

剣神 オレビスである……

「三度の儀を持って俺の前に現れなかった…それがそうだったのか？」

オレビスは、ゴルゴムにとって新たな脅威が生まれたこととそれが一年後に起こるであろう巨大なる儀に大きな意味を持つ存在に言いよの無い好奇心に駆られるのだった……

「……面白い……」

そう言つて、オレビスは創世王にモノを申さねばと思い、玉座の方へと静かに歩み寄るのだった……

「シャドームーンさん。いえ、仮面ライダーシャドウ……見ていてください。あの時、あなたは一人ぼっちの僕を助けてくれた……今度は、僕が誰にも助けてもらえない一人ぼっちを助ける番です……あなたの恩を僕が本当の意味で返します……」

シンジは、山の中に立てられた墓標に頭を下げた……

それは、墓の主に決意を誓った瞬間だった……

「それでは、行って来ます……」

彼は変る……人の姿から月の王の力を継ぐ戦士の姿へ……

この世界のどこかで、助けを求めている誰かを助けるために……
戦士は行く……

序章 誕生 2014年 終……

序章 誕生 2014年 (後編) 「……………夜明け……………」 (後書き)

こんばんは、NAVAHOです。

少し時間を空けましたが、今回の投稿を思い切って序章をすべて出しました。

今回は、来週の土曜日を目安に投稿をしたいと思います。

時間は、この物語より一年後、シャドウの本当の戦いが始まります。

それでは、次回にまた……………!!

第一話「…堕ちた天使…」

2015年 第三東京市 人口進化研究所 ゲヒルン…

ゲヒルン…国連に幅を利かせる人類補完委員会によって設立された調査期間である……

本部は、第三東京市地下の大空洞である”ジオ・フロント”に設けられていた。

広大な地下空間の真ん中にピラミッドに似た建物があり、これが施設の中核である。

「……ANGEL ?05と?09が脱走したというのか……」

「申し訳ありません、所長。これは警備課のミスですわ……」

ピラミッドの上部にある所長室では、髭面のサングラスをした男と紫の口紅を引いた白衣の女性の姿があった……

男が座っているデスクには、何かが発火したために破壊された研究施設の写真が散らばっていた……

「……言い訳はきかん。これが、”機甲大隊”と”機械化大隊”に知られたら、我々は笑いものだぞ、赤木 ナオコ君……」

髭面の男の傍らに、背の高い老紳士が立っていた。彼の名は、冬月コウゾウ。このゲヒルンの副社長である……

「ですが、副所長。彼らは、”敗残兵”の集まりではありませんか」
「……そうだぞ。冬月…何を恐れるというのだ。知らなければ済むことだ……」

まるで同意を求めるようなナオコと所長の姿に冬月は半ば呆れた。

「だが、彼らが我々のホストである組織においてすばらしい実績を出してくれたおかげで、この人類補完委員会及びゲヒルンは大手を振って”ゼーレ”から脱退できたのだ……」

「くっ、それは…だな。早く終わらせればいいことだ……」

「それで、勝手にEソルジャーを解き放ったわけか……先走りおつて、六分儀……」

冬月は、所長 六分儀ゲンドウを非難するような威圧的な視線をぶつけた。だが、冬月は…

「まあ、お前の行動は分からんでもない。これをいち早く方をつけられるようにしなければならぬ……」

内心、雑務が増えるなど冬月は思った。まあ、いいことである。とりあえず、自分たちの競争相手にこれを知られるわけにはいかないのだから……

三人の密談を聞いているものが一人だけ居た…

「……なるほど、俺のテリトリーに不穏なものが近づいてくるから、元をたどれば、お前達か……あの儀式も近い……奴に忠告するぐらいは構わぬかもな……」

陰に潜んでいた男は、赤いマントをなびかせてその場を後にしたのだった……

密談が繰り広げられている所長室を見上げる女性がピラミッドの前に立っていた。彼女は、金に染めた髪を持った知的な印象を持った顔立ちをした女性だった。

「もう勤務時間は終わっているのに、何をしているのかしら？母さんと所長は……」

彼女のむける目は、まるで汚い陰謀を許さないといわんばかりの気迫に満ちていた……

緑を貴重としたスーツの胸元の名札には、ゲヒルン職員 赤木 リツコとあった……

2015年 第二東京市……

「あれから、一年か……早いな」

青年は、頭上の天空に悠然と浮かぶ蒼い月を眺めていた。中性的で整った貌の双方に浮かぶ黒曜石のような瞳に懐かしさと僅かな悲しさの色を映し出した……

傍らには、バツタを模した赤茶色のバイクが止まっている。

”ポポポポ”と赤く、目を点滅させて、青年に意思を伝えているようだった……

「僕も感じているよ……今夜で、そいつを絶対に倒す……」

彼の手には、ここ連続でこの町で起こっている子供を狙った連続殺人事件の報を知らせる新聞が握られていた……

しばらくしてから、青年はバイクに跨りアクセルを全快にして、その場を離れていった……

「……どうしよう……嫌だよ……瑠璃ちゃんが……」

男の子は、ウサギ小屋の裏で震えていた。普段なら、下校の時間はとくに過ぎていて、家でお気に入りのＴＶ番組を見ている時間なのだが、それも今では叶わないでいた……

「信也くうくん。どこに、いるのかな。まさか、逃げたなんていわないよねえ、逃げたら、瑠璃ちゃんが死んでしまいますよ」。逃げちゃだめなんですよ」

闇から聞こえてくるのは、穏やかな響きを持った声であるが、あくまで声だけであればの話である……

男の子は、知っているのだ。この穏やかな声を発しているのが、悪意を秘めた信じられないような異形の存在であることを……

時間を遡る事……二時間前……

その日、坂田信也と星川瑠璃の二人は日直の仕事であるウサギ小屋の掃除を行っていた……

「信也君、ウサギをお願い」

「うん、いいよ」

瑠璃は、ウサギ小屋を竹箒で掃き、信也はウサギを一旦、大き目の木箱に一羽ずつ入れていた。

校庭では、まだ居残っている生徒達がフットボールや野球をして遊

んでいる光景が見える……

それは、どこでも見かける一般的な放課後であった……

<下校の時刻になりました。残っている生徒は、用事が無い者以外は、一人も残らないように帰りましょう>

校庭のポールに備え付けられたスピーカーから、聞きなれた先生の声が聞こえてきた……

それを合図に、遊んでいた子供らは校庭の隅にほったらかしにしていたランドセルを担いで校門から出て行った。

入れ替わるように裏の校門から不審な男が入ってきたことにこのとき、誰も気が付かなかった……

「嫌だな。子供を帰すなんて……まだ、遊んでないのに……」

その男の手には、真っ赤な血に染まった黒いランドセルが握られていた……

男は、迷うことなく一直線に校舎へ足を向けた……夕日に照らされた男から伸びた影が、大きく揺らいだ……

放送から数十分ほど経った頃、ウサギ小屋で仕事を終えた二人は鍵を返しに職員室へ向かっていった。

「早く、鍵を返して、家に帰りたいなあ」

信也は、お気に入りのTV番組の時間が近いのを気にしているのか、

そんな感想を漏らした。

「そう。そんなに帰りたいの？」

「ううん。見たいTVがあるから」

瑠璃は、なんとなく信也に聞いてみた。取り留めの無い会話をしながら二人は職員室前へやってきた……

「先生…鍵を返しに………」

信也が、扉を開けたとき、夕日によって真っ赤に染まった職員室にそれはいた……

「ああ かわいい子供達だなあ。ねえ、おじさんと遊ばないかな」

口を開いたとき、グシャツという嫌な音を立てて落ちたのは、首を鋭利な刃物で切られたような傷をさらした先生の姿だった……

二人の子供達は呆然とした。手に持った鍵を落としたことに気が付かないほどに……

「脅かすつもりなんてなかったんだよ…ただ、先生が少しね………」

子供らに弁解を求めるようにそれは、視界に二人の姿を映し出した

……

「だからね…おじさんと遊ぼうよ………」

子供らを抱きしめようとするかのように、真つ赤な血に染まった口を開け、大きく歪曲した二本の鎌のような手を……

そこにいたのは、人間よりも二周りほど巨大な蠃螂だった……足元には、血に染まったランドセルから散乱した同じように赤く染まった教科書が数冊……

その蠃螂の怪物から二人は逃げた。だが、直ぐに追いつかれしまい、必死で逃げた。だけど、瑠璃ちゃんが……

「嫌だよ…そんなの……」

信也は、自分ひとりが逃げ延びて、瑠璃が捕まったことに罪悪感を感じていた。男の子なのに…どうして、勇気を持ってあいつに立ち向かえなかったのだろうと……

「信也くうくん。早く出てきてよ…でてこないと、おじさんは瑠璃ちゃんを殺すからね。これは、君が逃げたせいだからね……」

蠃螂の怪物の声に信也は、自分が行かなければと思った。それは使命感ではなく、彼がどうしようもなく追い詰められたからだった……

誰も助けてはくれない。自分ひとりがこの世界に一人取り残されたような孤独を彼は感じていた……

「これが、最後だよ。早く出てきなさい……逃げたらだめですよ。おじさんから……何よりも自分から……」

そう言われるともはや、どうしようもなかった。ウサギ小屋のウサギ達も怯えるような目で信也を見ていた……

信也は出て行こうと思った。出て行ったら、助けてもらえるかもしれないという淡い思いを抱いて……

そこへ、風が吹いた……

「だめだ。行ってはいけない。あれは、君を脅しているだけだ。行ったら、二人とも殺されてしまう」

その声は力強く、それでいて優しい声で信也に語りかけた。

「心配するな。瑠璃ちゃんは、必ず僕が助ける。だから、君はここでじっとしている」

振り返った信也が見たのは、銀色の男の姿だった……

「……あなたは、誰なんですか？」

「僕かい？僕は……」

緑色の目に優しい色を浮かべて、男は少年に名を告げた……

蠍螂怪人は、一向に出てこない信也に対して苛立ちの声を上げた。

「逃げたのか！！小僧！！！！！！ああ！！！！いいさ！！！！これは、お前のせいだからな！！！！！！この臆病もの！！！！！！！！！！」

思い通りに行かない結果に堪忍袋の緒が切れたのか、鋭利な鎌を少女目掛けて振り下ろそうとしたときだった。

何かが自分にぶつかってきた。

「！！！？！！！！」

後ろに倒れこんだ蠍螂怪人は、すぐに自分の手元に少女がいないことに気がついた。

「お、俺のものが！！！！だ、誰だ！！！！！！」

手元から奪われた少女を求めて、しきりに辺りに視線をやる蠍螂怪人であったが、彼を見下ろすように校舎の屋上に立つ銀色の男を見たのだ。

銀の男の腕の中には、少女が抱かれていた……男の背には、新円を描く青い満月があった……

「…誰だ！！！！お前は！！！！！！」

喚く蠍螂怪人を無視するかのように男は、屋上に少女を寝かせて、その驚異的な跳躍力で蠍螂怪人の真正面に立った……

「僕は、お前達ゴルゴムと戦うもの……お前達に対する牙となってゴルゴムの牙を砕くもの……仮面ライダーシャドウだ……」

「か、仮面ライダーだと！！！！ふ、ふざけるな！！！！！！」

蠍螂怪人は、仮面ライダーシャドウに向かっていった。振り下ろされる鎌を全て交わし、シャドウは強力な蹴りを蠍螂怪人の顔面に当てた。

「ぐっううううああ！！！！！！」

顔を潰されるような痛みを感じ、蠍螂怪人は後ろへよろめいた。その間にシャドウは、一気に距離を詰めるべく両足のレッグトリガーを使い高く飛翔し、

「シャドウ・パンチ！！！！！！」

急降下するようにして、蠍螂怪人の腹に緑色の閃光を放つ拳をぶつけた。その衝撃により、蠍螂怪人は後方へ吹き飛ばされ、地面に叩きつけられるように倒れた……

「あああああ！！！！！！！！」

身体が燃え出し、彼は原子の炎となり消えた……

「あ、ありがとうございます……」

瑠璃を家に送り届けた後、信也は赤茶けたバツタを模したバイクに乗った銀色の男にお礼を言った。

「ああ、どういたしまして……」

銀の男は信也の髪をくしゃくしゃにするようになでた後、バイクのアクセルを握って闇夜の中へと消えていった……

闇夜の中を失踪する仮面ライダーシャドウは、自分を追ってくる気配を感じた……

(……………奴か……………)

シャドウは、バトルホッパー”蝗龍”を止め、背後から迫ってくる気配に語りかけた。

「オレビス…今日もまた、決闘を申し込みにきたのか!!!」

「いや、今日は決闘ではない。お前に警告をしにきたのだ…」

闇から現れたのは、逞しい体躯をした魚の鱗のような黒い皮膚を持った男であった。赤いマントをなびかせながら来る男は、いつも携帯している武器は持ち合わせていなかった……

「それは、ゴルゴムに関することなのか？」

「まあ、そんなところだ。俺としては、好敵手のお前にも聞く権利はあると思うところがあるのでな……」

「そうなのか…なら、聞こう。お前の話を……」

シャドウは堂々とした態度で、オレビスに臨んだ。オレビスも堂々とした好敵手に笑みを浮かべていった……

「第三東京市から、使者達が逃れた。そいつを追っているのは、ゴルゴムだと言っておこう……」

そう言っただけオレビスは、背を向けて去っていった。

「第三東京市？以前も、ゴルゴムがうごめいていて、奴らの動きが怪しいほどない場所だ……」

前々から、疑問に感じていたあの町からゴルゴムの手から逃れた誰かが逃げた……

「………何か、大きなことが起こるのだろうか……」

シャドウの姿が、一人の青年の姿へと変っていった……

青年の名は、碓シンジ。またの名を仮面ライダーシャドウ……

碓シンジが、シャドームーンからキングストーンと仮面ライダーの名を受け継いでから一年が経とうとしていた……

ゴルゴムと戦い続けて……

第二東京市の郊外で、それは起ころうとしていた……

「はあっ、はあっ、はあっ」

それは、銀色の髪をした赤い瞳を持った男であった。森の中を必死になって逃げていた。時折、頭上の空を見上げて……

「はあっ、はあっ、はあっ、はあっ……」

脳裏に浮かぶのは、あののっぺりとした白い顔に浮かぶ異様に裂けた口……内側の膜が黒い白い翼……白い身体を持ったそれが飛びかあ

つてくる光景だった……

「はあっ、うわああああ！！！！！！！！」

足並みが崩れ、男は無様に地に転がってしまった。ほんの少しだけ湿った草の感触を肌を感じながら、背後から迫り来る恐怖に耐えかねていた……

”グウウウウウウ……”

それは、影の頭上から聞こえてきた……

「！！！？！！！！」

見上げたとき、夜の闇夜と対を成す白い翼を持った影が飛び掛ってきたのだった。

「うわあああ！！！！！！やめろ！！！！やめてくれええ！！！！！！！！」

影の頭部に浮かぶ大きく裂けた口にある歯が、それを貪る様に噛み付き、白い手が身体を引き裂いた……

手に握られたのは、人間の腕……吹き出す血は青い色……

男より、離れた場所を必死で逃げる女が居た……

「追いつかれたの？マトリエル……急いで、あいつから逃げないと……」

入院している患者が着るような服を着た女は必死で逃げた。背後で仲間を貪る白い影に怯えながら……………

”ギギギギギ…”

第三東京市…マンション コンフォード17…

猫の小物が異様に多い一室で、彼女は小型の通信機のようなもので誰かと会話をしていた…

「本部長…やはり、ゲヒルン所長 六分儀ゲンドウは、ゴルゴムと関連があると見て間違いありません」

<…何かの動きが見られたのか？>

「はい。技術主任の赤木ナオコ博士と所長、副所長がこここのところ、セキュリティレベルの厳しいLEVEL6に頻繁に出入りしていて、様子も鬼気迫ったものを感じられました。残念ながら、わたしはそこまで見ることは叶いませんでしたが…」

リツコは、このところ頻繁に見る様子を逐一報告した。

<そうか…ならば、気をつけてくれ…こちらの方でもアンリエッタ・バーキンが人類補完委員会の動向を追っていて、不穏な何かが起こるかもしれないと報告してくれた。用心だけは怠らないでくれ…>

「分かっていますわ、本部長。本部長も気をつけて……」

そう言って、リツコは無線を切った。眼下に見えるのは、夜の大会のイルミネーション……

彼女ははつきりと感じていた。この人の言みが賑わう大都会でうめく黒い陰謀の影を……

「絶対にわたしは、突き止めてみせるわ。ゴルゴムを……それが、私の仕事だから……」

リツコの目には、自身が追うゴルゴムに関係するであろうゲヒルン以外の団体、“桐原コンツェルン”本社ビルが映った……

桐原コンツェルン本社……

第三東京市の一等地にそびえるどのビルよりも高く、黒い荘厳な建築物を有する国際的な巨大企業体である……

1980年代後半に大きく栄えたコンツェルンであるが、突如株が大暴落し、一時は低迷したのだが、セカンド・インパクトの時にその多岐にわたるコネを持って持ち直し、今では日本を代表する巨大企業となっている……

最近では、マルドック機関への支援企業として上位に名を連ねていたのだった……

マルドック機関…人類補完委員会がゲヒルン以外に要する調査機関である。こちらは、各分野における優秀な人材を選出する役目を負っているのだった…

社長の桐原剛造は、眼下に見える都市群を最上階の社長室で眺めていた…

「……………」

剛三は眼下に見える景色に満足したのか、革張りの椅子を反転させて、デスクに備え付けてあるPCを起動させた。

<社長…株価についての報告です…>

顔立ちの整った女性秘書の姿が映し出される……

<ニューヨークの株式市場が高騰を続けています。ダウ平均株価が予想を大きく上回る5000ドルを突破しました。いかがなさいませうか？>

「買い占める。金融市場の財務局長にはこう伝えよ。強気、一本で行けと……………」

有無を言わさない剛三の迫力に秘書はうなずいた。

< 続いての報告ですが、中東の火薬庫の動向が不安定になっていま
す……>

「ならば、原子力潜水艦を差し向ける。わが社のタンカーはもちろ
んのこと、関連するものは全て護れ。それ以外のタンカーは動乱の
煽りで沈もうが、我々には関係の無いことだ」

剛三は、報告に対して逐一指示をいれ、今後の方針を説明したのだ
った……

それからまもなくして剛三は、画面の脇にあるデジタル時計の表示
に目をやった。

そろそろ、時間であった……彼にとっての……

「夜の向こう」へ行く……後は任せたぞ……」

桐原は、秘書にそう告げた後、PCを休止させて、秘密の回廊へと
足を向けた。そこには、傷ついた銀色の甲冑があった……

「待っていたぞ……クールギン……」

甲冑に寄り添うようにまるで戦艦の司令塔をそのまま小さくしたよ
うな独特の頭部を持つロボットが立っていた。

「ああ……ドランガー。待たせたな……」

桐原はそのロボット・ドランガーに軽く会釈をして銀色の甲冑を身につけ、彼は闇の世界でのもう一つの名、クールギンを名乗る……
秘密の回廊のさらに奥へと足を進めるのだった。回廊の奥にあるのは……

「……機甲大隊　クールギン様、万歳！！！！！」
「……」

回廊の奥には、まるで王が座するような荘厳な建物が存在していた。それらを崇めるように鎧を着た兵士達、さらにはごついロボット達が、人間に近い形状をしたロボットが王座に現れたクールギンに賞賛の言葉を送っていた。

「諸君の働きには、感謝をする。今は、静まってくれ……」

クールギンは、部下達を鎮めて、自身を崇める最強の精兵たちを満足そうに眺めた。

「報告があるものは、居ないか……」

「はい。バーベリイより報告をします……」

クールギンの前に戦闘ヘリをそのまま小さくしたようなロボットが進み出た。

「それは、何だ？バーベリイ……」

クールギンの傍らに立つドランガーが彼に代わって問う。

「はい…それは、ゲヒルンで実験体が二体ほど脱走しました。これを……」

そういつて、バーベリイは自身に備え付けられたプロジェクターを起動させて、立体映像として記録したものをクールギンに見せた。

そこには、必死の表情で逃げる銀髪、赤い目の男女が映し出されていた……

「……ほう、それで……」

「次世代量産型生態兵器 Eソルジャーを一体派遣したそうです」

クールギンの質問にバーベリイは、応えた。クールギンは、鎧の下で嘲笑うように頬を歪めた……

「……そういうことが、六分儀ゲンドウ…私達が気づかないとでも思ったのか……詰めが甘いな……」

彼の王座の背後には、林檎と対を成すように対峙する蛇の紋章が描かれていた……

……第三東京市……

「もう、怪物は居なくなつた。安心してください、願わくばこの道を行く彼らを見守っていてほしい……」

シンジは、たくさんの花束が置かれている場所に頭を下げていた。ここは、連続児童殺人事件が最初にあつた場所で、被害者の無残な遺体が発見された場所であつた。

犯人は、昨夜の蠅螂怪人だつた。幻かもしれないが、頭をさげて冥福をいのるシンジに小さな影が微笑んでいる光景があつた……

彼は、立ち上がりバイクを吹かせてその場を立ち去つた…後には、風に揺られる花束の花だけが残つた……

シンジが乗つたバイクは、喫茶ディアボロの裏の車庫にたどり着いた。

「ただいま」

「おつ、朝になってやっと、帰つてきたか。事件は終わったのか、シンジ……」

シンジを迎えたのは、この店のマスターである。自分の事は本名ではなく、マスターで統一するようにすることがこの店のしきたりだったりする……

「ええ、何とか…終わらせることができました……」

彼の表情はどことなく暗い。もう少し早ければ、犠牲者を少なくで

きればと思つところが心のうちにあるのだらうと察せられた……

「ばっかやろう。もう事件は片付いたんだろ！！！！だったら、胸を張れ！！！！直ぐに、暗くなるな！！！！！！」

マスターは、精一杯の声の声を上げて、シンジの背中を叩いた。

「あつ、痛……マスター。これは、痛いですよ……」

幼少の頃から事あるごとに背中をパンとやられてきたが、未だに出来ない自分は、あんまり成長していないのかとシンジは思った……

「罰として、今から、買出しに行つて来い！！！！」

「それは…横暴じゃないんですか？」

「つべこべ言わずに行け！！！！俺の腹が減り過ぎないために！！！！」

「…わかりましたよ。それじゃあ、行つてきます……」

こうなったら、自分は何もできなくなったと悟ったシンジは、メモを受け取り、表の扉の鈴を鳴らして買出しに出かけていった……

「やれやれ、まったく。どうして、あいつは、光太郎と面識は無いはずなのに、なんであんな風に似てくるんだ……」

そんな事を呟きながら、ちらりと店の棚に飾ってある古ぼけた写真たてに飾られている写真に視線を向けたのだった……

マスターは、直ぐに暗くなるシンジに無理に明るく振舞おうとした
青年の面影を重ねるのだった…

「みゃあ〜」

彼に同意するかのように、白い老猫は鳴き声一つ上げて同意した…

……

彼女は、都会の人間達の雑踏の中をさ迷っていた……

「はあっ、はあっ!!!!」

道行く人達に怯えるように赤い目の視線を泳がせ、人に触れようものならまるで拒絶するように身を引かせるような動作を繰り返していた…

怖かったのだった…この町に居る人間の中に紛れているであろうあの恐ろしい白い怪物が居ると思うと……

「やあ、彼女。何を怖がっているんだい？」

そこへ長髪を後ろに縛った男が親しげに肩に手をやりながら、彼女に話しかけてきた。

一流の軟派男を気取っているのか、男の表情は自身に満ち溢れているが……

彼女……ラミエル、男の表情の裏にあるとても嫌なものを本能的に悟り……

「いやああああ……！！！！！！！！！！」

彼女の手から、一瞬赤い光が放たれ、男は光と共に出てきた衝撃波によりまるで爆弾に当てられたかのように吹き飛ばされたのだった

……

叫び声を上げることなく男は、近くの外灯に勢い良くぶつかってしまった……

突然の事態に、人々は原因であろうと思われる女に視線を向けたのだった。奇異の目を向ける人々の視線から逃れるようにラミエルは、その場から急いで逃げ出したのだった……

騒ぎが起こった位置に近い場所に、一人の青年の姿があった。

「そこに居たのかい？手を煩わせないでくれ…ラミエル……」

灰色が掛かった銀髪をした青年の顔には、目や鼻は無かった。白い顔にあるのは、異様に裂けた大きな口だけだった……

青年は、騒ぎがあつた場所へ一目散に駆け出していった……

「…ん？なんだ…この気配は……」

買出しのために町に繰り出していたシンジは、異質なものが近くに居ることを感じていた…

（…三神官…怪人でもない？なんだ…こいつは…一つだけじゃないな……）

近くにある気配を感じた方角では、なにやら騒ぎが合ったようで外灯の柱の近くに人だかりができていた……

野次馬達が何かを話している。シンジは、彼らが何を話しているかを聞くために耳に精神を集中させた……

” おいおい、軟派して女の子に吹っ飛ばされたって本当か？ ”

” ああ、そうらしい。だけど、怖いな。最近の子は…声を掛けただけでこれだぞ。嫌な世の中になっただな ”

” そうだな。意外とかわいい子だったらしいぞ…なんでも、何処かの病院の患者が着るみたいな服を着ていたらしいぞ…”

” だったら、またもじゃなさそうだな…”

聞いているだけでは、好き勝手に言っているように響く。関係がないのだから、遠慮もへったくれも無いのだろうとシンジは思った……

(……すでに離れているのか…ん!!?)

会話を聞いて、結論を出そうとしたときに何かが勢い良く人ごみの中を掻き分けていくのをシンジは見た。

それは一瞬であった。人間の身体をしているのだが、それはまるで目の無いうなぎのようにのっぺりとした顔をして、異様に大きな口を持った異形だった……

「 あいつか!!!! 」

シンジは、急いでその異形の後を追うのだった……

ラミエルは、この町の人間達から逃れるように人気の無い路地裏へと足を速めた。やがて、彼女は人気の無い寂しい廃墟にたどり着いた……

ここは、セカンド・インパクト前に立てられたリゾート・ホテル跡でバブル時に日本各地に立てられたものの、資金難によりそのまま放置されている場所だった……

あるのは、むき出しの灰色のコンクリートの壁と長い年月によりひび割れた床……

「これで……もう……」

ラミエルは、まるで自分を落ち着けるように言い聞かせた。ここには、自分以外に誰も居ない……だから、誰かが来ない限り、傷つけられることはない……

「やっと、見つけたよ。ラミエル……」

背後からその声は聞こえてきた。入り口の逆光により黒いシルエツトの頭部に浮かぶ異様に大きく裂けた口に揃った白い歯が鮮やかに彼女の目に映った……

「……もう逃げられないよ……雷の天使……」

人間の身体から、黒いシルエットの持ち主は変化していった。細身の身体を拘束するかのような白い装甲を纏い、間接部分の配色が黒い、白い怪物へと……

むき出しの歯をラミエルに向けたと同時に背中から黒い膜をした大きな翼を広げたのだった……それは、影だけを見るのなら天使を思わせるのだが……

姿だけは、あまりにも醜かった……

「ああ……い、いや……」

「嫌じゃだめだよ……君を処分するように言われているんだから……」

E・ソルジャーは、ラミエルに対して諭すように言うが、その言葉の響きには言いようの無い悪意に塗れていたのだった……

「だから……嫌がらないでよ……」

いつの間にか、E・ソルジャーが目の前に迫っており、ラミエルの頬に思いつきり手を挙げたのだ。

「……?!?!?!」

頬に熱い痛みを感じ、ラミエルは地面に転がった。僅かに病院服が切れ、彼女の胸には何かが取り出されたかのような丸い空洞だけが存在していたのだった……

思い出すのは、あの白いライトに照らされた手術室で行われた悪夢の所業……黒い制服を着た髭面の男に、背の高い老紳士。

自分の胸にメスを入れて、胸に抱いた赤い玉を取り出した女科学者の姿が映った……………

それらの全てが、目の前に居る白い悪魔のいやらしい笑みに重なった……………

怯えた表情で彼女は、声にならない叫びを上げた。

”誰か!!!!!!助けて!!!!!!”と……………

「待て!!!!!!その人から離れるんだ!!!!!!」

「ぐっぐっぐっぐ……………」

お楽しみを邪魔されたことに腹を立てたのかE・ソルジャーは、背後にいる邪魔者に敵意を含んだ視線を向けた。

そこに立っていたのは、白い異形E・ソルジャーを追ってきた碓シンジその人だった……………

シンジは、自分よりの二周りも大きなEーソルジャーと対峙するよ
うに構えを取った。

「ぎゃああああ……！！！！！！！！」

まるで悲鳴のような叫びを上げながら、Eーソルジャーは凄まじい
跳躍力でシンジに飛び掛ってきた。

「くっ！！！！！！！！！！」

勢いによって突き出された手を交わし、シンジはEーソルジャーの
顎を狙ってアッパーを繰り出した。

だが、Eーソルジャーはこれを左手で受け止め、シンジを片手だけ
で投げ飛ばしたのだった。

「うわあ！！！！」

飛ばされた衝撃によりコンクリートの壁が砕け、瓦礫に何度も身体
をぶつけながらシンジは転倒した。

「グウウウウウ……」

Eーソルジャーはこれで死んだと思い、再びラミエルの方に向いた。
彼女は一抹の希望がなくなったことに絶望を感じた……

もしかしてという、儚い望みでさえ許してくれないのだろうか？こ

の世界は……

「うっ…なるほど、怪人とは違っってことか……」

シンジは瓦礫から立ち上がった。意外な展開にE・ソルジャーは驚いたように口を歪ませた。それは、まるで”何故、お前は死なない”と言わんばかりに……

「……あの人…どうして？」

ラミエルも不思議に思った。突発的とはいえ、前に傷つけたリリンは重症を負ったのに、あのリリンは何故、なんとも無いのかと……

「ぎゃあああああ！……！！！！！」

今度は引き裂いてやるといわんばかりにE・ソルジャーはシンジの四肢を掴もつとしたが…

「赤心少林拳…梅花の型……」

シンジは、赤心少林拳の極意である護りの拳で殺気だったE・ソルジャーの攻撃を全て流し、カウンターとして、しょうていをソルジャーの腹に目掛けて当てた。

「……？……！！！」

声を上げる時間さえ与えられずに、E・ソルジャーは吹き飛ばされ無様に地面にひれ伏したのだった……

「っ、っよっ……」

限られたリリンとしか出会わなかったが、あのリリンはかなりつよい。リリンにはない、何かを持っている風にさえラミエルは感じた……

E・ソルジャーは、怒りの咆哮を上げ、自身に内蔵されている武器である大剣を取り出し、シンジに向けた……

「本気でくるか……なら、僕も……」

シンジは一旦呼吸を整えるべく、深く息を吐いた……彼の決意に呼応するかのように、体内で眠っていたキング・ストーンが胎動し始めた……

両手の拳に力をこめるような構えを取り、独特の流れで構えを行い……

「……変・身……」

胎動し始めたキング・ストーンからエネルギーが胎動し、黒いベルトが腰に現れた……

エネルギーが体中を回り、身体が異形のものに変化していく……黒い蝗のような姿から、銀色の装甲を纏った月の王の力を継ぐ戦士に……

強固な銀色のリプラスフォームの間からは、白い蒸気が吹き出し、彼の力を誇示するかのよう立ち上っていた……

緑色の大きな目が、E・ソルジャーを捉え、挑戦的に腕を構えて……

「仮面ライダー シャドウ!!!」

「ぎゃああああ!!!!!!」

まるで理不尽なものを見たかのようにE・ソルジャーは叫んだ。

ラミエルは、信じられないものをみたように目を見開かせた…あれは、遠い昔にみた……

「世紀王が…何故?」

自分を助けに来てくれた青年は、世紀王…なぜ、自分を助けてくれるのだろうか?

「ぎゃああああ!!!!!!」

E・ソルジャーは、シャドウに向かって飛び掛るが、シャドウは先手必勝といわんばかりに

「シャドウ・パンチ!!!!!!」

E・ソルジャーの側面に緑色の閃光を放つ拳をぶつけたのだった。

「ぐええええええ!!!!!!」

顎が碎かれるような痛みを感じながら、E・ソルジャーは体制を崩すものの大剣をシャドウ目掛けて振り回す。

「それが剣か? 剣神に比べたら、お遊戯でしかないよ…お前のは…

…」

シャドウは、一年間戦いを続けている好敵手に及ばないE・ソルジャーに対して厳しく言った。そして、その大剣を砕くように…

「はあああああ！……！！！」

先ほどのシャドウ・パンチよりもさらに力をこめたパンチを大剣に向けて打ったのだった……

大剣はシャドウの放った拳により粉々に砕かれた。怒りに駆られるようにE・ソルジャーは翼を使い、シャドウよりも高く飛んだ。

翼の力は凄まじく、天井のコンクリートを砕き、空高くE・ソルジャーを舞い上がらせたのだった…

「ぐあああああ！……！！！」

E・ソルジャーは高く上がった後に、シャドウ目掛けて一気に降下した。

「ちっ……上から来るか……」

勢いの乗ったE・ソルジャーの攻撃を一旦、交わし、シャドウは再び舞い上がったE・ソルジャーを見上げた……

空から襲ってくる敵ほど厄介なものはない。過去にもそういった敵が数多く居たが、彼らには必ずといって良いほど共通した弱点があるのも事実だった……

体中に走る痛みにもがき苦しむようにE・ソルジャーはおぞましい声を上げる。白い身体に至る所から血が噴出した。

「ぎゃあああああああああああ!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「今だ!!!!!!」

シャドウは、変身したときと同じような構えを取った後に、高く飛翔し、苦しみながら立ち上がったE・ソルジャー目掛けて蹴りを繰り出しながら降下し、

「シャドウ・キック!!!!!!」

淡い緑色の閃光の槍と化したシャドウの蹴りにより、E・ソルジャーの胸部装甲が砕け、体内にあった赤い宝玉が砕けたと同時に、体中の至る所から炎が噴出した。

そして、燃え尽きるようにしてこの世界から消え去ったのだった……

「……………」

ラミエルは、圧倒的な力で白い悪魔を倒した銀色の戦士を見た……

銀色の戦士は、彼女の視線に気がついたのか、歩み寄りこついった……

「大丈夫ですか？」

と……手を伸ばし、優しくたずねたのだった……緑色の目には、彼女に対しての心配の色を浮かべていた……

それは、悪意のある存在とは真逆の穏やかなものだった……

「はい……」

そう言って彼女は、戦士の手を取ったのだった……

この日、戦士は大いなる運命の扉を開く……

「量産型E・ソルジャー タイプa……行動不能を確認……バーベリイより機甲大隊本部へ連絡する……」

それは、ヘリをそのまま小さくしたフォームを持ったロボットだった。廃墟に近いビルの上で、戦いの一部始終をずっと見ていたのだ……

気づかれないうようにして、バーベリイは背中の四枚の翼を起動させて高く飛び上がり、その場を去っていった……

空を飛ぶバーベリイに気がつかない都会の人間達は、いつものように人の雑踏の群れを歩いていた…そんな人ごみの中で唯一空を飛ぶバーベリイの存在に気がついていてる男が一人……

筋骨隆々という表現が良く似合う黒いスーツの男であった……一種のダンディズムを気取っているのか、ネクタイの変わりに白いタイを締めている……

「機甲大隊とゲヒルンが騒がしいから着てみたら、そういうことがあったのか……三神官もこの騒動には、黙って居れら無いな。大神官長様もな……」

男は、これから色々と厄介ごとを片付けるためにタイクツな召集が掛かるなと苦笑した……

「それにしても仮面ライダーか……一番、関わりたくない奴が関わりそうだな。約束の儀に……」

シニカルな笑みを浮かべながら男は、雑踏の中へと消えていった……

一話「…堕ちた天使…」了

第

第一話「…堕ちた天使…」（後書き）

ジャンルに本編再構成と追加した方がいいかなと考えてしまいました。

エヴァのキャラと設定は、使ってますが、原作の流れとはかなり違うなと今更ながら思う次第です。

あの原作にライダーが介入するのは、難しいかなと思ったり……

オーズが終わり、フォーゼが始まりまして、何となくあのデザインが何処かで見たことのあるような気がしてならないです。

今回の投稿は、来週の土曜日を予定としております。

その間に、気が向きましたら、他のSSも投稿しようかと考えています。

もちろん、ライダーのクロスSSです。

それでは、この辺で、では……！！……！！

第二話「第三東京市へ……」（前書き）

こんばんは、NAVAHOです。予定通り、土曜日に第二話投稿です。

それでは、どうぞ……！！！！！！

第二話「第三東京市へ……」

廃墟の中に一人の女性と銀色の異形の男がいた。

「大丈夫ですか？」

差し伸べられるのは、無骨な鎧のような手。

「はい……」

その手を女性は取り、尋ねた。

「あなたは一体？世紀王がなぜ……使者である私を……」

その言葉に、銀色の男 シヤドウは、先日的好敵手が自分に告げられた言葉を思い出した。

「目の前で、助けを求めている人を助けるのに理由なんてありませんよ。それに……」

「それに……？」

”ブオオオオオオオオオオ”

女性の言葉に答えるかのように、バイクの爆音が廃墟に響く。それ

は、赤茶けた色をした蝗を模したバイクであった。

「世紀王、それはゴルゴムが決めた名前だ。僕らはゴルゴムと戦うためにこの姿の時はこうを名乗っている。仮面ライダー シヤドウト」

「カメンライダー……シヤドウト……」

今まで、聞いたこともない言葉に女性は、カメンライダーという言葉葉を何度も口にする。

「そして僕は、碓シンジ」

シヤドウトは一瞬にして、青年 碓シンジの姿に戻る。

「碓シンジ……私は、雷の使者 ラミエル」

「……ラミエル……」

シンジも目の前の女性の名を口にする。

「……碓シンジ。私を、マトリエルの場所まで連れて行って欲しい」

「マトリエル？」

「私と同じ使者。今は、無に帰ってしまった」

ラミエルは表情を暗くし、俯くが、

「居なくなってしまったんだね。でも、その人はまだ、そこに居る。」

そのままにはしておけないね」

シンジもラミエルの言葉に事情を察した。先ほどのアレに殺されたのだろう。殺され、今もその場に居る。

肉体を破壊され、魂はその場にさまよっている。せめて、供養だけでもと、シンジは思う。

「だから、行こう。その人のところに……」

しばらくして、この場に再びバイクの爆音が響くのがあった。

古代の神殿を思わせる場所……

三人の白い神官服を着た異形の者達の前に屈するように蝙蝠怪人が

何かを報告していた……

「なにっ？奴らは、そんな重大なことを我らに隠していたというのか！！！！！」

声を荒げて怒声を浴びせるのは、三神官の一人バラオムだった。激情家の彼は、これまでにない感情の苛立ちを蝙蝠怪人に八つ当たりするように言ったのだった。

「……………」

冷めた目で一段高い場所でビシウムは、事の成り行きを傍観していたのだ……………」

「六分儀ゲンドウめ…貴様は口だけか！！！」

「……………まあ、所詮は人間だったということだ。奴は…それ以上の期待をしても無駄だということだろう……………」

バラオムを沈めるようにダロムが応えた。もとより人間は、ゴルゴムにとって家畜当然の下等生物…そんなものに何を望んでも無駄だということだ……………」

「ダロム…何を落ち着いているのだ！！！！ANGEL達が逃げたのは、よりもよって……………」

「だから、どうしたというのですか？アクセIDENTはつき物のはずでしょう……………」

今まで傍観していたビシウムがここで初めて口を出したのだった。

「その通りだ。創世王様もそう言っておられる……」

三神官達の下へ黒い神官服を着たフードを目深にかぶった神官が訪れたのだった。

「大神官長様。すでに創世王様は、このことを……」

ビシユムが大神官達を束ねる長であるダンテムに訪ねた。

「そうだ。これより、機甲大隊、機械化大隊、ゲヒルン、人類補完委員会を招集する。直ちに伝令を……！！！！」

ダンテムが宣言したと同時に、神殿内の屋根に巣食っていた大量の蝙蝠怪人たちが一齐に活動を開始し、夕暮れの闇の中に不気味なシルエットを映しながら飛び去っていった……

「わかつておろう……創世王様の望みを叶えるための儀は近い……」

ダンテムが三神官に問うように尋ねた。三神官達は、それぞれの表情に強烈な悪意の色を浮かべ……

「人間どもの抹殺……文化、文明の破壊……それこそが蘇りし我らのなさねばならぬ仕事……」

ダロムが白い顔に笑みを浮かべていった……

「驕れる人間どもには、鉄槌を下さねばならない。我らゴルゴムの脅威を……」

バラオムが敵かな声で言った。二人の言葉に応えるようにビシユムは……

「ホホホホホホホ。人類の滅ぶ様をみたいものですわ……」

愉快的催しが行われることを期待するかのように応えたのだった……

……三神官の強力な悪意が神殿内に浸透していくように瘴気が立ち上り始めていった……

第二東京市の郊外の森で、シンジはスコップで掘り起こした地面を埋めていた。彼の傍らには、銀髪、赤目の女性　ラミエルが居た。

シンジの身長は179で彼女は164ほどだった。

「マトリエル……」

彼女は、昨夜の追っ手によって殺された同胞の名前を呟いた。あの狂気に満ちた穴倉から隙を突いて二人で、逃げ出した……

追っ手に追われ、この場にいるシンジがいなければ殺されていただろう。

「これで、終わったよ……」

シンジはちょうど、穴を埋め終え、適当な大きさの石をそこに載せて墓石とした……シンジはしゃがみこみ、安らかの眠るように祈った……

「碇シンジ……ありがとう……」

ラミエルはシンジに礼をいい自身も同じように殺された同胞が安らかに眠られるようにと祈ったのだった……

そして、二人は立ち上がりその場を後にした……

ラミエルは、今や赤く染まった森をものめずらしそうに見えた。
”カラカラ”となく虫の音、僅かな風にざわめく草木……

あの地下世界に閉じ込められていた彼女にとってそれらはすべて新鮮にうつり、言葉にできない美しさを持っていた……

「綺麗だね……この光景は……」

突然、シンジがそう呟いた。ラミエルもその言葉に同意した。そこ

には、確実に息づく生命の世界があったからだ……

「……そう」

シンジに借りた上着がずれたのを直しながら、彼女は彼の横顔を凝視した。今まで見たリリンの中では、最も優しい顔立ちをしていると彼女は思った。

あの地下世界に居たりリンの女は顔こそはそうみえても、そんな風を感じられることはなかった。

この世界での異端である自分をもののように彼らは扱った……そんな自分は、この世界で生きられるだろうか？

不意にラミエルはそんな事を思ったのだった。異端は排除される……それは、どこでも起こるものだ……世界に受け入れられない異端は、何故生まれるのだろうか？

177

「何だか、自分が何故、この世界に居るのかって……考えているみたいだね」

シンジは、自分を見るラミエルの視線に応えながら、彼女の心情をそのまま口に出した……

「……私達使者は、決して何処にも行けないし、帰れないわ。単一の存在として生み出され、命をつなぐことさえできない……そんなモノが生き物として、この世界に居てもいいの？」

ラミエルは、目の前に広がる風景から感じた自身への疑問をシンジに言った。

「確かに、それは僕にも言える事かな。生身じゃないし、時間の流れは皆と違う。確かにそう思ったことはあるけど、この身体は、もうひとりの仮面ライダーシャドウが僕を助けてくれた証だ」

「……証……」

「そうだ。彼が僕にしてくれたように、僕も彼のしてくれたことに応えたいと思って、戦ってきた……」

シンジの脳裏に一年間の戦いが蘇ったその過程で出会った人達のこととも……

「僕が仮面ライダーを名乗って、三ヶ月ぐらいのときだったかな。ある恐ろしい怪人と戦っていて、そいつに負けてしまった……」

驚いたようにラミエルは目を見開いた。彼も負けたことがあることが信じられないといった具合に……

「倒すために山で特訓をしていた。そのとき、習得したのが”梅花の型”だったんだけど、もうひとつの収穫があった」

「もう一つの収穫？」

「……梅花とは別の技の一つと、戦いにはまったく関係の無いことだね。山で出会った”彼”が教えてくれた”人生”についてだよ……」

「”人生”……」

不思議な響きをもつ言葉にラミエルは漠然と呟いた……………

「まずは、彼のことから言うよ。彼は、人間じゃなかった…第二次大戦の時に作られた機械兵士としてこの世に生まれたんだ…兵器として……………」

「兵器として……………」

「彼は、戦争には出なかった。彼の父が、凄惨な戦争に心を持つ彼を駆り立てたくなかったから。彼が目覚めたのは1987年だった……………」

シンジは、焚き火を挟んで向かい側で相棒の犬と居る彼の姿を脳裏に浮かべた……………」

「父親がある男を止めるために彼を目覚めさせたんだ。その男は、自身の欲望を満たすために多くの命をつくり、操って、死に追い込んでいたんだ。男を止めるために、目覚めたばかりの彼に”敵”を教えるために、父親は敵に討たれることを臨んだ……………」

「……………」

「目覚めたばかりの彼は、その敵と戦ったんだけど。何も分からな
い彼は、翻弄されて、負けてしまった…誰も居なくなった崖の上
でこういったんだ。”何故、この世に生まれたんだ”と……………」

「彼は、それから、どうしたの？」

「戦い続けたんだ。それが父親の願いだったから。だけど、彼は一人じゃなかった。戦いの中で彼を助けようとした彼にとって大切な

人達…そして、彼の親友達が支えてくれたんだ……」

「彼は、勝ったの？今、どうしているの？」

ラミエルは、どうしてもシンジの言う”彼”を知りたくなった。

「苛烈を極めた戦いもついには、首魁の男を残すだけになった。だけど、最後の戦いで彼は、己に秘められた力を傷つけられ、この星を破壊してしまう危機を齎してしまった……力はそれだけ巨大で危険ものだったんだ」

「…それで、どうしたの……」

彼は、どうしたのだろうかとラミエルは思った。

「うん…その力を止めるために彼は、力を壊すことを選択した。だけど、それは彼の大切な人達との別れを意味していた。力が無ければ、彼は人間の姿には戻れないことを意味していたから……彼は、力を壊し、大切な人達にこういったんだ」

「ありがとう。いつまでも忘れない……この世に生まれてきて良かったと……」

「……………彼は、生まれてきたことを感謝したのね。みんなに……………」

ラミエルは、話の中の”彼”は過酷な運命の中で自身の生きる道を切り開いたことを悟った……その過程には、大切な人達が彼を支えたことを……

生き物ですらない存在がこの世界で生き抜くためには自身でそれを

切り開かなければならないのだ……

厳しいことだが、それが生きていくものの宿命なのだろうとラミエルは思った。

「ああ、それが青春だって……」

シンジは、普段は絶対にいえないだろう単語を言ってみた。彼は、別れ際にこういった。

”シンジ君、君の青春がすばらしいものであることを……！！”

あれから、会う機会はなかったが何処かで元気で過ごしているだろうとシンジは思った……

日は大きく西に傾こうとしていた……

桐原コンツェルン本社 社長室…

「大神官長様からの召集なのか？」

桐原剛三は、目の前に居る蝙蝠怪人にそう尋ねた。

「そつだ。直ちに集結せよとの事だ。伝えたぞ…遅れるなよ」

蝙蝠怪人の態度に半ば無礼なものを感じたが、剛三はそこまで気にすることは無かった… 上がどんな態度をとろうとも彼には関係の無いことなのだから…

「やはり…アレか…さて、どんなことになるのだろうか…」

少しだけ口元をゆがめながら、彼は席を立って”夜のみこう”へと足を進めたのだった…

秘密の回廊の奥にある鎧で身を包み…闇の男…クールギンへと変貌するのだ…

瘴気が立ち込める神殿内を黒いスーツを纏った筋骨隆々の男が歩いてきた。独特のダンディズムを現すかのように首に巻いた白いタイをなびかせて……

「……いつもながら、早いものだな」

「ん……その声は、ダロムのジジイか？」

男は、自分の目の前にいつの間にか白いフードの小男が立っているのに気がついた。

「フツ、相変わらずだな……」

「そんなところだ。ゼーレやら、ICPOの特殊課が活発になって第三東京市にスパイを放ってやがる……この分だと、奴らも着ているぞ……」

「……仮面ライダーか」

ダロムは、端的にその単語を言った。男の目の色がまるで獅子の様に獯猛な色を宿したのだった……

「そつだ。あいつらは、風のようにやってきては、嵐のように全てを蹴散らしていく……完膚なきまでにな……」

男の姿が変わっていく、黄金の身体をした獅子のような怪人に……筋肉はさらに増強し、右腕が強固な装甲で覆われた鉤爪へと……

黒いマントを靡かせ、鉤爪をダロムに挑戦的に向けた……

「だが、嵐で全てが終わったわけではない。黒い悪魔”ブラック・サタン”の残焰は、俺が死なぬ限り永遠に燃え続けるのだ!!!」
そう宣言すると、獅子の怪人はダロムの方へと歩みを進めた。すれ違いざまにダロムは…

「……相変わらずの覇気だな。デッド・ライオン……」

「そうではなくては、この世界で生き延びることは、かなわないのでな……」

デッド・ライオンが神殿の奥へ進んでいくのをダロムは、見送るのだった……

とある場所にその存在は居た……

彼の目に映るのは、果てしなく広い銀河の星達。

人間の才智が及ばぬ広さは、その限りない可能性を予感させる。

光と闇のコントラストは、見るものにインスピレーションを起こさせ、その心を魅了する。

沢山の星の中で一際輝く、青い星が存在する。太陽系第三惑星“地球”。

この星には、豊かな水と大気が存在したと幸運といえる位置に居たために、中心部に存在する灼熱の太陽の熱と宇宙を飛び交う放射線から内包する生命を護り、その繁栄を助けていた。

その“地球”から見える星達をその存在は見上げていたのだ…。

影は、頭上に広がる星達を見上げて

“……フフフフ、今宵の星は今までとは違うな、余に何を伝える？”

その影に答えるように、僅かに細かい土ぼこりを乗せた風によって影が着ている黒いローブの裏地である赤い生地が露になった。

黒いローブに覆われた頭部からは、その表情は読み取れない。声の響きは、低く威厳に満ちたものである。影の視線に存在するのは、天空を覆いつくさんと広がる星達。

その星の輝きに影は何を見たのだろうか？

“……遙か、かなたに輝く星。それを覆いつくす闇……。あの途方も無い距離にある星が消えるのはいつであろうか？今、消えたか？それを余が目にするのは何百年も先のことであろうか、いや、今宵

であろうか？フフフフフフ”

影は、頭上に広がる星を掴もうとロープから手を伸ばした。その手に沿うように袖口から、蛇が出現した。“シュー”と夜空に目掛けて威嚇の声を発し、毒牙を構えた。

影はいとおしそうにもう片方の腕で、蛇を戒めた。

そして、天空に存在した一つの星の輝きが消えた。影は、その光景に何を思ったのか、笑い声を上げた。

“フフフフフフ。また一つ、星が消えた。フフフフフフフフ”

満足そうな笑いが辺りに広がっていく。あたり一面には、影の笑い声だけが風に乗って、いつまでも木霊していた……………

「いつまでもそうしていられると思うなよ……………」

影を取り囲むように無数の人影のようなものが現れた…それらは、動物のような奇怪なもの…さらには、鷲をもしたエンブレム、醜い老人、赤と金の色を基調としたロボットのようものが、まるで亡霊のように闇の中で揺らいでいた……………

そのなかでも特に存在の大きい三つ目髑髏があった……………

影は余裕を含んだ笑みで応じた。

“笑わずにいられようか、今日のこのときを……………”

自身に恨めしい視線を投げかける亡霊たちを愉快的な心持で見ている

影の許へ黒い神官服を着た大神官長ダンデムが訪れた……

「創世王様…全ての者達が揃いました」

恭しくダンデムは頭を下げた。

「そうか…ならば、我也行くとするか……」

神殿内の中枢に位置する玉座の間には、様々な顔ぶれが集結していた。

機甲大隊 大隊長 クールギン。補佐 ドランガー。

「いよいよ、創世王様がお見えになる頃だな……」

銀色の甲冑に身を包んだ男クールギンは、何処と無く含んだ笑みで言った。その含んだ台詞に隣に居た髭面の男が僅かにビクついたのは気のせいだろうか……

ゲヒルン 所長 六分儀 ゲンドウ 赤木 ナオコ博士。

(……………まさか、ばれたというのか？いや、そんなはずは無い……………)

どことなく視線を自分の反対側に居る機械化大隊 大隊長が座る席に泳がせた……

機械化大隊 大隊長 デッド・ライオン

「……なんだ？俺に何かいいたいのか……てめえ……」

獅子のような獰猛な面の双方に浮かぶ目が見られないのか、ゲンドウはとりあえず周りを無視することにした……

それは、彼の傍らに居る赤木ナオコも同じことだった。敗残兵と影ではいえるが、機甲大隊も機械化大隊も自分の想像を絶する実戦と経験を積んできた猛者故に直接口で言えるほどの度胸を持ち合わせていないのだから……

「なんだ。何も言わないのか……鬱陶しい……」

まるで汚らわしいといわんばかりのデッド・ライオンは掃き捨てた……

そんな彼らと対峙するように、三神官達が立っていた。そして……

「静粛に……」

玉座の間に声が響く。発したのは、大神官長ダンテム……

「これより創世王様がお見えになる、一堂……頭を下げよ……」

ダンテムの声に呼応するように全体が頭を下げる。頭を下げる中に、バイザーを掛けた老人の姿も……

人類補完委員会 議長 キール・ローレンツ……

玉座に創世王は現れた。

「我は、創世王……この世界の創造を司る神だ……」

圧倒的な威厳と雰囲気を見せ付けるようにして創世王は宣言した……

……

(……世界の創造を司るか……)

クールギンは、かつて自分が居た狂気の帝国の王を思い出した。あの醜い老人”帝王 ゴッドネロス”を……

”余は神。全宇宙の神、その名をゴッドネロス……”

結局は、人間だった……どんなに力を持つとも人間が人間以上の存在になることはできなかった……

だが、今日の前に居るのは、途方も無い太古から存在する恐るべき魔王だ。人間の人間知をはるかに超えた……

(……奴を殺すことができれば、人は神になれるのだろうか……)

仮面の下に狂気にクールギンは笑みを浮かべた。それは、自身が抱き続けた闇の夢……

「これより、諸君らをここへ招いた理由を説明しよう……前へ出る……六分儀ゲンドウ……」

創世王の言葉にゲンドウは、死刑宣告を言われた死刑囚のように動揺した。それは、傍に居るナオコも同じだった…

「そ、創世王様……」

継るようにナオコは玉座の王に視線を向けたが…

「我が出るといったのだ。従え……」

言葉に従うようにゲンドウは前へ進み出た。そして、彼を稲妻が襲った。

「ぐわああああ……！！！！！！」

「しよ、所長……！！！！！！」

一人絶叫するナオコ以外の反応は恐ろしく淡白なものだった……

「何故、貴様は……ANGEL達が脱走したことを、黙っていたのだ？」

「そ、それは……創世王様の……手を……」

「貴様は、いつから傲慢になったのだ？ 我の手を煩わせないだ……人間め……」

創世王は、そのまま念力をぶつけるように視線をゲンドウに向け彼を近くの石柱に思いつき叩きつけたのだった……

その光景をキールは、

「馬鹿な奴だな……」

キールは、10年前に創世王の怒りを買い粉々にされた愚かな女科学者を思い出した…彼女の残した遺産はある程度役に立てているのだが……

「我を欺こうとするもの…それは、我への裏切りと思え……」

まるで、自身の力を誇示するように創世王は言った。

「約束の儀は、いよいよ近い。それにより、我らゴルゴムの民は、千年の繁栄を得ることになるだろう……」

創世王の言葉に一堂が歓声を上げた。そう、自分たちの栄光はいよいよ近くなったのだ……

「その基盤に貢献してくれた”剣”を司る機甲大隊……”目と耳”を司る機械化大隊…昨年、一年の働き、ご苦労であった……」

創世王の視線は、クールギン、デッド・ライオンに向けられ、キール・ローレンツへと移る……

「人間社会に我らの根を下ろしたことへの尽力、感謝するぞ。キール・ローレンツ……」

「はは…ありがたきお言葉……」

キールは、再び恭しく頭を下げた。

「お前には、ゴルゴムの民に入る資格を十分に見せ付けてくれた。褒美として…お前に永遠の命を与えよう……」

「怪人にしていただけるのですか!!!」

興奮した声を上げてキールは言った。なぜなら、それは永遠の命を得ることと同じことだから……

暗黒結社ゴルゴムが有する怪人たちは、五万年以上の寿命を持ち、さらには恐るべき力を有している。その魅力的な”力”に憧れ、積極的にそれを得ようとする権力者は多い…キール・ローレンツもまた、その一人だった……

元々、彼はある組織に所属していたがゴルゴムの”力”に魅せられ、ゴルゴムに走ったのだ。

「そうだ。新たな力による働きを期待している……」

キールへの褒美を宣言した後、創世王は……

「いよいよ時は迫ってきた。だが、不穏な分子の掃除もまた行わなければならない。第二東京市から、異端の王がやってくる。それを早急に葬れ!!!」

「その宣言、待ってもらおうか。創世王!!!!!!」

突然の宣言を打ち消すように、玉座の間にオレビスが現れたのだ……

「剣神か……」

自分に負けない覇気をみなぎらせながら、彼は創世王に対峙した……

「貴様っ！！！！創世王様の前で、無礼を！！！！！！！！」

バラオムが機械でできた手を向けながら、躍り出たが

「別によい、バラオムよ。剣神、何を言いたいのだ」

バラオムを下がらせ、創世王は、剣神オレビスに尋ねる。

「…………… 奴のことに關して、俺には断りもなしか。組織としては、仮面ライダーは脅威。早急に葬るべきとするのか。分からんでもないが、奴を倒すのは俺だ！！！！」

新たな決意の色を創世王に宣言したオレビスは延々と続く会議場に背を向けて闇へと足を進めたのだった……………

「フフフフ。そうか、だが、お前が会う前に葬れば良いだけの事……………」

オレビスを見送った後、創世王は機甲大隊 大隊長クールギンに視線を向けた……………

第二東京市 喫茶 ディアボロ……

「まったく、びっくりしたぞ。お前がまさか、女の子をつれてくるとは……俺はてっきり……」

「だからって、話が飛びすぎですよ。マスター……」

ジト目でシンジはマスターをみていた。ラミエルは近くの椅子に座って、飲み物を飲んでいた。

事の起こりは、数分前のシンジが帰宅したところまで遡る……

あまりに遅い買出しに少し苛立っていたマスターの目に飛び込んだのは、見知らぬ女性を連れたシンジだった……

何を勘違いしたのか、マスターはシンジに駆け寄り”身を固めるのか！！！そうだよな……明日も知れぬ身……思うところが……”などと戯言をほざいたのだった……

”何を言ってるんですか！！！！あなたって人は！！！！！！！！！！”

喝と気合を伴った声によりマスターは沈黙したのだ………

「で、ゴルゴムの関係か？」

「そんなところですよ。追っ手が第三東京市からきました……」

先ほどの喧騒とはまったく別な真剣な表情でマスターはシンジに言った。

「第三東京市か…次期首都候補にもなっている所なんだが、実際のところはよく分らん。色々ヤバイのが出入りしているってきくぞ」

そついいながら、新聞の株の記事にある最も大きい株価を示している桐原コンツェルンをさした。

「確か1988年に大暴落して、2005年に持ち直した企業ですね……確か、大宮コンツェルンも……」

「そうだ。大宮は知っているが、桐原は相当ヤバイ。裏じゃ武器の密売とか色々やっていたらしい。本当のところは分らんが……」

マスターはお手上げのしぐさをして言った後、

「こいつらが支援しているのが人類補完委員会直属のマルドック機関……そのマルドック機関の代表にゲヒルンのトップ3が名前を連ねているわけだ……」

名前には、六分儀 ゲンドウ、冬月 コウゾウ、赤木ナオコの名前があった……

「今日のラミちゃんは、このゲヒルンから逃げてきたと言ったな……」

オレビスはゴルゴム関係だと言った。まあ、推理すると…第三東京市に構える企業や政府は皆ゴルゴムと考えて、当然だな……」

マスターは、自分の息子同然の青年が恐ろしい敵に立ち向かおうとしていることに対して止めてほしいと思った。それは、子を危険から遠ざけたい親心から来るものだった……

「マスター。すでに覚悟はできていますよ……一年前から、ずっとそうしてきましたから……」

シンジは、マスターを不安にさせないとても頼りがいのある大きな覚悟を見せた。笑みすら浮かべているのは、それだけ大きなゆとりがあることを表している……

「……わかったよ。だが、無茶はするなよ……さっそく、第三東京市の知り合いに連絡して言っとくからな」

そう言っただけマスターは奥の方に引っ込んで、携帯電話を取り出した。

ラミエルとシンジのやり取りが、マスターの瞼の内に浮かんだ……

”頼む……！彼女を……ゴルゴムから助けてほしい……！お願いだ！”

”……！仮面ライダー……！！！”

”わかった……君が言うのなら、その人はとても辛い場所に居るんだね……”

そうだ。シンジもシャドームーンに辛い場所から連れ出された。今度は、シンジがシャドームーンいや、仮面ライダーシャドウの役目を行うことはマスターにも分かっていた……

「絶対にゴルゴムに勝てよ…シンジ…仮面ライダー……」

その日の夜、シンジは親しい人達に第三東京市へ行く旨を告げるのだった……

早朝、シンジは第三東京市へ続く山道をバトルホッパー”蝗龍”を走らせていた。彼の後ろにはフルフェイスのヘルメットをかぶったラミエルも搭乗していた。

第三東京市に続く高速道路は存在するのだが、この高速道路がゲヒルンの大本である人類補完委員会に大いに関係のある桐原コンツェルンが管理している。

故にラミエルを連れていくことを考えるとどうしても危険を避ける必要があった……

すでに第三東京市へは、協力者も付けている。一行はまずそこへ向かうのだった……

近くの山道の空を影が通り過ぎた。それは、戦闘へりをそのまま小

さくしたようなフォルムを持ったロボットであった……

「機甲大隊本部より…仮面ライダーを二時の方角で確認…これより追撃を行います……」

彼のセンサーが道を行くシンジ達の姿を捉えたのだった。

「ん…何か来る……」

公道を走るシンジらに空から迫ってくる影があった。それは、機甲大隊より放たれたバーベリイという戦闘ヘリの能力をもつロボットだった……

「目標確認…これより殲滅を開始する……」

両腕のホルダーに装備された小型ミサイルをシンジら目掛けて発射した。

「な、なに!!?!?!?!」

突然背後に上がった火の手に対してラミエルが驚きの声を上げた。新たに驚きの声を上げる暇も無くバーベリイの攻撃により火の手が上がる……

「しっかり捕まって!!?!?!逃げ切るよ!!?!?!」

シンジはラミエルにそういうと、ハンドルグリップを強く握ってバトルホッパーを加速させた……

「逃がすか……」

バーベリイは逃げるシンジらが気に入らないのか背中の中四枚の翼を強く回転させて、追撃の手をさらに強めるのだった。

シンジらのはるか後方に行く一台のオープンカーがあった……

「おい、なんだよ？アレって、爆発じゃないのか……」

平凡で気弱な顔立ちをした大学生ぐらいの男が思わず声を上げた。彼の名は、浅利ケイタ。第三東京市の私立大学に通う青年である。

「馬鹿！！なんで、こんなところでそんなものが上がるんだよ！！！！何かの事故ってこともありえるんじゃないか……」

ケイタの言葉に反論を述べたのは、同じ大学に通うムサシ・リー・ストラバーク。反論を言うものの、現に火の手は目の前ではつきりとした形で上がっていた。

「じゃあ、行ってみようか？おもしろそうじゃん」

彼らの議論を始めから聞いていなかったように発言したのは、この車に居る唯一の女性 霧島 マナ。

天真爛漫にマナは、事故なら事故で現場を見たいと思った。彼女の野次馬根性がそうさせるのであった。

「分かったよ、マナ…行ってみようか」

ムサシは、マナがそうしたいのならという形で応えるのだった。

シンジは、バトルホッパーを走らせて近くのトンネル内に入った。バーベリイは自身のテリトリーである空から離れるつもりは無いのか、トンネルの出口の方へと移動を開始した。

「……待ち伏せするつもりか……」

「どっつするの？」

シンジの発言にラミエルが不安そうに尋ねた。こんなにも早く第二の追っ手がくるのは、彼女自身も考えもしなかったようだった。

「大丈夫…ラミ、君は一旦、ここで待っていてくれ…あいつを追い
払ってくる」

彼の身体が、淡い緑色に包まれて行く…そう、銀色の戦士へと変身
したのだ。

「終わったら迎えに行くから…それまで待っていてくれ」

緑色の目に浮かぶ穏やかな感情が彼女を安心させた。

「……うん……」

軽く頷いて応えたのだ。そこへ、一台のオープンカーが通り過
ぎていった。目の前のことしか見えていないのかそのまま通り過ぎ
ていった。

バーベリィは、トンネルの入り口付近で待ち構えていた。

「来たな…食らえ!!!!」

出口から出てきたものに対してバーベリイはミサイルによる攻撃を開始した。

「うわああ！！！！」

いきなり目の前が爆発したことにムサシは叫び声を上げた。ハンドルを激しく切り、そのままガードレールに激突してしまった。

ケイタは投げ出され、マナは頭を打って気を失ってしまった。

「ん…？違う」

バーベリイは自身が狙っていた標的とは違うことに声を上げたとき、トンネルからバツタを模した赤茶けたバイクにのる銀の戦士が現れたのだった。

「くそ…隠れてやがったのか！！！」

バーベリイは、すぐに上昇してシャドウを追撃する。水を得た魚のように飛行しながら、両腕に装備されたミサイルを放つ。

突き進むシャドウとバトルホッパー”蝗龍”の左右で火柱が立った。炎と爆風を吹っ切るようにシャドウはバトルホッパー”蝗龍”をさらに加速させた。

大地を跳ぶ蝗のごとくバトルホッパー”蝗龍”は、バーベリイに向かい合うように反転する。

(…奴の弱点は……)

優れた視力を持つマクロアイと第三の目が空を飛ぶバーベリイを捉えた。緑色の視界に映し出されたロボットの胸部にある強力な熱を発する機関を探り当てた。

「そこか！……！」

シャドウは敵の弱点を探り当てたのだった。シャドウに伝えるようにバトルホッパー”蝗龍”の目が光り、頭部のクラッシャーが荒々しい唸りを上げる……

突撃するようにバトルホッパーは、バーベリイに向かっていくように飛翔した。

「な、なんだと！……?!?!」

臆せず向かってくる標的に対して、僅かに怯んだバーベリイ。その間にバトルホッパー”蝗龍”の荒々しいクラッシャーがバーベリイの胸部を貫かんとした。

「うわあああ！……！」

クラッシャーがバーベリイの胸部を貫いた時、爆発が起こった。

爆発の中から、火の手を上げてバーベリイがシャドウから逃げるように飛び去っていった。向かった先は、第三東京市……

「やはり、第三東京市か……！」

銀の戦士は、第三東京市に何かが居ることを悟るのだった……

「まことに…申し訳ありません…クールギン様…創世王様…」

バーベリイはほぼ大破したかのように傷ついた身体で目の前に居る自身の君主達に土下座をして詫びた。

「なんと…機甲大隊が敗れたというのか？」

バラオムが驚きの声を上げた。なぜなら、機甲大隊は組織の中では最強の攻撃力と防御力を備えた軍団なのだ。バーベリイですら、通常の怪人軍団に匹敵する戦闘能力を秘めているのだ。それを…

「やはり、キング・ストーンパワーか……」

ダロムが玉座にすべる創世王を視界に入れて呟いた。やはりあの石は恐るべき力を持っている。そうだ、あの石を持つものこそ、王になるべきモノなのだから……

「ククククツ…手痛くやられたようだが、クールギン。あまり慌ててはいないようだな…」

「創世王様ツ！！！！」

クールギンの傍に立つドランガーが驚きの声を上げた。ドランガーに対してクールギンの様子は落ち着いていた。

「はい…すでに代わりの者を向かわせる算段はできております…」

クールギンは鎧の下で薄く笑いながら言った。創世王も彼のことを理解しているのか、「ククツ」と笑みを返して応えたのだった。

「創世王様。バーベリイは確かに失敗しました…この者のこれまでの活躍を踏まえて相応の処置を願います…」

「なにっ！！！！クールギン、貴様！！！」

バラオムが反応するように言った。このクールギンという男、失敗したことを詫びるところか不適な態度で創世王に無礼とも取れるものいいをし、失敗した役立たずを助けるようにまでずうずうしいことをいうのだから……

「まあよい。バラオム…機甲大隊の世界での活躍は我もよく理解しておる…故に、今回の件は不問とする………」

「ありがたきお言葉を………」

クールギンは恭しく頭を下げて感謝の意を述べたのだった。クールギンは同じように頭を下げたドランガーに視線を向けて…

「バーベリイをラボへ連れて行け」

「ははっ!!」

ドランガーの言葉に答えるように一体のロボットが両脇からがっちりとバーベリイを拘束して行くのだった……

「それでは、さっそく謁見ください。ゴチャック…前へ……」

クールギンが指示を出すと、蚊のような顔立ちをした灰色のロボットが前に進み出た。

「創世王様。ゴチャックと申します……」

ゴチャックはまるで空手家の挨拶のような構えを取りながら、創世王に臨むのだった。

「待ってください!!! 機甲大隊は失敗しました!!! 今度は、私達が……」

ゲンドウの代わりに席にいたナオコが叫んだ。クールギンが視線で彼女を黙らした…

「ほう…お前達の所有する兵器なら、奴を倒せると?」

「そうよ…制御に成功したANGEL?13”バルディエル”なら……」

彼女の背後から、黒い装甲を纏ったE-ソルジャーが現れた。量産

型とは違って、目は二つ存在し、口も大きくは無かった……

「ならば、どちらが強いか。戦わせて見ればいいだろう?」

クールギンは、まるでナオコを挑発するように言った。

二人の雰囲気が悪化になるうとしている中、玉座の創世王と大神官長は……

「よろしいのですか?創世王様……」

「かまわん……これも余興だ……我を楽しませてくれる……クールギンの提案にしたがつて、奴を倒すものをこの場で戦って、生き残ったものとする!……!」

突然の創世王の宣言に、ナオコは啞然としたが……

「臨むところだわ!……!バルディエル!……!……!」

”キシャアアアアツ!……!……!”

吼えるようにバルディエルは声をあげた。

(…なんとかして、ここで所長の名誉を挽回するのよ!……!)

ナオコは、無様に痛めつけられた所長のためにバルディエルを向かわせるのだった……

「ゴチャックッ!……!」

ドランガーが喝を入れる。

「ははっ、俺は、機甲大隊　ゴチャック！！！！行くぞ！！！！！」

ゴチャックとバルディエルが互いに飛び出したとき、神殿内が異様な活気に満ちはじめた。それは……古代コロセウムで行われた競技の……

” キシャアアアアア！！！！！”

バルディエルは四足の獣のようにゴチャックへと向かっていく。

「はあああ！！！！フンっ！！！！！」

向かってきたバルディエルを真正面からゴチャックは受け止めて、パワーでそのまま押し返した。

「でええい！！！！！」

倒れたバルディエルの喉元目掛けて、ゴチャックは左ストレートを打ち込む。

” シアアアアア！！！！！”

転がってバルディエルはこれを回避し、床にはゴチャックの左手が床に大きくめり込む。

” シアアアアア！！！！！”

ゴチャックの右側からバルディエルは襲い掛かる。首を絞めて殺す

「ゴチャック…フライング!!!!!!」

強引に自身の下へ引き寄せせるかのようにバルディエルを反対方向へ投げ飛ばしたのだ。

” シャアアアア!!!!!!”

ゴチャックの技の威力が大きすぎるのかバルディエルは床に頭から突っ込んでしまった。その好きにゴチャックは背後に回り…

「ゴチャック……………ロック!!!!!!」

バルディエルの首を完全に両手でロックして、勢い良くまわした。

” シャアア……………啞……………ああ……………”

首の骨が完全に粉碎されたのかだらしなく揺れる首を持て余すようにして、バルディエルは倒れたのだった……

「……………」

倒れたバルディエルが信じられないのかなオコは、呆然とするしかなかった……………

「ゴチャック。身体に異常は無いか？」

クールギンが呆然としているナオコを無視して勝者であるゴチャックに尋ねた。

「あるはずが、ごいません!!!」

熱の籠った声でゴチャックは返したのだった。自身のコンディションは常に正常だから……

「よし…行くがいい。機甲大隊 闘士 ゴチャック…」

創世王がゴチャックに激励の言葉を送った……

シンジとラミは、事故にあった三人の手当てをしていた。幸いにも三人とも大きな怪我はしていないようだった……

「とりあえずは、三人とも大丈夫だね」

シンジは、三人を見ながらそういった。

「ああ、悪いな。何だか手間を取らせたみたいで……」

ムサシは、額の傷に僅かな痛みを感じたのか、少しだけ呻いた。

「ムサシよりは、マシみたいだけどやっぱり痛いや……」

彼の隣にいるケイタも全身の打ち身が痛かった……

「一応、連絡しておいたから後は、レッカー車か何かが来るのを待っているといいよ」

シンジは警察に一応の連絡を入れておいたのだった。こういう場合は、自分が口を出すよりもそちらに任せた方がいいと思ったからだ

……

「ええ〜。シンジは、一緒に居てくれないの？」

不満な声を上げるのは、マナであった。どうやら、シンジの事が気に入ったのか、このまま一緒にいてもらいたいらしい……

初対面なのに名前前で呼んでいるあたり、彼女の性格の馴れ馴れしさが良く出ていた。

「マナ…それじゃあ、碓君が迷惑じゃないのか？」

ケイタがマナを制止するように呼びかけるのだが、彼女は聞いてくれなかった。

「ねえ、どうせ第三に行くんだから。一緒でもいいじゃない？」

愛くるしい笑みを浮かべてマナは言った。当のシンジは……

「確かに行き先が一緒なら、そうしても構わないけど…向こうが危

じる。

「もう追っ手が……」

不安そうな彼女にシンジは

「大丈夫だ…あいつの狙いは僕だけらしい…その証拠に……」

近くに邪悪な気配は無い。おそらくあのロボットだけできたのだろう…正々堂々とは、そうとう実力には自信があると見た……

「相手になるう…挑戦してくるなら……」

シンジは、大胆不敵ともいえる笑みを浮かべていった。挑戦してくるのなら、受けて立とうという気迫があった……

「あなたって…不思議……」

ラムはシンジが見せる多面的な表情にそういうしかなかった。

「それじゃあ、ここで待ってて……」

そう言ってシンジはガードレールを飛び越えて、芦の湖へと駆け出していった。

「えっ、!!!?! 碇君って、一体何なの!!!?」

ケイタが情けない声を上げる一方で、熱の籠った視線を彼に送るマナとそれに呆れるムサシの姿があった……

「……大丈夫よね。だって、彼は仮面ライダーだから……」

ラミは、そう呟いたのだった……

芦の湖 岸辺……

「着たか……碇シンジ……」

ゴチャックは自身のレーダーが標的を捉えたことを察知した。視覚センサーが碇シンジの姿を捉えていたのだ。

「お前は、ゴルゴムか……?!?!」

ゴチャックに対峙するようにしてシンジは言った。

「いかにも、俺は機甲大隊 闘士 ゴチャック……!! お前を倒しに来た……!!」

熱の籠った発言には、彼の直情的な性格をうかがうことができる。

「第三東京市に何かあるのか？」

「言う必要は無い！！！行くぞ！！！！！」

戦いに来たという言葉通り、ゴチャックは話し合うつもりは無いのか、一直線に突進してきた。ゴチャックの勢いを殺すようにシンジは往なし、

カウンターとして、鋭い拳による一閃を放った。

その一閃をゴチャックは、受け止め凄まじい力をシンジの拳に加える。

(くっ……何て、パワーだ。それに……)

ゴチャックはその間にも、強烈な蹴りをシンジの頭部めがけて放った。

その蹴りを姿勢を崩すことで交わし、一旦距離を置く。

「どうしたっ！！！！！！！！この程度か！！！！！！！！碇シンジ

！！！！！！！！！！」

ゴチャックの言葉にシンジは、

「このままで終わるつもりはない！！！！！！！！行くぞ！！！！！！！！！！」

距離を詰めるべく、シンジは一気に駆け出し、間合いに入る。だが、

ゴチャックもそれを予想していたのか、

「中々のスピードだ！……！……！だが、まだまだ、甘いわ！……！……！」

間合いに入ってきたシンジの手をとり、その勢いに任せて

「ゴチャック・フライング！……！……！……！……！」

彼を投げ飛ばした。

「くっ、トオツ！……！」

投げ飛ばされたが上手くシンジは地面に着地し、脚力を駆使してゴチャックよりも高く飛び、彼の反対側に着地した。

「……強い……」

相手は、自分よりも遥かに戦闘経験があり、ここまでの脅威を感じたのは、剣神との戦いぐらいのものだ

「このままでは、勝てない。ならば……」

シンジは、ゴチャックを鋭く闘志が籠った視線で見据え……

「……変・身……」

独特の構えを取り、彼は、蝗の怪人を経て銀色の装甲を纏った戦士に変身する。仮面ライダーシャドウに……

「仮面ライダー・シャドウ!!!!!!!!!!」

挑戦的にゴチャックに腕を向けて名を名乗った。

「来たか…よし、行くぞ!!!!!!!!!!仮面ライダー!!!!!!!!!!」

ゴチャックは自身にプログラミングされた闘争本能を熱く燃え上がらせて、シャドウに向かっていく。

「トウツ!!!!!!!!!!」

シャドウは両足のレッグトリガーを使って、向かってくるゴチャックと激突する。

「又ウウウン!!!!!!!!!!」

「はああああ!!!!!!!!!!」

互いの力と力がぶつかり合い、衝撃が襲う。金属音を立てて反発し、二人の体が離れた。

拳法独特のしなやかな構えでゴチャックを見据えるシャドウと空手の構えを取るゴチャックが同じくシャドウを見据える……

「ぬおりゃあああ!!!!!!!!!!」

ゴチャックが先制攻撃を仕掛けた。勢いとパワーを兼ね備えた拳がシャドウを襲う。

「赤心少林拳”梅花の型”!!!!!!!!!!」

シャドウにとって最大の防御である梅花の型を展開させる。

「うおおおおー！！！！」

ゴチャツクはそれをくずしてやるといわんばかりに強力な連打をシャドウに浴びせてきた。

(なんて、凄まじい攻撃だ！！！！)

シャドウはゴチャツクの鋼鉄の拳から打たれる驚異的な攻撃力に厄介さを感じ始めていた。シャドウの緑色の目にさらなる闘志が宿る

.....

「はあああー！！！！」

ゴチャツクの手を両手で取り、シャドウは背後へと吹き飛ばすが、

「うおおおおおおー！！！！！！！！」

ゴチャツクは飛ばされてなるものかと、強引にシャドウの攻撃を押し切ろうと全体重を押ししてきたのだった。

「！！！？！！！！」

それが災いになったのか、シャドウに僅かな隙が生じてしまった。その隙を逃さず、ゴチャツクは一瞬でシャドウの背後に回り、彼の首を両腕で完全にロックした。

シャドウの第六感が危険を察する。このまま技を決めさせては、終

わってしまつことを……

「ゴチャック……」

決め技が入ろうとしているのか、シャドウの首の骨が僅かに軋む。だが……

「ロツ……」「ああああああ！！！！！！」

決め技が入る直前でシャドウの肘が、背後のゴチャックの腹筋を襲う。肘の先端から荒々しいトリガーが放たれた。

「うおおおお！！！！！！」

装甲を貫かれ、体内の機械が損傷されたことにゴチャックが声を上げた。よろめき後退する……

「でえええい！！！！」

シャドウは、その隙を逃すことなく、ゴチャックの身体に拳と蹴りを加える。シャドウの蹴りが強烈だったのか、ゴチャックの型の装甲がはがれた。

ゴチャックは反撃として拳を突き出す。

「ライダー・チョップ！！！！！！」

淡い緑色の光を手刀に纏わせてゴチャックが繰り出してきた拳を腕ごと両断する。金属フレームが大きく歪み油圧系部品からオイルが、配線からは火柱が出た。

「トウツ！……！！！」

この間にシャドウは、飛び上がり首元目掛けて

「はああああ……！！！」

レッグトリガーを併用したキックをゴチャツクの首目掛けて、加えるが、

「！……？……！！！」

ゴチャツクのメモリーに蓄積されたある戦闘を繰り広げた戦士とシャドウの姿が重なった。

「うおおああああああ……！！……！！……！！！」

まるで恐慌状態に近い叫び声を上げてゴチャツクは、シャドウのキックを回避し、地上に降り立ったシャドウ目掛けてやられていない拳を突き出す。

「俺は……絶対に負けない……！！……！勝つんだ……！！……！！！」

体中がボロボロになっても不屈の闘志をみなぎらせながら、ゴチャツクはシャドウの顔面に拳を当てようとしますが、

「それは、僕も同じだ……！！！」

シャドウの闘志は、ゴチャツクの闘志を吹き飛ばすかの勢いに呼応するようにゴチャツクの体に向かって拳を数発打つ込んだ。

「うおお……があ……」

「今だ！！フン……」

よるめくゴチャックに対して、シャドウは力を混め、レッグトリガーを”カシャン”と言わせて飛び上がり……

「シャドウ・キック！！！！」

緑色の淡い光を放つ鎌となってシャドウは、ゴチャックの鋼鉄の身体を貫いたのだった……

上下に分かれたゴチャックの体が大爆発を起こした……

”カシャン”

背後に広がる爆発にシャドウは視線を向ける。

「機甲大隊 闘士 ゴチャックか……まちがいなく強敵だった……」

長引けば、こちらが敗北していたかもしれない。

シャドウの姿からシンジの姿へと変りながら、シンジはこの場を後にした……

倒れされたゴチャック残骸を背に……

……芦の湖の水面が風になでられる水音だけが静寂の中に響いてい
た……

彼の残骸に人影が刺した……マントのようなものを靡かせた影が……

「機甲大隊の手馴れでも、奴を止めることはできなかったか……やは
り、奴を倒すのは、この俺だ……」

影の主オレビスは、第三東京市で繰り広げられる自身と好敵手との
戦いに旨を躍らせるのだった……

「次は、機械化大隊あたりが来るか…倒されるなよ。お前は、俺と
決着をつけねばならないのだ……」

オレビスは背を向けて芦の湖を去っていった……

第二話「第三東京市へ……」了

第二話「第三東京市へ……」（後書き）

とりあえずは、アンチネルフではないのですが、この三人は悪役と
いうことをお願いします。

アクセスしていただいた方々には感謝です。それでは、この辺で、
では！！！！！！

次回来週の土曜日あたりに。

それでは、では！！！！！！！！！！

第三話「空を翔る閃光」(前書き)

第三話でございませう。そろそろ、多重クロスと居れたほうがよいで
しょうか？

第三話「空を翔る閃光」

ゲヒルン副所長室

「私と共同戦線を張ろうと君は、持ちかけていると考えて良いのかね？」

「そうだ。さすがは、冬月先生…話がよく分かる。」

冬月の前に立つのは、機械化大隊の大隊長であるデッド・ライオン。

「仮面ライダーは必ずここへ乗り込んでくる。だから、もぐりこんだ鼠の掃除をかねてな…」

「スパイか…だが、心当たりはあるのかね？私としては……」

そういいながら冬月は、「赤木リツコ」に関する書類をデッド・ライオンに見せた。

「赤木博士の娘か？何故、そう思うんだ」

デッド・ライオンは鎌をかけるようにして冬月に尋ねた。彼も冬月と同じ意見であることは明白である……

「同じ技術課のキョウウ君と同じ印象を持ったただけだよ。自分の子供すらまともに面倒が見れずに手を焼いているのだから……」

「なるほど…確か？惣流博士が、娘に愛想を付かされた。つまり、赤木博士も同様だと…」

「そういうことだ。赤木リツコ君が着てから、妙に落ち着かんのだよ。まるで、足元をかきまわられているように感じる…二人に言っても分かってくれるものではないがな……」

冬月は自嘲気味にデッド・ライオンに言った。自分の子供に限ってといたい親ほど子を良く見ていないというのが冬月の持論であった。

「それなら、不安を取り除くか？」

デッドライオンはその獅子のような獰猛な面に凶悪な笑みを浮かべていった。

言わんとしている事は、疑わしきものの尾を掴むために行動を起すべきだと……

「……わかった。君の話を受けよう。私は、何をすればいいのかね？」

冬月は、この話に乗ることにした。ゲンドウやナオコならまず乗らないだろうが、不安要素をいつまでもそのままにしておくわけには行かないので……

「お前らの所有しているANGELの中に、確か自爆できる奴がいたな……」

「ああ、？10か。確かに…だが、アレは……」

「大丈夫だ。こっちの方でフォローする」

デッド・ライオンは自身が持ってきた書類を冬月に見せた……

「これは?!?!?!?!」

驚きの表情で冬月は言った。面白そうにデッド・ライオンは彼を見る。

「計画の要は…この”サタン虫”……そして、こいつだ」

彼が掲げた小瓶には、髑髏の模様がある蜘蛛に似た奇怪な昆虫がせわしなく足を動かしていたのだった。

いつの間にかデッド・ライオンの背後には、ソファアに座る瞬き一つしない男に寄り添うように立つ黒い影が立っていた。

「デッド・ライオン様。ボナの配備及び赤木リツコの住まう近辺への”虫”の散布は完了しました…」

そこに立つのは、黒い怪人であった。目は鋭く、口元は昆虫類を思わせる四つの牙が発せられる声に呼応するように上下する……

「そうか…ゴア。ご苦労だったな。引き続き、監視を続ける。尻尾を掴んだら…」

デッド・ライオンは、目元を強めて

「……殺せ……」

「ははっ……」

デッド・ライオンに恭しく頭をたれてゴアと呼ばれた怪人は、ソファーに寝かせていた男の前に立ち……

「……………インヴェード……………」

そう言つて、紫の半透明の物体になつて男の胸に溶け込んだのだつた……そして、何事も無かつたように男は副所長室を跡にするのであつた……

「あれが”地球外生命体”なのか？」

冬月はゴアが出て行つた後、デッド・ライオンに聞いた。

「ああ、1995年に壊滅した”スペース・マフィア”の残党だ……奴らは、スパイにはうってつけの人材だ……」

デッド・ライオンはゴアの粗方の素性を簡潔に説明した。冬月は、改めてこの世界の凄まじさに舌を巻くしかなかった。

”インヴェード”という能力は、確かに凄いと思う冬月だつた……

「そつだ。この業界には、俺のような改造人間の他にも、アンドロイド、異次元人、超能力者、ミュータント、知性のある化け物、宇宙人なんてのは、ほとんど当たり前前の世界だ……」

「なるほど……それなら”天使”が居ても不思議ではないということか……」

それらは皆、1971年の世界的な秘密結社の暗躍を決起として怒号の勢いで現れたのだ。それらが力として誇示するは、2015年、現在の科学力を大きく上回るとしたら、どうだろう。そして、それらは過去に壊滅している……

”世界征服”という途方も無いスケールの野望を達成させることなく……

そう思うと、使徒はかなり大人しい部類にあると冬月は思った。人間が手をつけなければ、何事も無かったわけだから……

「創世王様の野望を達成させるためだ。大人しかろうが利用できるものは利用することだろう……」

デッド・ライオンは、相手がどうあるかと目的のためには関係ないと思う。利用できるものは、有効に使い、こちらの役に立てる。

これは過去に彼が所属した組織のやり方だった。

「神をも恐れぬということか……目的のためなら……」

冬月は、まるで全てを冒瀆するデッド・ライオンの言葉に対して、僅かな皮肉の色を浮かべて答えた。

「神か……そんなもの……支配者の決めた唯一のルールだろうが……」

支配者とは、絶対の力を持つもの……それこそが神……それ以外に何があるというのだろうか……

デッド・ライオンは、冬月の前で大きく口を開けて笑った……………

絶対の力を持つ唯一の存在”創世王”に率いられた究極の軍団”ゴルゴム”こそが、まさにそれなのだから……………

「そうだ、カこそがすべてだ。それは、何処の世界でも同じことだ……………」

……………

いつものようにリツコは自分のオフィスで上層部から回ってくる書類の整理をしていた。入って日は浅いがそれなりに成果を上げているので最近では重要なものも任されているのだ。

「大変なものね……………」

確認して判を押すだけでいい簡単なものだが、量が多いと単純作業の繰り返しは大変なものである。

作業をしている姿だけなら、普通の研究所の職員に見えるが彼女の目は単なる研究所の職員のものではなかった……………

(……………影の仕事に関係しそうなものは、掴めそうに無いわね……………母さん……………いえ、赤木ナオコ博士達がやっている研究だけは絶対に成功さ

せてはいけないわ)

母が人には言えない恐ろしいことをに加担していることを彼女は察していた。確証は無いが行っていることは間違いない。彼女の感覚がそう言っていた……

(今は、何もできないか……今日はこの辺で切り上げて帰りましょう……)

すでに書類の処理は終わっていた。リツコは挨拶をそこそこにして帰宅の途につくために部屋を出て行くのだった……

部屋を出た後に彼女のオフィスに影が現れた。歪むように現れたのは……

「赤木 リツコ……疑わしきものは…処刑……」

現れたのは、怪人ではあるが、人間らしさを残した黒い異形だった。特徴的なのは、膝小僧から足元に均等に突き出た突起物であり、二重構造の分厚い皮膚構造をした胸部である……

その怪人は、リツコの後を追うようにして部屋を出て行くのだった……

ゲートを通じて、リツコは終電のリニアに乗り込み、から空きだらけの座席に座った。ふう〜と深く腰を掛けながら、彼女は、リニア

の窓の向こうに見える大都会と向かい合うように立つ年代を感じられる住宅街に目を向けた。無機質な印象のビルよりも人の生活が染み付いた家の方が彼女は好みだった。

幼少の頃から、祖母に預けられていたのでそのときの祖母の家がそのまま彼女の好みになっていた。

「今日は、報告をしなくていいから。早く帰ってあの子に会いたいわ……」

リツコの脳裏に部屋で同居している飼っている猫の姿を思い浮かべるのだった。そう思うと何処と無く頬が緩んでくるのを感じた。

彼女に気づかれないように、隣の車両の影が差した座席に黒い異形が立っていた。長く硬い爪をリツコが座っている座席に向けて……………

「疑わしきは処刑…そして…殲滅……………」

異形の傍には瞬き一つせずに座っている男が一人……………

シンジ達は、午後六時ごろに第三東京市に入ってきた。

「あの三人とは、また別のところで会えそうだな……」

シンジは昼間の三人組のことを思い出し、少し思い出し笑いを浮かべた。一般の大学生とはああいうものだろうか……

「……また、会える？」

ラムがシンジに聞いてみた。彼女自身もあのマナ、ケイタ、ムサシの三人はとても面白かったと思った……

「会えるさ……マナさんに、ケイタ、ムサシの地元だからね」

そう言いながら、シンジは第三東京市の交差点を左折し、目的の場所に大きく近づいた。

「あそこだ……マスターの言った”ミレニウム・アミーゴ”」

彼の背後には、「セカンド・インパクト」以降に建設された都市群が広がっていた……

その中のビルで最も高く、威圧的な雰囲気を持つ荘厳な建物が第三東京市及び、世界経済の一翼を担う桐原コンツェルン本社である……

そして……第三東京市の闇に潜む暗黒結社の身内でも……

桐原コンツェルン 本社

最新鋭のハイテクビルの地下に、魑魅魍魎が徘徊する異世界が存在することを誰が想像しただろうか？

ゴルゴム所属の機甲大隊は、主に強化服を纏った兵士、サイボーグ、戦闘ロボットを主とした軍団である。

彼らが本部としているこの地下空間を”ゴースト・バンク”と名づけられている……

荘厳な大理石で作り上げた玉座に大隊長 クールギンが座していた。彼の傍らには、補佐のドランガーが立つ。

彼らの目の前には、芦の湖でシャドウと激闘を繰り広げた闘士 ゴチャツクの残骸があった。

「ゴチャツクが倒されたか……シャドウ……一筋縄では行かん相手のようだ……」

クールギンは、実力なら機甲大隊でもかなりのモノを持っているゴチャツクが敗れたことに難色の色を示した。

とは、言っても単純な失敗ではないので創世王達からの罰はないので安心だが、機甲大隊の名誉に泥を塗られたことには変りは無かった……

「目障りだ！！！！このモノを早急にスクラップにしてしまえ！！！」

「！！」

ドランガーが声を上げたと同時に鎧を纏った兵士達がゴチャツクの残骸を持ち去ったと同時にクールギンとドランガーも”ゴースト・バンク”を後にした。

ゴチャツクの残骸を持ち去ろうとしている兵士達に声を上げるものが居た。

「待てっ！！！！ゴチャツクを処分しないでくれ！！！！」

声を上げたのはゴチャツクよりも身長が高く体躯の逞しいボディータを持ったロボットであった。

「バルザック…これは、大隊長の命令だ…いくら、お前でも…」

「だが、ゴチャツクがこれまでこの機甲大隊で最も貢献してくれたことには変わらない。だからだ、助けられるのなら俺は助けたい。頼む！！！！この通りだ！！！！」

バルザックは、兵士達の前に土下座をして懇願し始めたのだった。見たところゴチャツクの人格を司るAIは無事である。だからこそ、見殺しにすることは出来なかった。

「バルザック様！！！！？！！」

その様子を見ていた女性的なボディータインを持ったロボットが、バルザックの突然の行動に声を上げた。このロボットの名は、ローティーン。

ローティーンが声を上げるのは無理も無かった。バルザックは、この機構大隊の中では？の地位を持つものであったから……

「私からもお願いする……」

ローティーンの後ろから、もう一体のロボットが声を上げた。彼の名は”ガルドス”……バルザックの補佐を務める戦闘ロボットである。ガルドスに続いて、同じ戦闘ロボットである”ゲバローズ”、”ザーゲン”がやってきた。

「だが、バルザック。大隊長達に背いたら……危ないぞ……いくらお前でも……」

「責任は、俺が取ればいいだけのことだ……！！だから、頼む……！！」

兵士達はバルザックの熱意と彼に呼応する者達に押されたのか、ゴチャックの残骸をスクラップとして処分することをやめるのだった

……

ゴチャックの残骸を抱えて、バルザックは……

「早くラボへ……！！ゴチャックを死なせてなるのもか……！！」

急ぎ足でバルザックは、ラボへと向かうのであった………彼に続くようにローティーンとガルドスが続いた。

彼らを見守るのは、白いボディを持ち、フルフェイスのヘルメットに良く似た顔立ちをしたゲバローズと彼とは対照的な黒いボディ

ーを持ち、髑髏にドレッドヘアを持ったザーゲンの二人が残った……

ザーゲンがバルザック達とは、別の方へと足を向けた。

「どこへ行くんだ？ザーゲン……」

ゲバローズがザーゲンに問いかけた。ザーゲンは……

「ゴチャックを倒した敵をこの目で見ておきたいのです。大丈夫です……死神は正々堂々と相手の死に向き合うものですから……無茶はしません……」

ザーゲンは、別に聞いても居ないことを言っただけでゲバローズの許から去っていった……

「大丈夫だって、一言で良いのにな……」

第三東京市……” ミレニウム・アミーゴ”

古きよき時代を思わせる独特な雰囲気を持った店である……

シンジ達はとりあえず店内に入っていた。あらかじめ連絡していたので、入っても構わないのだが、店主は留守だった……

” ようこそ、 碓シンジ君。 ラミちゃん。 ミレニアム・アミーゴへ……
明日の朝までは帰れないので、 しばらく店を頼む”

というメッセージカードが置かれていた……

「……これは、 どういうこと？」

「つまり、 留守の間、 店をよろしくって言いたいんだろうね」

シンジは、 ここの店主の横着振りに苦笑しながら、 勤務表を確認する
のであった。 ラミは、 少し納得がいかないといった感じだった……

幸いなことにこの時間は休みだった。 営業時間は、 三十分後の七時
である。

とりあえず部屋はすでにあてがわれていたので、 それぞれの部屋に
進み今日の旅の疲れを取ることにした……

都市を包む夜の闇は、 何処までも深く冷たい黒を称えていた……

……

赤木リツコは、 いつものようにリニアの駅から降り、 定期を自動改

札口へ通した。

彼女からワンテンポずれて、男がリニアから降り、すでに背中の小さくなった赤木リツコに視線を向けた。

そして、歩き出した。夕方を過ぎ、夜へと近づこうとしている時刻にあわせるかのように外灯が点灯し町を光に包んでいく……………

彼女が帰宅するコンフォードマンションでは異変が起こっていることにリツコは気が付かなかった……………

コンフォードマンション近辺……………

「でさあ、あの禿最悪なのよ……」

「マジで……きも〜い」

近くを第三東京市立の女子高校生の二人組みが歩いていた。手にはクレープを持ち、それを摘みながらおしゃべりに興じている光景は行儀の良いものではない……………

「それで、禿はどうなったの？」

「それがさ、惣流さんにやられたらしいわよ。何でも不審者と勘違いされて……」

「ええっ、惣流さんって…あの鈴原と同じぐらいの変人の？」

「そうなのよ。後で警察官に怒られたらしいわ…そうよね、自分の先生気絶させたら……」

呆れたようなしぐさで、オチを語る女子高生。

「惣流さんって、あんなに綺麗なのにどうして……変わり者なのかしら？」

「委員長が言うには、”現代を生きる忍者”を目標しているんだって……」

「ええっ、忍者っていつの時代の人間なのよ!!!!?」

「まあ、それでも鈴原よりはマシでしょう。あの格好よりは……」

「た、確かにね……」

そう応えるもう一人の女子高生は、休日になると町で目撃される鈴原の奇抜な鎧姿?を想像するのだった……

呆れつつも談笑する二人の真上には外灯が点灯していた。明りに群がる蛾を始めとした昆虫の中にその”虫”はいた。

蜘蛛に似た鬮體の模様を持った奇怪な昆虫”サタン虫”が………気づかれぬよう、真下を移動する女子高生の首許へ落下した……

「グウウ……」

物陰からそれは、見ていた。”サタン虫”が彼女らに寄生”パラサイト”していく光景を……

「?…誰か居るのかしら?」

リツコはふと立ち止まり、背後を振り返った。そこには、誰もいなかった……

「……気のせいかしら?」

内心、薄気味の悪いものが自分によってきているような感覚を覚えていたが、目の前には何もいない……

数歩歩いてから、再び振りかえる。やはり、誰も居なかった……

「嫌な気分ね…少しお茶でもしてこようかしら……」

リツコは、気分直しに立ち寄れる場所が近くに無いか探す。

彼女の目に止まったのは、”ミレニウム・アミーゴ”が営業を再開しているところであった……

「…あそこがいいわね」

そう言っただけで彼女は、”ミレニウム・アミーゴ”に足を進めた。急ぎ足で進む彼女を遙か遠くで男が店内に入る様子を見ていた……………

カランと心地よい呼び鈴と共にリツコは店内に入ってきた。

「いらっしやませ」

「…………い、いらっしやませ…………」

慣れた様にいうシンジと違い、ラミはどこかぎこちないものであった……………一目見た印象は、ベテランと新しく入ったアルバイトといった感じである……………

リツコは適当な席に座り……………

「コーヒーを一杯もらえるかしら？」

「かしこまりました。ミルクと砂糖は？」

「ブラックで構わないわ」

「はい。かしこまりました」

注文を受け取ったシンジは、コーヒーメーカーに豆を炒れて、手馴れた手つきで珈琲を作っていく。

その間、リツコは店内を軽く見回す。古きよき時代を感じさせるレトロな雰囲気がとても魅力的な内装が印象的であった。

今流行の内装ではないが、根強いファンを作りそうな雰囲気を持っていることには間違いないとリッコは思った。

「どうぞ。ご注文のブラックです」

そう言ってシンジは、リッコの前に珈琲を差し出した。置かれた珈琲のカップに手をかけて、ゆっくりと口元につけた。

「上手いわね。あなた……」

味が気に入ったのか、リッコは淹れてくれたシンジに賛辞の言葉を送った。

「おそれいます……」

シンジも笑みで応えた。ラムは、不思議そうにコーヒーマーカールを見ていた。

「……ただ淹れただけなのに……」

誰でも出来そうなのに、よく分からないものだと思うのであった。これは……

店内には穏やかな雰囲気が流れていった……

穏やかな時間は、早く過ぎ、時計が一回りした頃にリッコは店を後にした。

「ありがとうございます！！！」

頭をたれてシンジは、接客の締めを終えてリッコを見送るのだった。ラミもワントンポ遅れてお辞儀をした。

「そろそろかな……」

シンジは時計をみて、今日の営業時間はそろそろ締め時だと思い呟いたときだった。

リッコの後を追うように、何かが店の前を過ぎていくのを感じただ……

「！！！？！！！」

ラミも同じだったらしく、彼女はまるで嫌なものを見たかのように表情を歪めていた。

ガラス張りの正面を見たときには、その何かはすでに過ぎ去っていたのだった……

「さっそく、来てこれか……」

シンジは、リツコの後を追うべく裏口から出て行く前に……

「戸締りは……しておこう……」

生来の几帳面さがここででたのか、急いで戸締りを終えてラミと共に裏口からリツコが出て行った方角へと足を向けていくのだった。

リツコは、不意に気配が背後から感じられないことに疑問を持った……

「やっぱり、気のせいだったのかしら？」

立ち止まり振り返ってみたが、誰も居ない。だから気のせいだと思うが、胸のうちには妙な何かかもやもやとしている。

「……本部長に報告すべきかしら？」

得体の知れない不安には気をつけると上司にはいわれた……

やはり何かあるのかもしないと彼女は思った。ここで、考えても仕方が無いので彼女はコンフォードマンションへと急ぎ足で進む。

彼女 赤木リツコは気づかなかつた。遙か背後に立つ男から陽炎のように立ち上る黒い異形の影に……………

マンションの入り口に戻つたリツコは、入り口の前に二人の女子高生が立っているのを見た。

「…こんな時間に何をしているのかしら？」

時計を見ると、女子高生とはいえ門限はとっくに過ぎているだろうとリツコは思った。俯いて直立不動の二人に対して、何か思うところがあつたのかリツコは思い切つて声を掛けてみることにした。

「リコ…リコ…リコ…」

「…リコ…リコ…リコ…」

二人の女子高生は、独り言のように奇妙な言葉を呟く。リツコの耳

には聞こえなかったが、彼女は、その独り言以外の異常を目にするのだった。

「あなたたち、こんなところ……!!?!?!」

話かけたリッコに反応するように彼女達は面を上げた。リッコの目に映ったのは、眼球がまるでカタツムリのように飛び出した異様な表情をした少女達の姿であった。

「によ……によ……によ……」

「……によ……によ……によ……によ……」

リッコに手を伸ばし、彼女達は迫ってきた。

「あなたたち……!!?!?!?!?!」

気配を感じ、彼女は二人とは別の方にも手を伸ばしてやってくる数人の人影を見た。危険を察したのか、彼女は急いでマンションの中へと逃げ込む。

幸いにもマンションは、自動ロックなので集団が入ってくることは無い。窓に近づき、彼女を求めるようにガラスを叩き始めるのを背に自室へと一旦引き上げることにしたのだった。彼らに共通する特徴は、飛び出した眼球、耳たぶに浮かんだ奇妙なマークである。

余談だが、1975年にも同様のケースがあったという……遊園地、小学校と……

まるでゾンビの如く、集団が入り口を求めてマンションの近辺を徘徊

徊する。耳の中を蜘蛛に似た昆虫の脚が僅かにその姿を覗かせた……

急いで部屋に戻ったリツコは、デスクに隠してあった通信機と拳銃を取り出した。

「何かが、起こっているわね。まさか……気づかれたのかしら？」

リツコは、自身が行っている捜査に気づかれたのではないかと思った。狙われる理由は、それ以外にしか見当たらないのだ。

「まずいわね……もうゲヒルンには長居は無用かしら……」

自嘲気味に呟いた後、ペットの籠を引っつかんだときだった。

「みやあああああ……！！！！」

中で寝ていた猫が毛を逆立てて叫んだ。起こしたことを怒ったかと思っただけ、違うようだ。

猫の視線に彼女は合わせて、ベランダを見た……

「グウウ……」

そこには、人ではない異形の影があった……

「!!!?!!!」

拳銃を構えて、狙いを定めたとき、その影は消えた。

「…消えた……」

”カチャリ”

「!!!?!!!」

目の前で錠前がはずされたのだ。外に居る何者かによって……

「見たぞ…お前は、鼠だったのだ!!!」

背後から声が上がる。振り返ったときリッコは、自分が恐ろしい何かによって殴られたのを感じながら床に伏した。

「グウツ!!!?!!!」

痛みを感じつつも彼女は、自身を見下ろす影がそこにいるのを見た。顔を上げてそこにいたのは……

「これが、そうなのだろう。ICPOの鼠め……」

それは持ち上げた通信機を握力だけで破壊した。そして、リッコに瞳の無い白い目を向けていった。

そこにいたのは、茶色い身体をした四つの牙を上下させる怪人であった……………

「……?!?!やはり、何かが近くに居る」

リッコの後を追って、コンフォードマンションに来たシンジらは、直ぐにここで異常が起こっているのを感じたのだった。

急いでマンションへ進もうとしたときに、彼の行く手を阻むようにあの集団が現れた。

「によ…によ…によによによ……………」

「によ…………によによ…………によによによ……………」

あまりに異様な集団にラミは、何だお前達はと表情をゆがめた。

「この人達は……………」

「によ…によ…」

シンジが何か言つのを邪魔するかのように、集団がワツと押し寄せてきたのだ。

これらを軽くないなしシンジは、ラミをつれて突っ切るようにしてマンションへと脚を進めた。

「あの人達は？」

「わからない。たぶん、何かに操られていると思う。それが、何かまでは分からないけど…」

ラミの疑問に応えながらシンジは、コンフォードマンションまでやってきたのだ。その直後に銃声が響いた。

「?!?!?!?!?!」

銃声のしたのは、彼らが居る真上から…そこに視線を向けると風によって靡くカーテンが見えた…

「ラミ。僕に捕まってくれる」

シンジに応えるようにしてラミは彼に捕まった。

「トオツ!!!!!!変身…」

体内のキングストーンに呼びかけ、シンジはシャドウの姿へ変えながら、リッコの部屋のベランダまで高く飛翔した。

リッコは目の前にいる茶色の怪物ボナに向かって発砲するが、まるで効果が無い。分厚い皮膚によって銃弾が弾かれているのだ。

「!!!!!!?!?! 効果がまるでないわ…どうしたものかしら…」

ヤバイ状況なのに、冷静な自分に驚いているが、そんな場合ではないので、手を緩めるわけには行かなかった。

後退するものの、ボナは足並みを早めてリッコに近づき、彼女をもう一度殴った。

「!!!!?!?! あっ…」

その際に頭を打ってしまい、気絶したのだった。

「終わりだ!!!! 鼠は!!!! 死ぬのだ!!!!」

ボナは止めを刺すべく鋭い爪をリッコに向けたときだった。背後のベランダからカシャンという金属音が木霊した……

「!!!!?!?!」

振り返ったボナが見たのは、ベランダに立つ銀色の蝗に似た仮面をつけた男 仮面ライダーシャドウであった。

リッコに爪を掛けさせるのを阻止するようにシャドウは走りこみ、ボナを彼女の反対側に突き飛ばした。

ボナは邪魔をしたシャドウに腹を立てたのか、鋭い爪で攻撃を繰り返す。

「トオツ!!!!」

緑色の閃光を発した拳がボナの腹部を貫き、その衝撃によりボナは屋上から足場を踏み外し、地上へとまっさかさまに落ちていくのだった…

ボナの様子を確かめるべく見下ろしたシャドウが見たのはは、真下の血溜まりから弱弱しく立ち上がって逃げていくボナの姿があった。

「待て！…！」

ボナが向かっていった方角は分かっている。急いで後を追うシャドウ。地上では、路地裏に逃げ込んだボナを瞬き一つしない男がそれを見ていた…

「…処刑…任務失敗は処刑…」

その言葉に合わせるように半透明の紫の物体が男の体から抜け出し、ボナを追うように進むのだった…

その頃ラミは、気絶したりツコを介抱していたのだが…

「…」

あの集団の声が直ぐ傍まで聞こえてきたのだ。

「しっかりしてください」

ベランダからシャドウがラミの許へ駆け寄ってきた。

「大丈夫？」

「ええ、これから、どうしたらいいのかしら？」

「とりあえず、アイツはまだ、生きている。そいつを追おう。こゝは危険だ……」

リッコを抱え込んだとき、ラミの首許に”サタン虫”が忍び寄ろうとしていたが、

「危ない！！ラミ！！！！」

近くに転がっていたスクラップをけり、”サタン虫”に当てて勢いで潰した。

それにより、”サタン虫”は沈黙した……

「まさか……こいつのせいだ……」

途端に入り口の戸が壊され、パラサイトされた人間達が一斉に取り囲むようにしてシャドウたちに攻まってくる。

「！！！？！！」

ラミはパラサイトされた人間達に嫌悪感を感じたのか、感情が高まり、彼らに対する拒絶の意思を強めようとした。

「待ってくれ。この人達は、あの虫に操られているだけだ…」

「でも、危険には変わりないわ…」

攻撃を控えるように言うシャドウに対してラミは抗議の声を上げた。だがシャドウは…

「大丈夫。正気に戻す手はちゃんとある…キング・ストーン フラッシュユ…!!!」

ベルトに力を混め、シャドウは眩い光をベルトから発した。

「によ…によによ…!!!?!!」

それにより、人間に寄生されていた”サタン虫”達はキング・ストーンでその生命力を奪われてしまった…

人々は糸が切れたかのように倒れてしまった。

「…あなたって、ほんとうになんでも出来るのね…」

ラミは、仮面ライダーの凄まじい力に驚きの声を上げるのだった。いつの間にかシャドウは、シンジの姿に戻っていた…

「んん…なにが?!?!」

リツコも目覚めたようだった。意識を直ぐに覚醒させて、ボナを探

したがどこにも見当たらなかった。

「アイツはまだ生きている」

唐突なシンジの言葉にリツコは、彼に顔を向けたと同時に彼はラミと共にボナを追うべく動き出した。

「ま、待ちなさい!!! 私も!!!」

二人の後に続くようにリツコも動き出すのであった……

重症を負い、逃げていく茶色い怪人を追っていく三人は、開発中のビル現場にたどり着いた。

「…何か居る?二人とも、気をつけて……」

シンジの視線に応じて二人は距離を持って、茶色い怪人が逃げたと思われる付近へと足を進める。

そして…そこで見たものは…

「任務失敗者は…処刑……」

先ほどの茶色い怪人が別の黒い怪人によって殺されている光景だった…

喉許を引きちぎられて、倒れた茶色い怪人の身体にはピンク色のスライムが付着し、それを溶かしていた。

黒い怪人ゴアは、シンジらに視線を向けて…

「グウウ…オオオオオ…!!!」

俊敏な跳躍力でゴアはシンジの正面に立ち、彼の胸元目掛けて鋭い爪を向けてきた。

「てやあああああ…!!!」

敵の太い腕を回避し、シンジは顔面に目掛けて跳び膝蹴りを食らわせる。だが、ゴアの首は頑強であった。改造人間であるシンジの跳び膝蹴りを受けても微動だにすることは無かった。

膝小僧に嫌な痛みを感じつつ、シンジはゴアから後退する。

「ウ”ワアアアアア…!!!…!!!…!!!」

ゴアは、右腕を大きく振って、ピンク色のスライムをシンジに向けたのだった。

「?!?!?!?!?!」

回避したシンジの背後にあった鉄筋がスライムにより不気味な泡を

挑戦的にゴアに腕を向けた……

変身したシンジにリツコは目を見開き……

「仮面ライダー……まさか……私は夢を見ているのかしら……」

そう、かつて自分が出会った仮面の戦士に酷似している銀色の戦士を驚愕の目で彼女は見た……

「変っても同じことだ……！！！！」

シャドウの挑戦的な態度にゴアは、声を上げて飛翔する。

「トオツ！！！！」

ゴアに呼応するようにシャドウも両足のレッグトリガーを起動させて、飛び出した。

レッグトリガーにより飛翔したシャドウの高さは、ゴアのそれよりも遙かに高いものであった……

「トオオオツ！！！！！！シャドウ・パンチ！！！！！！」

右の拳に力をこめて、シャドウはゴアの顔面に目掛けて拳を当てた。凄まじい拳の威力によりゴアの上顎の牙が折られ、後方に大きく仰け反るように地面にその巨体が凄まじい音を立てて落下した。

二人の背後の夜の闇に浮かぶ月だけが特等席でその激戦を見ることが許されていた……

そんな二人の戦いをビルの屋上から見る影があった。遅しい体躯をした黒いスーツを着たダンディズムを現す白いタイを巻いた男が……

「ゴアめ…随分と手こずっているようだな……まあ、これも作戦だかな……」

男の名は、ゴルゴム機械化大隊の長 デッド・ライオン。小型の通信機から発せられる電波がとある場所に通じる。

「デッド・ライオンだ。ANGEL?10の配置はどうなっている？」

「はっ…予定通り。上空に待機させております……ですが、ゴアを犠牲にするのは…」

「何を言っている？これも創世王様の命令だ…奴を倒せるのならば、どんな犠牲も惜しくは無いはずだ…分かっているな……」

デッド・ライオンは、かつての組織に居た同僚の姿に自分を重ねた。

「それがどうした！！貴様は、最初から捨て駒の役目だ！！！！」

「ブラック・サタン大首領の命令であれば、部下の命など惜しくは無いぞ！！！！」

組織のためならたとえ、仲間であろうとも犠牲を強いた”魔王”と呼ばれた男。それぐらい出なければやれないだろう…彼に付いていけないと思う甘さがあったから、自分はとんでもない失態を犯してしまったのだ……

「分かっているな……どんなことがあっても奴を倒せ!!!これは、命令だ!!!!!!!」

凄みのある威圧的な声で語るデッド・ライオンに驚きの声を上げながら、彼の部下は通信を切り準備に取り掛かったのだった……

シャドウとゴアが戦っている遙か上空には、奇抜な姿をしたオレンジ色の怪生物が浮いていた……

中央にある巨大な眼球上の組織の焦点を真下の第三東京市へと向け
る……

デッド・ライオンは……

「これでいい。どんな犠牲をだそうとも、結果さえ出せばな……」

シニカルな笑みを浮かべて、言うのだった。

「そうなのだ……結果さえ出せばそれでいいのだ……」

デッド・ライオンの許へ裏地の赤い黒いマントを靡かせた白いスーツを着た40代半ばの女性が現れた。白髪交じりで何処か気難しい
そんな表情をした女性である……

「…アंकウ。見物に着たのか？」

「そういうことで構わん。私とて、仮面ライダーの行動には興味があるものでな……」

女性の名はアंकウ。機械化大隊 専属の医師である。

「なるほど、創世王様の言う異端の王には、興味があるようだな？ さすがは……」死神博士”の娘だけはあるな……」

「……否定はしない。父の血を引こうとも、これには誰もが興味を持つ……違うか？ その死神……」

アंकウが背後を見ると、そこには機甲大隊 暗殺者 ザーゲンの姿があった。

「その通りです。我らの仲間、ゴチャックを倒した存在。いずれ、私も戦わなければならない。故に少しでも情報がほしいのです……」

「そこまでは、聞いていない」

余計なことを言うザーゲンに苛立った声でアंकウは、遮った。

「言い争うな……いよいよ、作戦開始だ……」

デッド・ライオンの言葉に呼応するように、上空に待機していたANGEL?10”サハクウィエル”の体がちぎれ、真下で戦っているシャドウとゴアの許に赤い幕に包まれたモノを落下させたのだ。

「あれは…サハクウイエル!!!!!!!!!!」

ラムは上空から感じられる気配に覚えがあつた。間違いなく、自分と同じ存在だつた…リツコは不思議そうにラムを見た。その表情は、疑問を抱いていたが、今はそんな状況ではないと思ひ直した。

ラムは直ぐに視線を地上で戦っているシャドウに戻す。シャドウは、真上からの奇襲に対して苦戦を強いられている。これを何とかして助けたいと思つた。

だが、”力”を抜き取られた自分に出来ることは何も無い。”壁”にしる、常時扱えるわけではないのだから……

そんな彼女の思いに応えるかのようにシャドウは、よろめきながらも立ち上がり……

「”蝗龍”!!!!!!!!!!」

この危機を乗り越えるキーパーソンである。相棒の名を叫んだ。

シャドウの呼びかけに応えるように、蝗龍の複眼が光り、シャドウの下へと爆走する。

真上から襲ってくる攻撃と正面から来るゴアに挟まれるシャドウ…

「ムン!!!!!!」

構えを取り、シャドウは緑色の複眼に闘志を燃やしてこれらに臨む。

そこへ、闇夜から荒々しいクラツシャーを鳴らしながら、バトルホッパー”蝗龍”が両者の間に割り込むように過ぎ去った。

「グウウ……」

蝗龍の過ぎ去った後に吹き荒れた衝撃によりゴアがよろめいた。

「今だ!!!トオツ!!!!!!」

両面の敵のうち一体が隙を見せた今が絶好の好機である。その間にシャドウは、蝗龍に跨り、アクセルを強く回して真上からの攻撃を巧みに回避して、ゴアに向かっていった。

「まずは、お前からだ!!!!!!行くぞ!!!!!!」

よろめいたゴアを正面にして、シャドウはバトルホッパーを加速して、前輪を高く掲げて、スピードを一気に上げていく。

「ホッパー・ブレイク!!!!!!」

前輪を思いつきり、ゴアの頭部にぶつけて、そのまま速度を上げて壁をぶち破りながら、ゴアを壁の向こう側へと吹き飛ばした。

「!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!?!!!!!!!」

意識が暗転し、首の骨が嫌な音を立てて碎け散る感触を覚えながらゴアは倒れた……

だが、ゴアが倒れたことにより真上からの攻撃がいきなり止まった……急に静けさが、あたりを包み込んだ……

リッコは知らないが、シャドウには秘策があったのだ。自身が持つ最大の技なら、アレを迎撃することができる……

ラムは、ライダーには不可能が無いことを悟っているのか表情は落ち着いたものであった。

「トオツ……！」

近くの高台に乗り、真上から落下する敵に対して、さらなる闘志をこめる。

「アレをやるぞ……！！！！蝗龍……！！！！！」

シャドウの呼びかけに蝗龍は走り出し、空高く飛翔した。

「行くぞ……！！！！トオツ……！！！！！」

高台よりも高く飛翔する蝗龍の背中をけり、空高くシャドウは飛翔し、身体を勢い良く反転させながら、落下する物体に向かっていく。

そして……

「電光シャドウ・キック……！！！！！」

シャドウの叫びに呼応するように、淡いスパークを纏った緑色の光が脚を包み込み、落下する物体の幕を突き破り、巨大な眼球上の組織の中心を破壊した。

そして、第三東京市の夜空を一気に明るくする大爆発を起こしたのだ……

電光シャドウ・キック。碇シンジごと、仮面ライダーシャドウが編み出した最強のライダーキック。強い怪人によって、敗北したときにその必勝法として編み出された技である……

急に明るくなった夜空を何事かと人々は空を見上げた。黒いジャージをきた学生、雀斑が目立つ女学生、その隣に立つハーフのような少女は驚いたように空を見る……

その中に、赤いマフラーを靡かせた白いオートバイを駆る影が存在していた……

シャドウに良く似た複眼を持った仮面のような顔を持ち、複眼には落下する物体に向かっていくシャドウの姿が焼きついていたのだ……

「……アレが、第二東京市で噂になっている仮面ライダー・シャドウか……噂どおりの強いライダーのようだ……」

笑みを漏らし、その影はゆっくりとその場を離れていった……

「……楽しみだよ。会うのが……碇シンジ君……」

カシャンとラッグトリガーの音を立てながら地上へ降り立ったシャドウはラミとリッコの許へと足を進めた……

「大丈夫ですか？ラミ、リッコさん」

そう呟くと共にシャドウはシンジの姿へと戻っていく……優しそうな笑みを浮かべる中性的な貌に安心したのか二人も笑みを浮かべた……

その一方で、倒されたゴアにダーツが打ち込まれた。ダーツの毒により、ゴアの身体は青白い泡と共に消え去った……

三人は騒がしくなる前にこの場を退散するのだった……そして、夜は喧騒を終えていつものように振舞い始める……

”ミレニアム・アミーゴ”

シンジとラミは早朝から、準備に追われていた。朝の七時からこの喫茶店で行われているモーニングサービスを行わなければならないのだから……

仕込みをやってたりしているそこへ、裏口の戸が開き誰かが入ってきた。

「やあ、ディアボロのマスターが言っていたのは君たちだね。碇シンジ君、ラミちゃん……」

そこにいたのは、まさに熱血漢の言葉が良く似合う渋みのある50代前半の男であった。

「私の名は、本郷猛。よろしく……」

「こちらこそ、よろしくお願ひします」

二人は握手をしたのだった。青年は、大いなる風と出会う……
本郷猛は、シンジの手から感じられる力を感じた。

「君は、良い力をもっているようだね……」

本郷の意味深は言葉に眉をシンジは寄せたが、本郷はそんなシンジに構い無く……

「早速で悪かったね。それじゃあ、みんなでやろうか」

本郷猛の宣言どおり、早朝の喧騒がキッチン内に響き渡るのだった

……

第三話「空を翔る閃光」(後書き)

予告どおり掲載。次回は、IS×GARROを更新できるようにしたいと思います。

シャドウの方は、週一とせずに随時、上げようかと悩んでおります。はい……

それでは、次回に、では!!!!!!

第四話「…都市伝説…」（前書き）

仮面ライダーシャドウ 第四話更新です。どうぞ…!!

第四話「…都市伝説…」

「なるほど、あなたたちの話だとゲヒルンは、ゴルゴムに直接関係があるというのね……」

「はい、そうです。リッコさん、ラミとアイツの言葉は真実です。これだけは、まちがいありません」

シンジの言葉にラミは頷いた。先ほどの喧騒から、シンジらとリッコはお互いの情報を交換し合っていた。シンジがリッコの前でシャドウに変身した事が幸いしたし、リッコ自身も彼らのことを知りたかと思っていたので、話はスムーズに進むのだった……

「さっきの怪物は明らかに僕を狙っていましたし、あの虫は……」

「ええ、私の尻尾を出させるための罠ね。やられたわ……」

異常があれば即時、報告というものが仇となった。あのマンションから引き払わなければならない……

「知り合いがいるから、しばらくはそっちに身を寄せるわ……これ、私のアドレス……」

リッコは、この町に居る知り合いの許に身を寄せる旨を伝えて、シンジにアドレスを書いたメモを渡したのだった。

「感謝するわ。私のことも…この子のこともね…」

シンジがあの後持ってきてくれたペット用の籠を見てリッコは微笑んだ。

「それでは、夜も遅いですし…一人で大丈夫ですか？」

「大丈夫よ。暴漢には、結構強いほうなのよ、私は…」

リッコは、微笑みながらシンジらと別れた。彼女の手元には、家族である猫と一枚の名刺が……

” OREジャーナル 伊吹 マヤ ”

…都市伝説…

それは、何処からとも無くささやかれる噂話……” トイレの花子さん ”、” 人面犬 ”、” 口裂け女 ” と様々なものが子供達を中心に伝わった……

その中には、このようなものがある。

” 何処からとも無くバイクに乗った骸骨の仮面をかぶった男が現れ、異形の怪物たちから人々を救う ” というものが……

主に1971年から75年にかけて日本全国を駆け巡った。噂はとも曖昧なので、確証にいたるものは無かった……

75年に一人の記者とある男との出会いを記した日記が2015年のある新聞社に残されている……

”1975年 12月31日……

師走の喧騒をひと段落終えた私は、黄色いジープに乗ったその男と出会った。

白髪交じりの三十代後半のその男は人懐っこい笑みに安心した私達は意気投合し近くの蕎麦屋で席を共にした。彼との話は、とても面白く、会話が弾んだ。

彼は、かつてはオートバイクラブの会長をやっており世界グランプリを目指していたという。凄い夢だと思った。彼の表情はまるで少年のように輝いていたのだから、私自身も楽しく聞けた。

どの辺りから、流れが変わったのか分からないが我々の会話はこの半年に起きた奇妙な事件に話題が上った。

”富士ダムの倒壊”、”旅客機連続墜落事件”、”地震多発”、”四日市コンビナート爆破”、”奇巖山の消失”……

どれもこれも被害は大きいのだが、何故だか、その原因がまるで分からないのである。目撃者の証言も奇妙なのが多い……………

それは、化け物を見たというのが大半である。そして、バイクに乗った仮面の男達……………

奇怪な騎士、角を生やした赤い仮面の怪人、巨大な岩石の巨人という具合に化け物たちの姿も統一性が無く、仮面の男達も鬼のように角が映えたもの、赤い仮面、青い仮面、緑の仮面、銀の仮面と……………

本当に奇妙な事件と目撃証言である。

なぜ化け物にそのバイク乗り達は関わるのだろうか？去年、一昨年と同じような事件を聞いた。そのときにも怪物と仮面のバイク乗りは目撃されている。

そのとき、私は怪物とバイクのりは事件に便乗して世間を騒がせようとする愉快犯だと彼に言った。冗談でいったつもりなのだが、彼は真顔で私に訂正を求めた。

”そんなものじゃない。そのバイク乗り達は、人間の、人類の自由と平和のために悪の秘密組織と戦い続けているのだ”

彼は、気分を悪くしたのか、テンガロンハットをかぶりなおし、そのまま席を立つてしまった……………

その後、一言お詫びを入れたとき、やはり人を安心させる笑みで応じてくれたのは、私も安堵したものであった……………

それ以来、私は、彼、立花 藤兵衛と会うことは無かった……………”

第三東京市 OREジャーナル オフィス

「人類の自由と平和のために戦うか……」

社長兼編集長の大久保は、若い頃に務めていた新聞社の先輩からもらった日記の一文を口ずさんだ。

「仮面ライダーっていつのか？そのバイク乗りは……」

大久保は、もう一つの日記にも目を通した。年代は1988年となっている。

この頃にも、奇妙な事件が起きている。宇宙飛行士が何者かに襲われたり、著名人が変死を遂げたり、行方不明になったり……

行方不明になった名簿には”大門 明”の名が……

当然のことながら、仮面のバイク乗りの目撃も……

「今夜のアレも、これと同じぐらい説明がつかん事件には違いないな……」

大久保は深く刻まれた皺を寄せるようにして唸った。まるで説明が

付かないし、証明することは出来ない…

自分がこの新聞社を立ち上げてから、間もなくして起こった”謎の失踪事件”の時のように、人間の人智を超えた何かが起きているのだろうか？

アレは、”セカンド・インパクト”の混迷が落ち着いてきた矢先のことだった…

「そういえば、アイツもライダーだったんだよな。あの馬鹿野郎は、もう居なくなっただけ…」

大久保は、あの”失踪事件”が終わる数日前に亡くなったとある青年を思い出した。

何処と無く窓を見るとすでに夜が明けようとしていた…

喫茶 ”ミレニウム・アミーゴ”

「いやあ、すまないね。君たちに押し付けたみたいで…」

「いいえ…こちらは、押しかけた上ですから…本郷さんは、気にしないでいいですよ」

朝のモーニング・タイムを終え、喫茶”ミレニウム・アミーゴ”の

店員達は、席について少し遅い朝食を取っていた。中心になっているのは、店長である本郷猛。続いて、碇シンジといった具合である。「でもなあ、お礼はしないといけないな。よし！！私が珈琲を君に入れてあげよう」

「それなら、僕が……」

「ハハハハハ！！！！気にするな、これぐらいはさせてくれ」

何処と無く気を使うシンジに構うことなく本郷猛は、コーヒーマーカ―に近寄るなり、豆を炒り始めるのだった……

(……適わないな……この人には……)

二時間ぐらい前に会ったばかりなのに、なぜかこの人にだけには絶対に勝てないとシンジは思った。

本郷猛の発するある種のオーラが、そうさせているようにすら感じられるのだから……

それよりも本郷の性格……彼の天然な性格の前には、生真面目な性格のシンジでは太刀打ちできないというのも理由の一つである……

「ハハハハハハハハ。いい若者が遠慮なんかするな。もっと我を通しても構わないさ」

「……そういうものですか……」

そんな本郷とシンジのやり取りをラミは……

「……不思議な人達……」

と、珈琲を”ふう、ふう”しながら、様子を眺めているのだった……

第三東京市立 第三高等学校…2 - A教室……

「昨夜のアレは絶対に、宇宙人の仕業よ！！！！！！」

声高々に叫んだのは、赤みが掛かった金髪の顔立ちの整った少女であった。彼女の名は、惣流 アスカ ラングレー。

「ちょっと…アスカ…声が大きいわよ…」

大きな声を出すアスカに対して、小声になりながら注意している少女は洞木ヒカリ…チラチラと奇異の目を向けてくる同級生を気にしつつもアスカを宥めようとするのだが……

「昨日のアレは、どうみても宇宙船がやってきたんだとしか思えないわ……」

ヒカリの言葉など聴かずにアスカは、腕を組みながら教室を往復して物々と独り言を言い出した。どうやら、完全に自分だけの世界に入ってしまったようである……

「フフフフフ、とうとうこの時がきたのね。…師範の頃にもあったそうだけど…アレを狙う何かが蠢いているのよ!!!!!!」

クワツと青い目を見開きアスカは、確信するのだった。この町に何か蠢いているのを……

「そうはさせないわよ…戸陰流忍術の達人であるこのアタシが居たことがあんたたちの不幸よ!!!」

いきなり教室の窓に近づき、挑発的に指を空に向かって指したのだった。はつきり言って、奇行そのものである……

「あ、アスカ…皆が見てるわよ…ね、ねえ…」

ヒカリがアスカを宥めようとしたとき、それは聞こえてきた。まるでヒカリの願いを踏みにじるかのように……

「が〜んがらが〜。が〜んがらが〜」

正直言ってセンスの感じられないフレーズである。歌っているのは、校庭の中心を歩く奇妙な鎧?を着た鳥類に似た妙な兜をかぶった男であった。

背中に刺している”世界一 がんがんじい二世”と描かれているモノが自分を主張している……

彼の名は、がんがんじい二世こと、鈴原トウジ……

「がんがらが〜、がらが〜」

一目を気にせず突き進む彼は、ある意味、漢である……

”おい、なんで学校にまであんなの着て来るんだよ？”

”もしかして、昨日の光で頭やられたんじゃない……”

”惣流さんも、窓で叫んでいるみたいだぜ”

”うわあ〜。変人達が騒ぎ出したよ……”

「何が、変人や!!!おまんら、アホちゃうか!!!!!!?!?!?!」

ひそひそと言っていたのに、それに反論するようにトウジは叫んだ。奇妙な鎧?を着た彼に言われても妙に説得力が無いのは気のせいだろうか?

「アレは、絶対にこの町で何かがおこつとるんや。それを、なんでもないように思つたら、大間違いやで!!!!」

そして、鈴原トウジ一世一代の言葉が……

「アレは絶対に、ワイらを皆殺しにするために”組織”が何かしてきたんや!!!!!!」

「そ…組織?何でそんなことするんだよ……」

一人の生徒がトウジに半信半疑で質問をした。

「わからんかい!!!!?!人間の自由を奪うためや!!!!!!おじんが言

うよったわ！！！」

人間の自由を奪うため？まるで世界征服をたくらむ悪の組織に仕業のようにトウジは言う。

「じゃあ、なんだよ。そんなのが、お前のお爺ちゃんの頃に居たら、どうして今、なんとも無いんだよ」

「わからんやつちな。それと戦った正義の味方 仮面ライダーがやっつけたんや。わいのおじいも活躍したんやで！！！！！」

トウジのパワーに圧倒されたのか、周りの生徒達はただ呆然とするしかなかった。

そんな校庭の喧騒を三階の窓からアスカとヒカリは

「鎧馬鹿のくせに、生意気なことを…あれは、宇宙人の仕業よ…」

トウジの言う組織説より、絶対に自分の説の方が正しいとアスカは言った……

「……アスカ（涙）……」

今日もヒカリは、奇妙な友人二人のフォローに回らなければならぬことを思うと何だか泣けてくるのだった……

昨夜の喧騒の中心地と思われる場所には、数台のパトカーが止まり鑑識たちがせわしなく現場を検証していた。

「見落としが無いようにしろよ！！！！」

現場の責任者らしき男が激を飛ばしている一方で立ち入れないように配備された警官達の隙間から童顔の女性記者が

「すみません！！警察は、この事件をどうみているんですか！！！！？」

大きな声を上げて言うが、周りはほとんど無視を決め込んでいる。

「話ぐらいいいじゃないですか…融通がきかないんですね。警察の人って……」

女性記者 伊吹マヤは口を尖らせて警察が何も言わないのなら周囲に聞き込みをするために行動を開始した。

所属は、OREジャーナル。新人記者である…

ぶうぶうたれるマヤを近くで見っていた婦警の一人が……

「アンタね。こっちは捜査をしているのよ、アンタたちみたいに誰かのケツを追いかけているのとは違うんだから」

マヤの様子が気に入らないのか、その婦警 葛城ミサトは言った。

「それは、こっちだって同じですよ。知りたい人が居るから、こうして取材をしているんです！！！！」

マヤはミサトに強く言葉を返した。ミサトは、彼女の態度を生意気
と思ったが、出て行くのならそれで構わないのか自分の持ち場へ戻
るのだった。

建設中のビルで捜査をする警察たちを物陰から見ている白いローブ
の女性が居た。三神官の一人ビシユムである……

「機甲大隊に続いて、機械化大隊もですか……よくもここまでやつ
てくれましたね、仮面ライダー……」

醜悪な側面の貌を歪ませてビシユムは、怨嗟の言葉をつむぐ……

「このままで済むとは、思わないことですね……」

彼女の背後には、目玉をギョロつかせるカメレオンを大きくしたか
のような怪物が居た……

ゴルゴム神殿……円卓の間

「……ビシユムが動き出したか」

ダロムはこの場に居ない同僚のことを口ずさんだ。

「ビシユムが？どうするつもりなのだ……」

「…おそらくは、仮面ライダーを始末するためであろうな…」

疑問の声を上げたバラオムにダロムはそう応えた。

「機甲大隊と機械化大隊も奴にやられてしまったからな…所詮は、敗残兵でしかないか」

ダロムは二つの軍団を嘲笑うように言った。あの大神官長の組織改革の際に編成された者達だが、もともとの居た組織の違いからダロムは内心疎んでいたのである。

そう純粋なゴルゴムの民だけいればいいのだから……

「なるほど…そういうば、奴が見えないが？」

バラオムは、最近あまり見なくなった剣神オレビスのことを思い出した。

「……あの男のやることは、きまっているだろ」

「まさかっ！！仮面ライダーに決闘を挑みに行ったのか！！?!」

驚きの声を上げるバラオムにダロムは、力こそはあるが知恵が少しばかり足りないことに内心溜息をついた。

「…まあ奴は、それだけだからな。ビルゲニアと違って碌なことをしないから、楽でよい」

ダロムは、それでもオレビスが扱いつらいことには変わりないと思

っているが、ビルゲニアと違い大きな欲に身を任せるほど愚かではないことに安堵していた……

” ミレニウム・アミーゴ ”

シンジは、夕刻に近い時刻店の前を掃除していた時のことだった。

” 碇シンジ…… ”

聞きなれた声が自分の耳に木霊した。この声と気配は……奴だ……

” これより一時間後の第三東京市の展望台の近くにて、決闘を貴様に申し込む ”

「いつもの通りだな。分かった…その決闘を受ける」

” では、先にそこで待っている ”

シンジが決闘を承諾したのを確認するや、声と気配はそのばかり消え去った。

「……行くか」

そう言ってシンジは、店内に入り従業員用の征服を脱いでそのまま裏口へといってしまった。

「シンジ…どこへ行く？」

出て行く彼の後姿を見たラムが声をかけるものの、扉の閉まる音にかき消され、シンジは出て行った。

そんな彼を追おうとするラムを本郷が呼び止めた。

「あの時分は、少々向こう見ずなものなのさ…時期に帰ってくるだろう。心配は要らないさ…」

不安な表情を浮かべるラムをなだめるようにして本郷は言った。

” そう言われてもと” 抗議したかったが、年長者の本郷の雰囲気から何も言えず、本郷の言うとおりになりそうな流れが強かったので、強く言わずに彼女は仕事であるテーブル吹きを始めたのだった

「ハハハハハハ。心配は無いさ、彼はとても良い”力”がある。だから、大丈夫さ」

腑に落ちないラムに対して、笑って和ませる本郷猛であった……

(…事情を察するよシンジ君。君に挑戦してきたのなら、一介の戦士であるのなら挑戦を受け止めるのは、当然のことだからね……)

第三東京市を一望できる高台に剣神オレビスは居た……

「この町での我らが戦い……」

やがて、彼の知る気配が近くなってくるのを察したオレビスは、盾と剣を構える。

「……よくぞ来た、碇シンジ……いや、仮面ライダーシャドウ」

オレビスが向けた視線の先には、バトルホッパー” 蝗龍” に跨ったシャドウの姿があった。

「オレビス…約束どおりきたぞ」

シャドウの方もマシンから降りながらオレビスに言葉を返した。

「この決闘を承諾してくれたことを感謝する。さっそくだが、はじめろ……」

オレビスは、剣の先をシャドウに向けて戦闘態勢に入る。シャドウも、同じく構えを取った。

「であああああ……!!……!!」

オレビスは雄たけびを上げながらシャドウに切りかかる。シャドウは、これを回避し、カウンターの蹴りを加えるのだが、オレビスはそれを盾で防ぐ。

「フン！！！！！」

盾に当たったシャドウの足を力任せに退け、オレビスは第二の斬撃を振るう。だが、シャドウも負けては居ない。

「アーム・トリガー！！！！！」

シャドウの肘から荒々しい突起物”アーム・トリガー”が放たれ、オレビスの剣を弾く。金属音が響き、互いが距離を置き平行して進むように対峙し、再び激突する。

「でやあああああ！！！！！！！」

「トオツ！！！！！！！」

オレビスは剣を付きたて、シャドウはレッグトリガーを鳴らしながら、拳を繰り出す。

剣はシャドウの右肩を火花を散らしながら切り裂き、拳はオレビスの胸元を直撃したのだった……

「くっ！！？！」

「ぬうおっ！！！！！！！」

シャドウとオレビスは互いの位置を逆転させて互いに対峙する……

……

「……さすがだな。俺にこれほどの一撃をあてるとは……」

オレビスは、シャドウによって胸に打ち込まれた重い一撃の痛みを感じながら賞賛の言葉を送った……

「おまえこそ……」

シャドウも同じだった。右肩のダメージは、恐ろしく響いていた……強化されたりプラス・フォームを貫く彼の剣と技はそれほどまでに強いのだ……

お互いに息は上がっておらず、闘志は高ぶるばかりである。夕日によって赤く染まった第三東京市をバックに二人の戦いは、続く……

その後、二時間にも渡って戦いは繰り広げられた。

「トオツ!!! シャドウ・キック!!!!」

「ムン!!!! ベルゼ・クロス!!!!」

シャドウは飛び上がり、必殺の蹴りをオレビスに目掛ける。地上でそれを迎え撃つようにしてオレビスは剣と盾を組み合わせて、シャドウに飛び掛った。

互いの体がぶつかり、火花が飛び散る……二人の体が地に伏すように倒れこんだ……

「はあっ、はあっ……痛み分けのようだな……」

「そのようだね……はあっ、はあっ……はあっ……」

身体を起こし、二人は互いに向かい合う。オレビスは、このまま戦

えと思ったが、誰かが近くに居る気配を感じた……

(…ちっ、この気配はビシユム。おのれ、邪魔するつもりか……)

このまま決着をつけても、意味が無いことを悟ったオレビスは……

「仮面ライダー・シャドウ!!!今日の戦いは此処までだ!!!!!
だが、忘れるな!!!貴様を倒すのは、この俺だということをして!!!」

オレビスはマントを翻し一瞬で姿を消した……

「そうはいかないよ…オレビス。僕も負けるわけにはいかないんだから……」

シャドウもまた、オレビスに対して挑戦的に応えるのだった……

「気づかれましたか…オレビスに……」

決闘を見守っていたビシユムだったが、直ぐに自身が見守っていた男が近くに居るのを感じるのだった……

「ビシユム…何をしに来た？」

そのオレビスはいつのまにか、ビシユムの正面に居り、彼女の鼻先に剣を突き立てていた。

「ほほほほほ。信用がないのは辛いものですね……」

ビシウムは、やわらかく微笑んで言った。だが、オレビスの目は厳しい……彼が自分たち三神官を信用していないのは、周知の事実なので気にしてはいけない……

「仮面ライダーには何もしませんよ……やるのは、人間達に対してです……」

ビシウムの嫌な笑みにオレビスは、怪訝に思ったが、たとえ三神官が何を仕掛けてこようとも自身の好敵手が敗れることなど無いと思うのだった……

同時刻、第三東京市の路地裏の壁を這う不気味な影が存在していた……

「エツ……エツ……エエツ……」

黒味を含んだ緑色の鱗をした巨大なカメレオンのような影……その腕には、小学生ほどの子供の姿があった……

時刻を遡る事一時間程……

「今朝、おにい。あの格好で行ったけど大丈夫やろうか？」

した。

「グエツ!!!!!!!!!!!!!!」

尾で叩きつけられた彼は、強く頭を打ってしまったがためにそのまま気絶してしまった……

「お、おにい!!!!!!!!!!!!!!おにい!!!!!!!!!!!!!!」

フユが気を失ってしまった兄に呼びかけるが、それにトウジが応えるはずも無くむなしく響くのだった……

同じような事件が、この時間帯に多発していた……通学路……塾……公園……スーパーなどで……

”ミレニアム・アミーゴ”

事件から一夜明けた今日、TVでは、同時に起こった誘拐多発事件を報道していた……

< 昨日の午後六時、小学五年生の児童が相次いで行方不明になる事件が多発しました。警察では、犯罪組織による組織的な誘拐の線で捜査を……>

昨日の夕方に起こった事件が報道されている。このことに対して、

シンジは”ゴルゴム”の犯罪の匂いを感じる。

(…誘拐事件がこんな一編に起きるものだろうか？ここは、ゴルゴムの膝元…ありえるな…)

シンジは、事件を調査すべく動き出した。

「シンジ君。今日のシフトから君をはずしておく。だから、思う存分、やってきなさい」

彼の考えを察していた本郷の言葉はありがたかった。この人には、自分の考えていること全てが見透かされているようだ。

「はい…それじゃあ、お願いします」

そう言ってシンジは裏口から出て行った。ラミも続いて出て行った。特に呼び止めずに本郷は二人を見送った。

「君の思うとおり、これはあの連中の仕業に間違いないだろう。奴らの存在は決して人目に触れない。この社会そのものを壊そうとしていることにさえ、皆気づかないし、気づこうともしていない。だからこそ、我々は戦わなくてはならない…人類の自由と平和のために……………」

一人残った本郷は、そう呟くのだった……………

「ど、どこや?!?!フユ?!?!?!どこにおるんや?!?!?!」

朝、鈴原トウジは自転車に乗り町中を走り回っていた。彼の表情は焦っており、必死だった……………

気が付いたとき、すでに朝を迎えており彼の妹の姿は何処にも無かった。夜勤明けで帰ってきた父親を押しどけて家を飛び出してきたのだ。

「どこや?!?!フユ?!?!?!フユ?!?!?!?!?!」

当ても無くトウジは何処にも見えない妹の姿を探す……………そんなトウジを気に留めることなく人々の雑踏は流れていく……………

第三東京市のとある場所……………

「ホホホホホホ。カメレオン怪人。ご苦労様です……………」

白い神官服を着た女ビシユムは、目の前にある檻に閉じ込められた子供らを満足そうに見て、これを実行してくれた怪人に労いの言葉を送るのだった。

「エッ…エッエエッ……………」

ビシユムが視線を向けた先には、いくつもの空間が歪むようにして怪人たちが姿を現したのだ…カメレオンの姿をした異形が………

「……エツ…エエエツ…エエエエエ…」「」「」

ビシユムの言葉が嬉しかったのか、怪人たちは身をよじりながら声を上げるのであった………

その頃、シンジはラミと共に行方不明の現場に来ていた。ここにも警察が着ており、パトカーが二台ほど止まっている。

野次馬も多く、それを鬱陶しそうに払っている警官の姿は、ご愛嬌なものだ………

「…うすいけど…何かがここに居たんだ………」

シンジの視線は、警官や鑑識が見ていない建物の二階部分の壁に残る何かによって、吐き出された唾液のようなものに向けられていた………

「…怪人なの？」

ラミが言った。彼女の言葉にシンジは頷く。長いこと闇にうごめい

ていた異形と戦ってきた経験がそう告げていたのだ……

「ただ…子供を攫っただけじゃない…狙いは、僕だ……」

シンジは拳を強く握って、内から湧き出る怒りを押さえつける。相変わらずの敵の卑劣さに対して……

やるのなら、直接僕をやればいい。罪も無い人達を巻き込むな……

昨夜、多発した事件がまるで暗に”早く、こないとこの子達の命は無い”と言っているように聞こえる。

「…ここで、五箇所か……」

シンジは、持ってきた地図に五つ目の印をつけた。それぞれの場所に共通点はないが、見たところとある場所からそれほど遠くない距離で事件は起こっていることがわかった……

勘ではあるが、それぞれの場所からほぼ等しい距離にある点が敵の潜むアジトかもしれない……

「そこなの？」

「おそらくは……」

ラミの質問にシンジはそう応えた。行って見るしかないと思う、この場合は…確かめる方法はそれしかない……

二人が頷きあったときだった。

「だから言つとるんや……妹を攫つたのは、でかいトカゲの化け物なんや……!!!」

ふと視線を向けるとそこには、高校生ほどの男子が近くの婦警に必死で何かを訴えているのだが、まるで相手にしない婦警というものだった……

「はいはい、分かったから。学校サボってないで、早く行きなさい」
愛想笑いを浮かべて話を聞かない婦警に対して、少年はうなだれた。それに構わず、婦警はミニパトを走らせて行ってしまった。

近くで、聞き込みをしていたマヤが駆け寄った。

「もう。どうして、行政の人達って、みんな融通が利かないのかしら?」

「ここでも”ぶう”たれながら、マヤは口を尖らせた。見る限り、現場に来て偶々そこに居合わせたようである……」

「ねえ、君。良ければ、話を……」

マヤが少年に気遣うように言うが、少年 トウジはマヤを振り切つて駆け出して行ってしまった。

「ああ…悪いことしちゃったかな…」

マヤは少し失礼すぎたのだと思い、表情を曇らせてしまった。

「何が、あつたんですか?」

そこへシンジとラミがやってきた。トウジの後姿はすでに小さくなっていたのだった……

「ええ…怪物について、聞きたくて……」

「怪物？よろしければ、お話を聞かせてくれますか……」

しばらくして、マヤから謎の怪物が目撃されて居た事情報告を得ることが出来たシンジとラミは直ぐに目星をつけた場所へと急行したのだった……

「…何かあるのかしら？」

マヤもシンジに何か感じるものがあったのか、直ぐに後を追うのだった……

(何や！…！皆、どうしてわかってくれんのや！…！)

トウジは一人、悔し涙をこらえながら無我夢中で走った。そして、彼はとある場所にたどり着く……

そこは、第三東京市の次期開発区として買収されたマンションの廃墟であった……

「ここかい…なんでこんなところにきたんや?……」

トウジは、何でこんなところに着たのか自分を不思議に思っていた。何故だか、ここに何かがあるような気がする。そんな漠然とした何かに惹かれるように足を進めた。

彼は気づかなかった。廃墟にうごめく恐るべき悪の陰謀に……

「ホホホホホホホ。それでは、始めましょうか……」

ビシユムは、檻に捉えられた子供に恐ろしい視線と微笑みを投げかけながら近づいていく……

彼女に檻の中の子供達は怯えた。途方も無い恐ろしいことが起こることを本能的に分かってしまったのだから……

「仮面ライダー…貴方は、あなた自身が護る対象に殺されるのですから……」

ビシユムは、自身が思い描く未来に対して満足そうに笑った。これより、行うのは”仮面ライダー・シャドウ暗殺計画”の準備なのだ。

これまでの戦いで仮面ライダーは常に力の弱いものを護ってきた。ならば、ゴルゴムが仕立てた”弱いもの”を作り出せばどうだろう…

特に子供は何の力も無く、不幸であればあるほど哀れみと同情の手を差し伸べるだろう……

暗殺計画のために用意した”弱いもの”に手を差し伸べたとき、仮面ライダーは殺されるのだ。自身が護るべきものによって……

そのためには、より多くのいけにえがいる。代えの駒は多ければ多いほど良い……

ビシユムの手には、寄生型の生体爆弾が握られていた。これは、対象の生物に寄生させることによって、生物を爆弾に代えてしまう恐ろしい代物である……

生体爆弾から伸びた配線のような触手が、宿主を今か今かと待ちかねるようにつねり始めた……

この爆弾は、ウイルスのように自己複製ができ、一つ植えつけただけで後は面白いように増えていく……

トウジは、廃墟の奥に深く足を踏み入れ、檻の中に妹がいることに気が付いたのだった。

「フユ！……！」

思わず叫んでしまったことがいけなかった。ビシユムに気づかれてしまったのだから……………

ビシユムは、トウジの叫びに反応するようにして目からエネルギー弾を発射する。

「うぎゃあ……！」

突然の光に驚いて尻餅をついてトウジは倒れてしまった。正面のコンクリートの床がエネルギー弾によって窪みができてしまった……

驚くトウジを無視して、ビシユムはさっと手を振り上げた。すると空間が歪むように動き出し、トウジに向かって襲い掛かったのだ。

見えない何かに殴られ、彼は困惑した。声を出すことも無く、彼は檻にいる妹が見ていることに気が付いたが、痛みのため声を上げることができなかった……

（な、なんや……これって、おじいがいいよった通りなら、正義の味方が着てくれるんやないか……）

幼い頃より聞かされてきたこの世界を征服しようとする怪物たちと戦うヒーロー。自分以外に味方がいないこの状況では、それすら信じられなくなりそうだった……

「あなたも後でやってあげますよ」

ビシユムは、また手ごまが手に入ったことが嬉しいのか笑った。だが、事態は彼女を最後まで笑わせることを許さなかったのだ……

「やはり、ここに居たか！！！ゴルゴム！！！！！！」

その声にビシユムは顔の筋肉が強張るのを感じた。なぜなら、殺す相手にその準備を見られたのだから……

「！！！！？！！！！碇シンジ！！！！？！！」

厳しく怒りに満ちた視線を投げかけるシンジがそこにいた。ビシユムは直ちに、シンジに対して攻撃を加えた。

エネルギー弾が連続してシンジを襲う。それらよりも一歩進むようにして彼はそれを回避し、ビシユムに近づき手元に持っていた生体爆弾を蹴り上げた。

「しまった！！！！」

改造人間であるシンジの蹴りの威力は凄まじい。故に自身の手に嫌な感触を残して、生体爆弾はつぶれてしまった……

「よくも、やってくれましたね！！！！」

憎悪のに表情をゆがめながらも掴みかかってきたシンジの攻撃を浮遊することで回避した。

入れ替わるようにトウジを襲っていた歪みは、シンジに標的を代えた。

「だ、誰や？あの兄ちゃんは？」

突然、現れた青年にトウジは疑問の声を上げたのだった。そこへ、

天使のような優しげな貌をもった銀髪の女性がトウジに駆け寄り……

「大丈夫？」

そんなトウジにラムが心配そうに声をかけた。二人から距離を置いたところでシンジは一人戦っていた……

「クッ！！？！何！！？！？」

シンジは自身を取り囲むようにやってくる歪みと格闘を繰り広げるが、相手の所在が掴みにくいために苦戦を強いられていた。

歪みに二発、三発と殴られるが、カウンターを返して互角にもつれ合う……

「……数が少し多いな……」

敵が四方から攻撃してくることに對して、複数いることに彼は気づいたのだった。

展開する見えざる敵に對して彼は闘志をこめた視線を向けて、拳に力をこめ、構えを取った……

「変・身！……！」

体内のキング・ストーンが鼓動し、シンジを緑色の光が包む。彼は変身する……蝗の身体に黒いリプラスフォームが包み、さらに銀色の強化された外骨格が身体を覆いつくし、銀の戦士へと変る……

足元のレッグトリガーを鳴らし、挑発的な視線とともに腕を構え……

「仮面ライダー・シャドウ!!!!!!」

緑色のマクロアイと第三の目が周囲に擬態するカメレオン怪人たちを捕らえており、

「そこか!!!!!!」

シャドウは何も無い空間目掛けて、突撃し拳を勢い良く振った。

「エエエエツ!!!!!!」

大きく裂けた口から吐き出された唾液と共にカメレオン怪人が姿を現す、その怪人に呼応するかのように他の四体も擬態を解いてその姿を現したのだ。

内の二体がシャドウ目掛けて、長い舌を両腕に絡ませるように発射させた。

「フンツ!!!!!!」

シャドウは、二体のカメレオン怪人の舌を両手で掴んで、スイングして一体をビシウムに投げつけた。

「くっ!!!!!!?!!!!!!」

ビシウムは表情を歪ませた。なぜなら、これからというときに仮面ライダーに邪魔されたのだから……

行動を起こした機甲大隊、機械化大隊に知られれば自分は大きな笑

いものになることは間違いなかった……

(…仮面ライダー……!!あなたは、私のこの手で……!!……)

細い指に生えた鋭い爪を手のひらに食い込ませて、ビシユムはシャドウに対しての憎悪の炎を燃やした……

カメレオン怪人を投げつけられた衝撃によりビシユムは、白いローブを翻しながら廃墟の影へと消えていった……

「トアッ……!!」

掴んでいるカメレオン怪人をシャドウは、近くの壁に向かってたたきつけた。衝撃により壁が砕けた。

「エ……エエエッ……!!」

三体のカメレオン怪人がシャドウに飛び掛る。爪を立て、先端の角を突き立て、長い尾を振るなどしながら……

「ムン……!!タアアア……!!」

シャドウは爪をつきたててきた怪人を後方へ往なし、角を突き立てたものを手刀で地面に伏せさせ、長い尾を振ってきたそのものを尾を掴んで三度放り投げた。

「エエエエエッ……!!エエエエエ……!!」

倒された三体とは別の二体が長い舌をシャドウに再び絡ませる。

「ムッ！……」

舌はシャドウの胴体と首に絡みつき、彼の身体を大きく持ち上げた。それに応じるように残りの三体もシャドウに下を絡ませ、そして踊り狂うように身体を激しく動かして電流をシャドウの身体へと放った。

「……！！！！ウウウ……」

流された電流により、銀色の体から火花が飛び散るだが……

「クッ…キング・ストーン！！！！！！」

彼の声に応じるようにベルトの奥にあるキング・ストーンが輝く。カメレオン怪人達の五感を麻痺させるように白いフラッシュが連続的に起こる。

その光に苦しむかのようにカメレオン怪人たちは、舌の力を緩ませ、体中をかきむしる様に暴れだした。

「よしッ！！今だ！！！！」

舌の力が緩まったことにより、地面に着地したシャドウは反撃を開始した。

「トオッ！！！！」

両足のレッグトリガーを鳴らし、高く飛翔してカメレオン怪人に向かっていき、

「シャドウ・パンチ！！！！」

緑の閃光を発する拳を怪人の頭部目掛けて強くぶつけ、そのまま隣にいる怪人に駆け出し、

「シャドウ・チョップ！！！！」

両腕に緑の閃光を放ちながら、一撃、二撃とカメレオン怪人に打ち込む。怪人は、口を大きく開けて後方へ倒れこんだ。

「エエエエエッ！！！！」

「エエエッ！！！！」

二体のカメレオン怪人たちは、仲間がやられたことに腹を立てるようにしてシャドウに向かっていく。

「トアッ！！！！」

シャドウは、二体のカメレオン怪人に向かって飛び上がり、

「アーム・トリガー！！！！！！」

両肘から荒々しいトリガーを出して、カメレオン怪人たちを切りつけて、沈黙させた。

最後の一体に視線をやってから、再びレッグトリガーを鳴らしながら飛び上がり…

「シャドウ・キック！！！！！！」

緑色の矢じりとなりシャドウは、最後のカメレオン怪人に向かっていった。

「エエエアアツ！！！！」

キックの衝撃によりカメレオン怪人は、吹っ飛び地面を転がるようにして身体をぶつけたと同時に体全体が真っ赤に燃え、原子レベルまで細胞が破壊され、消滅して行った。残りの四体もほぼ同時に消滅し、塩のような灰のあとが残るだけだった……

戦いを見ていたトウジにシャドウは、ぐっと拳を握ったガッツポーズで応じた……

これを見たトウジは……

「おじん…ワイはみたで…仮面ライダーを。おじんの言うとおりほんまモンの漢やあああ！！！！」

トウジは、恐ろしい怪人達を倒し、檻から開放した子供たちと共に歩いてくるシャドウに対してそう叫んだのだった……

ラミは笑みを浮かべてシャドウを見る……

開放された子供達は、それぞれの帰る場所へと行く。それを見届けたシャドウはラミと共にバトルホッパー”蝗龍”に乗って去っていった……

「仮面ライダーシャドウ…君達の正義…確かに見せてもらったよ」
物陰から本郷猛は去り行くシャドウとラミを見ていた。満足そうな
笑みを浮かべてこの場を跡にするのだった。

この日、第三東京市に一つの伝説が駆け巡った……

曰く…異形の怪物から人々を救う異形のバイクに乗る銀色の戦士と
天使がこの町を走っていると……

とどまることを知らないゴルゴムの悪意は、今日も何処かでうごめ
いている…人類の自由と平和を奪うために……

人知れず、彼はゴルゴムの悪意と戦う。仮面ライダー・シャドウ…
…ゴルゴムに牙をむく戦士は今日も走り続けるのだ……

第四話「都市伝説」了

第四話「…都市伝説…」（後書き）

今回は、昭和ライダーの王道的展開にしてみました。

次回もよろしくお願いします。

アクセスしていただいた方々には、感謝、感謝です。

それではっ！！！！

第五話「PROJECT G・5」(前書き)

前の投稿から、かなり時間が空いてしまいました。

こっちもしっかりやって行きますので、よろしくお願いします。

それでは、びびびび………

第五話「PROJECT G-5」

深夜の第三東京市は、まさに不夜城であった。大都市の営みの中に
明りによるコントラストが地上の星として町を明るくしていた……

眠らない人達の群れの中に彼は居た。

「じほっ！！！！じほっ！！！！」

雑踏の中で男は、視界が眩暈を起こしたのを感じた後に襲ってきた
強烈な寒気と吐き気に肩を震わせて路地裏に駆け込んだ……

誰も彼のことを気にかけることなく人の波は流れていく……………

「はあっ、はあっ、酷いな…これでは、この”強化細胞”も長くは
持ちそうに無いな……………」

彼は胸元で鼓動する心臓付近に植えつけられた自身の生命線が悲鳴
を上げているのを感じたのだった……

「くそっ、せつかく生き残って、ここにきたのに…もう、これで終
わりかよ……………」

がっくり頂垂れるようにして男は、目に絶望の色を浮かべた。閉じ
かけた瞼には、走馬灯のように彼がこれまで生きてきた出来事が駆
け巡った……………

彼が生まれたその世界は、闇に包まれていた。日の光は無く、植物も動物もない死の砂漠だけが広がる荒れ果てた土地だった……

唯一明りは、太陽ではなく人工的な光に包まれた”帝国”の首都だけであつた。だが、彼はそこには住めなかつた……

”帝国”に住めるのは、上流階級に居る貴族と”帝国”を統べる”クライシス皇帝”に認められたものではないとだめだったからだ……

卑しい下民の子として生まれた彼は、ただ死にゆくものたちの身体を食い、同じように食べ物に群がる者達を殺しては、生きながらえるしかなかつた……

死んでいくことを拒みながら生きる彼は、黒いローブと骨をより合わせて作った武器のみを持って、闇の世界を歩いた……

彼の姿は、まるで骸骨のようにやせ細っており、常に生への執着だけがそのところに存在していたのだつた……

そんな彼にも転機が訪れた…ある女が自分を”帝国”の軍団に誘ってきたのだ。

”お前のその力を、クライシス帝国で生かしてみないか？”

女の名は、マリバロン。後に彼を”スカル魔”に仕立てた怪魔妖族の長であつた……

”スカル魔”それが、名もない彼に与えられた唯一の名前となり、彼は太陽のあるこの世界を侵略する帝国の一員としてこの世界にや

ってきた……

汚れた世界から、この世界へのチケットとして彼の胸には”強化細胞”が埋め込まれる……

彼は、帝国の一員として同じ”スカル魔”の仲間達と共に戦った。だが、一人の男により全てが終わった……

巨大な武力を誇った帝国が崩壊し、皇帝までもが亡くなった。そればかりか、故郷の世界までもが崩壊したのだった……

幸いにも彼は生き残れた。この世界では、異次元の異物である自分は本来なら生きられないのだが、強化細胞を持っていることが彼の命を繋いだ。

その後は、人間達の間紛れ込むことによって身を隠した。10年後に”セカンド・インパクト”を体験したが、特に支障も無く過ごし、定職は無いが、不自由なく暮らせていたのだったが……

「これで……終わるか…皇帝…マリバロン様……私も…怪魔霊界へ…行かねば……」

人間の顔から、白い骸骨へと姿が変わっていく……手も痩せ、まるで死人のような白く生氣のない肌になっていく……これが、本来の姿であった……

だが、それでも死にたくは無かった…まだまだ、生きたいとスカル魔は願った……

「だいぶお困りのようですね……」

振り返るとそこには、黒い神官服を着た男が佇んでいた……………

その一時間後……………

第三東京市の中央に位置する公園に一台の乗用車が止まっていた。車内には、ラブソングが流れ、愛し合うカップルの雰囲気は大いに盛り上げていた。

公園の茂みの中にそれはいた……………グレー単色をした半獣人のような姿をした異形が……………

「……………」

その異形は、茂みの向こうにある乗用車に視線を向け、抑えられない衝動を隠し切れない自身の手と交互にみる……………迷っているようにも見える光景だった。

しばらくして意を決したのか、その半獣人は、乗用車の方へと歩み寄り始めた。

車内で良い雰囲気身を任せていた女性は、ふとバックミラーに視線を向けたときだった。

「?!?!?!?!?!」

そこには蛾に似た半獣人のような姿をした異形が映りこんでいた。

「な、何か居る?!?!?!?!?!」

「えっ?」

男の方は突然の女の言葉にバックを振り返ったが何も居なかった。そこで、車内に出て何か居ないか確認しているときだった。

「うわあああ!?!?!?!?!?!」

男に突然の突風が降りかかり、金粉のような粉が意思のあるかのように襲い掛かってきた。

金粉には強力な毒素があり、男から煙が上がり、断末魔の叫びを上げさせること無く白い灰に変えてしまった……

「きゃあああああ!?!?!?!?!?!」

女が悲鳴を上げたが、蛾の異形”モスオルフェノク”は、再び羽を飛ばたかせて同じように女を白い灰にしたのだった……

「……………」

モスオルフェノクは、灰にしてしまった二人を恐ろしく思ったのか、急ぎ足でこの場を後にしようとしたが……

「お見事ですよ。さすがは、新たな人類といったところでしょうか……」
振り返るとそこには、黒い神官服を着た男と寄り添うように立つ亡者の姿があった……

「……………」
「お仕事ご苦労様です。今日は、あなたに用心棒を紹介しに着ました……」

第三東京市 戸陰流 忍術道場

閑静な住宅街の片隅にその道場は立っていた。古風な日本家屋であり、ここに住む人間達の息吹を感じることの出来る温かい雰囲気があった……

道場に隣接するように立てられた二階建ての住居の一室に彼女 惣流 アスカ・ラングレーは居た。

部屋はきちんと片付いているのだが、そこに飾られている様々な凶器……いや、忍者が使う道具の数々は、みるものを唾然とさせるかもしれない……

健やかな寝息を立てる少女とクナイを始めとした忍者刀、手裏剣、鎖鎌という組み合わせは、あまりに似つかわしくないとはいいたくなるだろう……

「あれは…宇宙人だっていってるでしょう…」

実際、彼女の友人である洞木ヒカリが悲鳴を上げたのはいうまでもない。そんな事を構い無く彼女は寝言を言う。

お猿さんを模した時計が七時を指したとき、目覚ましは鳴り出した……二回、三回と鳴り終わった時に彼女は目覚めた。

「……………」

寝起きが悪いのかアスカは、座った目で起き上がり洗面所へと歩き出したのだった……

枕元には、十字の模様が描かれた刃引きされた手裏剣が一つ……

これは、彼女を助けてくれ、今の彼女が忍者というものに憧れを持つようになったきっかけをくれたある男の持ち物である……

「仮面ライダーにまたしても、やられたというわけか……」

「はい…そうです。計画さえ成功していれば、厄介な因子はなくなるはずだったのに……」

ダロムは、ビシユムに確認を取るようにしていった。ビシユムは、計画の失敗が忌々しいのか、表情を憤怒の情でゆがめていたのだった……

「仮面ライダーめ。我々の計画を悉く邪魔しておって……」

バラオムが拳を振りながら、ライダーへの恨み言を吐く。彼にとっても仮面ライダーシャドウは、憎い相手でしかないようだ……

二人の様子を見たダロムは、

「ここは一つ、大神官長様の”お力”を頼ってみようか？」

「なにっ！！？！！大神官長さまに！！？！！」

バラオムが驚きの声を上げた。なぜなら”大神官長”とは、彼ら三人の大神官を束ねる長であり、直属の上司なのだ。

上司の手を煩わせるのは、いくら問題が深刻でもそれを頼むのは失礼なのではとバラオムは思った……

「しかし、それは、我らの出すぎた行動にならないか？」

「奴を倒すのは、創世王様からも直々におおせられている。大神官長様も納得してくれるだろう……」

「だが……………」

バラオムは、言葉を洩る…

「ダロムの言葉一理あると思います」

「ビシユム!!?!?!」

「バラオム。分かっているでしょう。大神官長様の”お力”がどれほどのものか…」

ビシユムはバラオムを戒めるように言った。さすがのバラオムもそこまで言われると納得するしかなかった…………

「我ら大神官に与えられし、三つの石”天”、”地”、”海”の性質を持ち、創世王様のみが持つことを許される”キング・ストーン”に次ぐ力を持つ”冥”の石の力ならか…………」

「その通りだ。バラオム。大神官長様に頼むのは、決して筋違いではないはずだ……………」

意見が合った三神官達は、直ぐに大神官長 ダンデムの許へと行くのだった…………

謎の誘拐事件から、三日が経っていた……

「何よ…警察がこれじゃ役立たずじゃないのよ……」

警察署の談話室で、ミサトは”ぶう〜”たれていた。理由は言うまでも無く、警察が全力を挙げて捜査をしようとした矢先に事件が解決してしまったことに対してであった……

ミサトは行方不明者たちが帰ってきたことに不満…警察を差し置いて、解決されたことが気に入らないらしい。

さらに彼女を不機嫌にさせるのは、帰ってきた被害者達が口をそろえて怪物を見たというのだ……

所詮は子供と、ミサトは鼻で笑い報告書を書くまでも無いと思ったのだが……後で口うるさい上司に怒られてしまった……

「おい、葛城。愚痴をそのまま出すのは賢明じゃないぞ」

そこへ、長髪を一束に結わえた無精ひげを生やした男がミサトに話しかけてきた。

「加持、アンタ……警察ならわかるでしょ…こんなに早く勝手に事件を解決されたら、あたし達の面子がたたないじゃない……」

「ああ、それでか、新しく課が署内にできるらしいぞ。何でも、G5とかいう新兵器を専門に扱う課らしい……」

「何？それ……」

加持の言う新しい課に疑問の声をミサトが上げようとしたとき

「ほら、あの二人だ。海外から直接引き抜いてきたエリートだそう
だ……」

彼が視線を向けると、二人の男女を署長の秘書が出迎えている光景
があった……

「へえ、いつからなの？」

「前から、極秘で準備してきたらしい。今朝になって、それが知ら
れたんだ」

「目的は何なの？単なる刑事課とは、違うみたいだけど……」

「ああ、何でもX・F・I・L・Eのような怪事件を扱う課だってよ……」

加持は、いかにも小馬鹿にしたくさで嘲笑うようにいった。

「馬鹿じゃないの……そんなのに回す資金があるんなら、こっちに
回せつての……」

「大丈夫だ、葛城。あいつらを心地よく思っていないのは、みんな
同じだ……」

二人に同調するかのようになり、新しく出来た課”G5”の二人 渚
カヲル、マリイ・スーに向けられる視線は排他的なものだった……

休憩室に設けられたTVからは、

<昨夜、第三東京市の公園で乗用車の不法投棄がありました……市の対応は……>

第三東京市 警視庁 特別対策課 G15…

この課は、人智を超えた怪生物による事件の解決として防衛用ツールG5の運用を行う……

G5 正式名称 GENERATION - 5”ジェネレーションファイブ”

第五世代型強化外殻及び外筋……

2000年に発生した未確認生命体の事件の教訓を生かして、作られた対未確認生命体用の強化服である。その未確認生物事件より二年後の、アンノウンにおいて投入された強化スーツG3をさらに発展させたものがこのG5……

未確認生命体事件……セカンド・インパクト”が始まる半年ほど前に長野県の山中で古代遺跡が発見されたから起こった怪生物による不可思議な事件のことを言う……

当時の警察と怪生物と同時期に現れた人間に対して好意的だった未

確認生命体第四号のおかげで事件は解決……

G3の外観は未確認生命体四号をモデルに製作されている。開発の
スポンサーとして、当時、未確認生命体に遭遇した企業体が技術提
供及び開発資金を援助してくれた。

この二年後に、未確認生命体を上回る”アンノウン”が出現……

警察組織は、未確認生命体以上の力を有する”アンノウン”に対し
てG-3の本格的な運用を開始……

”アンノウン”による事件は、”アギト”と呼ばれる人類の進化体
との協力を持って解決されたのだった……

この時、後の”オルフェノク事件”で暗躍する”オルフェノク”に
似た”ギルス”も確認される……

両者の事件は、”セカンド・インパクト”の混乱期にあつたために
人々の記憶から、忘れ去られるように当時の関係者も今は行方が知
れなくなつていった……

以降に発生した”謎の失踪事件”、”オルフェノク事件”が続き、
さらには、地方での妖怪に似た異形が目撃される事件も報告されて
いる……

それぞれの真相は、一般に公表するにはあまりにも突飛なものであ
るために、トップ・シークレットとして”警視庁 X-1白書”に記
しておく……

この度の怪生物によって引き起こされた事件に対抗すべく、特殊犯罪対策課として”G-5”の設立をここに承認するものである…

”特殊犯罪対策課 G-5

課長 時田 シロウ

装着要員 渚 カヲル

整備及び分析 マリィ・スー

連絡要員 山岸 マユミ”

渚 カヲル 年齢 18歳

16の頃に飛び級で大学を卒業し、警察学校を優秀な成績で卒業した期待のホープと称されている…

「凄い事件が起こっているんだね。マリィ君」

アルカイツクスマイルを浮かべながら、第三東京市の警察署に設け

られた特別課の席に座っているカラルは、OREジャーナルが発行した新聞に目を通していた。

灰色が掛かった銀髪と赤い目が特徴的な美青年である。彼の視線の先には……

”誘拐事件は、怪物の仕業 銀色のヒーロー現る”

かなり小さく、見落としてしまいそうなくらいな記事だった……

「そうね…可能性としては、カメレオンかヤモリの能力を持った”オルフェノク”の可能性が高いかもしれないわ…」

応えるのは、金髪のアメリカ人女性 マリイ・スー。彼女の手元には、”警視庁 X・白書”の”オルフェノク事件”についてのペー
ジが開かれていた。

マリイ・スー 年齢 18歳

14で大学を卒業し、博士号を有する若き天才…

「別の何かの可能性だってあるんじゃないのかい？たとえば…改造人間とか……」

「改造人間ね…でも、ここ数日で起きた事件では、目撃されたものに統一性は無いわ。発光事件の時は、人間に似た茶色い怪物と黒いのが目撃されたけど、この誘拐事件のような既存の生物を模したものではなかったそうよ…」

カラルの言葉にマリイは否定的な意見を述べた。改造人間とは、彼

が信じる一つの人種らしい……

真面目に聞いたわけでもないのほとんどがうる覚えといって過言ではない……そんなものが居るとなると、それなりに大きなバックが居るだろう……

「当事者じゃない僕らには、分からないことだろう。唯一の真実を知るのは……」

「仮面ライダーだって、言いたいよね……」

マリイは、カヲルが後から言うきめ台詞を打ち切るように言葉を返した。

異形の悪と戦う仮面の男……そんな酔狂な男が居るといふカヲルの言葉はあまりに突飛しすぎていると彼女は思っただった……

そんなマリイを気にせず、カヲルは暇さえあれば行う手遊びに興じ始めた……

「友達になれればいいな」

と独特のしぐさをする。それは、自分を助けてくれた”トモダチ”から教わったものである……

「そんな事してる暇があったら、G5のマニュアルに目を通しておきなさい。事件は、何時起こるか分からないのよ……」

カヲルの手元には、”PROJECT G-5”と書かれた表紙の冊子が置かれていたのだった……

ORE ジャーナル オフィス

「な、なんで、こんなに記事が小さいんですか？」

「それは、そうだろう。そんな記事、一面に出して誰が喜ぶんだ？」
記事を見て、声を震わすマヤとは対照的に編集長の大久保は平然と
していた。よほど余裕なのか、足の爪を爪きりで切っていた……

「でも、被害者は皆見たって言ってます」

「お前は、どうなんだ？ 写真の一枚ぐらいないと説得力が無い。大衆を納得させるからには、それなりの証拠を見せないと……」

大久保の言葉は厳しいが、至らないところを的確にマヤに教えた。
証言にはかならず、検証というものが必要だ。これを抜かしてしま
うと、一流の記事だって三流になりさがってしまうのだから……

「わかりました…もっと、頑張ります」

マヤは、大久保の言葉をかみ締めて頷いた。

「そうかしこまるな。次の山場にあったら、逃がさなかったらいい
だけのことだ。お前のように地道にやっついていけば、その内、大スク

「ブを一面に飾れるだろうな」

「は、はいッ！！！！それでは、取材に行つて来ます！！！！！」

大久保の言葉が嬉しかったのか、マヤは敬礼をして取材へと出かけていくのだった……

「元気なものね、マヤちゃん」

彼女の後姿を見ながらベテラン記者 桃井令子が呟いたのだった……

「令子。新人を温かい目で見るのは、結構だが、お前も早く取材に行つてこい」

「直ぐに行きますよ。編集長……」

令子もマヤから数分送れてオフィスを出るのだった……

” ミレニウム・アミーゴ ”

「上手いものだな……」

本郷はシンジが淹れた珈琲に舌鼓を打ちながら、味を評価した。

「恐れ入ります。店長……」

シンジは笑みを浮かべて言葉を返したのだった。

「珈琲タイムは、この辺りにして……君はこれから、ゴルゴムとどう戦うつもりだい？」

「そうですね。この町はそれに関連する様々なものが舞っていますから、慎重にやらなければならないと考えています」

二人は、ラミを交えて休憩所で話し合っていた。本郷猛は、シンジがお世話になった”ディアボロ”のマスターが連絡した協力者ゆえに、これからのことを打ち合わせなければならなかったのだから……

「確かにそうだな。私も君ごろの年には、そういう連中を追って毎日当ても無く走ったのだが……時代はかわるものだな……」

「本郷さんも”組織”と戦っていたんですか？」

シンジは、何処か懐かしむように目を細める本郷に質問をした。本郷は、フツと笑い、

「なぜ？私が”組織”と戦っているとおもうのかね。もしかしたら、ただの物好きかもしれないぞ」

「あなたの目ですよ。たとえば、どんなに関係ないことを装ってもあなたがその目で見てきたものはごまかせません」

「……なるほど。目か……私が見てきた唯一の真実を映したこの目だけはごまかせないか……」

本郷は、シンジの鋭い指摘に感心した。確かに、この若者なら、あのかつてよりも巨大化した悪と戦えると思うのだった……

「慎重に行うべきだな。とりあえずは、今度、ゲヒルンに乗り込もうか」

「さっそくですか。臆病と慎重は違いますからね……」

「ああ、用心だけは心がけよう。そして、ラミちゃんのいうその娘の救出は絶対だ」

会話を聞いていたラミも頷いた。あの娘は今も、あの暗い地下に囚われている。絶対に助け出さなくてはならないと彼女は思うのだった……

「そうですね。ですが……ここには、ゴルゴム以外にも何かがあるような感じがします」

シンジは、第三東京市に来る以前もゴルゴム以外の異形と戦ったことがあった。彼自身、所謂闇の業界には様々な者達が奔走している事を知っているのだから……

「ゴルゴム以外？」

ラミが眉を寄せて呟いた。あの連中以外にも何かがあるのだろうか？それは、彼女自身もよく分からないが恐ろしいことではないかと思っただった。

「確かにな。闇の世界には、無数の組織が存在する。誰にも知られ

ること無く彼らは活動を続けているだろう。今、こうしている間に
も……」

本郷の言葉にシンジは頷いた。確かに無数の組織が存在しているの
だが、それと戦う戦士達がいるのもまた事実なのだ……

「はい。僕らがこうしていられるのも他に戦っている人達が居るか
らですよね」

「ああ、そうだ。私達はこの第三東京市の敵にだけ集中すればいい。
何でも背負い込むのは結構だが、重さに負けぬように頑張らなくて
はな」

本郷の力強い言葉に頼もしさを覚える一方でシンジはゴルゴムに対
してさらなる闘志を燃やすのであった……

第三東京市 郊外の廃墟……

「あ、あなたはその、私にこいつの護衛をしろというのか？」

「そうです。この町は色々と物騒なのですよ……」

「アンタが言える立場じゃないだろ……」

「そうですが、それは自分でも分かっています。だからこそ、言うのです」

スカル魔は、目の前にいるダンテムという黒い神官服を着た男に対して抗議に似た質問をぶつけるが何もかもやんわりとはねつけられるために半ば諦めの境地に達していた。

隣に居るモスオルフェノクは、事の成り行きを傍観していた。自分には関係のことが無いように……

「……………」

「おい、アンタ。何で黙っているんだ！！アンタに関係していることだぞ！！！！」

苛立ちの声を上げるようにスカル魔はオルフェノクを責めるように言った。それでもオルフェノクは沈黙を続けている……………

「おいつ！！！！！！」

「まあ、彼自身は喋るのが得意ではありません。そのようにして、責め立ててるの、余計な溝を生むだけですよ……………」

「……………」

モスオルフェノクは合いも変わらずに沈黙している。というよりは、喋れないかもしれない。スカル魔はそんな事を考えた。

「護衛の理由ですが、彼を”悪”とみなし、手当たり次第に殺す野蛮なものから護ってほしいのですよ。同じ異形のものとして手を差

し伸べるのは当然のことでしょう」

穏やかな口調でダンデムは語る。目深に被ったフードのために表情はまったくわからないのだが……

「報酬はもちろん、出しますよ。あなたの胸にあるそれを直す事だつて……」

スカル魔はその提案に激しく反応した。そして……

「このようにね……」

ダンデムの指先から緑色のレーザーのような光が放たれた。それは、スカル魔の強化細胞に新たな命を齎したのだった……

「報酬はだしました。やってくれますよね……」

言葉を返すことなく、スカル魔は頷いた。

二人が居なくなっただけのときにダンデムの背後に三神官達が現れた……

「ダロム、バラオム、ビシユム……私を頼りにきたのか……」

「だ、大神官長様……それは……」

バラオムが声を荒げるが、ダンデムは特に気にすることなく、

「大丈夫だ。奴を倒すのは、創世王様から言われている。それを行いために私に言ってくることは場違いではない……」

「はぁ…見苦しいところをみせてもうしわけありません」

バラオムは、頭をたれて自身の非礼をわびるのだった…

「それで、大神官長様は何を行っているのですか？」

ビシユムがたずねてきた。彼女の言っていることは、あのスカル魔とモスオルフェノクのことであろう…

「ジオ・フロント”に届く荷から目を逸らすためだ」

「それは…まさか”アダム”ですか？」

ビシユムは、創世王が望む計画の一翼を担うその名を口に出した。

「そつだ…奴はいずれにせよ”ジオ・フロント”に乗り込んでくる。それに対する準備を整えなくてはならない…すでに目を向けているだろう。それを一瞬だけでも良い、目を逸らさせるのだ……」

ダンデムの言葉に三神官たちは、すでに行動を起こしていた大神官長ダンテムに対して感心するのであった……

「我らゴルゴムの者ではたちまち、怪しまれるからな……」

その頃、ドイツを桐原コンツェルン所属の飛行機が飛び立った……

ゴルゴム機甲大隊の戦闘ロボットと機械化大隊の怪人達が行きかう機内の奥に備え付けられた専用のシエルターにそれはあった……

機甲大隊 ストロープ

「よし、護衛は万全。予定通り第三東京市へ付き次第行動を開始するぞ」

ストロープは戦闘機の形と模し、その姿どおり戦闘機の機動性と能力を持つロボットである。

機械化大隊 サソリ機械人

こちらは、元ブラックサタンの幹部であったデッド・ライオンの直属の部下である。

「よし、それにしても楽しかったな。ゼーレから強奪するだけでよかったんだからよ……」

サソリ機械人は笑った。ストロープも何か含むところがあるのか笑うのであった……

「ああ、我らの計画のためにも必要なものはどんなことをしても手に入れなくてはならないのだからな」

ストローブ達が話している一方で、シエルターの中で、ベークライトで固められた奇怪な胎児が僅かに胎動しているのだった……

二人以外にもガスマスクを被った黒尽くめの戦闘員らしき者達が大勢居た……

第三東京市に一つの事件が起ころうとしていた。

第三東京市の郊外にある古びたアパートの一室……まもなく夜が近づこうとしていた時間を見計らうようにして男は、天井につるされた電球を照らした。

「……………」

室内四畳半ほどで万年床と食器や空になったカップ麺容器で一杯になった流し台があった……男は、見計らうようにして姿を変えた。

モスオルフェノクへと……

”オルフェノク”……人類の進化の一つと呼ばれる2004年辺りに猛威を振るった怪生物の事を言う……

命名したのは、当時ハイテク技術で経済界でその勢力を誇った”スマート・ブレイン社”。これは、あくまでも噂程度でしかないのだが、オルフェノク達の犯罪行為を支援していたというものがあつた

……
オルフェノク達は、死んだ人間が何らかの形で生き返り、驚異的な生命力と力を持つことが特徴としており、一説ではゾンビの一種と抑える人間もいる……

モスオルフェノクもそうだが、オルフェノク達にも様々だがその大半が力におぼれ、殺人行為に走り、力に吞まれそれを恐れるが余りに殺人を犯すものが多く存在する。

このモスオルフェノクは後者である……

「……………」

無言のままモスオルフェノクは、部屋を後にした。彼が住むアパートは、彼以外に誰も居ない。そもそもここは、廃墟である……

力を恐れるがあまりに彼は、廃墟に住み、たびたび殺人衝動に駆られて町へと繰り出すのだ……

幸いにも死体はすべて灰になってしまうことは彼にとって都合が良かった。だが、殺した人間が一度だけ自分と同じオルフェノクとなつて襲つてくることがあった。

そのときは大いに焦り、危うく殺されそうになったところをあの手黒い神官服のダンデムに助けられた。それからというもの、ノルマ三人という割合で殺しを命ぜられるようになった。理由はなく、唯殺せばいいと……

自分を狙う誰かがいると聞かされた。そのために今夜は用心棒をつ

けられた……

その前にも、同じオルフェノクでも人間に味方をするものが居たり、さらには、“ファイズ”、“カイザ”、“デルタ”なる存在がいて、自分のようなオルフェノクを脅かしていることがあった……

要するに自分を傷つけ、殺す脅威が存在するというわけだ。だが、見つからなければ良い。モスオルフェノクはそう思うのだった……
今までだったそうしてきたのだから……

ふと階段に目を向けるとそこには、黒いローブに大鎌を持った死神のような姿をしたスカル魔が立っていた……

「でよお…この辺に化け物がでるって話だぜ」

「はっ、何だよ、それっ。何処にでも一つはあるホラ話じゃねえの……」

二人の十代後半ほどの青年達が公園で車両乗り込み禁止を無視してバイクを止めていた。

行儀も良いとはいえない様である。

「何でもよ。知り合いの警官から聞いたんだけどよ。その化け物って”オルフェノク”とかいう奴らしいぜ」

「なんだそれっ？」

「しらねえの？セカンド・インパクトが落ち着いた頃に出てきた化け物だつて」

「くっだらねえ。どうせ、何処かの馬鹿が勝手に作ったホラだる絶対に……」

二人は話に花を咲かせているのだが、彼らは背後から近づくホラの中にしか出てこない怪物が接近してくることにきがつかなかった……

” ザッ…… ”

唐突に足音が背後から聞こえてきた。

「だれだ……!!?!?!?!」

「……!!?!?!?!」

二人が振り返った先には、グレー単色の蛾に似た半獣人のような異形が立っていたのだ。驚く二人を無視して、モスオルフェノクは羽ばたき強力な毒の霧を発生させて、あっという間に二人を灰にしてしまったのだった……

その様子を近くで目撃していたものが、

「うわああああっ……!!」

通りすがりの男のようだった。あまりの恐ろしさに逃げようと背を

向けたときだった。感覚がなくなったように自分の首が胴体から離れていくのを感じた……

最後に首だけと成った彼が見たのは、自分を見下ろす赤く染まった大鎌を構えた死神の姿だった……

「こついつところで詰めが甘いのだな……お前は……」

そう言つて、スカル魔はこつちに視線を投げかけるモスオルフェノクを見るのだった……

蛾の化け物とそれに付き従う死神による殺人は、これからである……

……

”ミレニウム・アミーゴ”

「何？この事件……」

ラミが新聞の片隅に描かれている記事に注目していた。内容は、一晩で十五人以上が行方不明に成ったことそれにあわせるように5人が殺されたというものである。

単なる誘拐目的であろうか？最近、疑り深くなってきている自分の思考に落胆を覚えることはないが……

「…ゴルゴムなのか？」

ラミは、自身が考え付く中でこのようなことを行う者達を脳裏に浮かべてみた。

このようなことを行うのは、彼ら以外に居ないと……………

店内に居るのは、本郷とラミの二人である。シンジは、買出しに出ているのでこの場にはいなかった。

本郷は、接客を行っていた……………

シンジは、本郷に言われた住所で買い物を終えて帰宅のための途に就いていた。

次期の首都候補となっているだけにこの町には人が多い。前に居た第二東京市にもそれなりに多かったが、ここには様々な野心的な匂いを持つ企業が拠点を構えており、せわしく動くそれらの社員らしいスーツ姿の人達を時折見かける。

他にも、桐原コンツェルン関連の企業やスマート・ブレイン社の新作商品の広告まで……………

人の波に乗るようにしてシンジは足を進めていく。そこへ…

「あ、あなたはっ！！！ね、ねえ、その人！！！」

突然背後から声を掛けられたのだった。振り返るとそこには…

「あなたは…確か、あの時の記者の人……」

シンジに声をかけたのは、OREジャーナルの新人記者 伊吹マヤであった。

「はい。そうです、あ、自己紹介遅れました。私、こういうものです」

そう言っって名刺をシンジに手渡したのだった。

「はあ…その伊吹さんがどうして、僕に……」

「この前の事件について知っていることがあつたら、教えてほしい事があるんです。それと、今回の事件にも何か知っていることがあつたら……」

どうやら、彼女は自分が何か知っていると思っっているようだった。

「はい、僕自身どう応えればいいのかわからないので、お答えできる範囲でよろしければ……」

ここでの立ち話もどうかと思うので、シンジはマヤを自身が勤める”ミレニウム・アミーゴ”に連れて行くことにするのだった。

第三東京市立 第一高校

「だから、そこで化け物どもをやっつけたんや」

得意げに語るトウジの許には多数の高校生達が集まっていた。どうやら、彼の体験談を聞きにきているのは、それなりに興味を引く何かを彼が持っているからであろう。

トウジの手元には、OREジャーナルが発行した新聞があり、自身の名前と証言が載っている。

「せやから、さらには……」

そんなトウジを遠めでアスカとヒカリが弁当を摘んでいた。

「あの鎧馬鹿も飽きないわね。これで何日目よ。同じ話をするのは……」

「そういうアスカだって、鈴原の話を毎日きいているじゃない」

「まあね。話自体は嫌いじゃないし……」

そう言ってアスカは、刃引きした手裏剣のようなものをもてあそび始めた。

「アスカのそれって、凄く大事なの？」

ヒカリがアスカが宝物のように扱うそれに対して疑問の声を上げた。

「うん。これは、アタシがすごく小さい頃に拾ったんだ。助けられたあの人の落し物だから……」

「へえ、そのひとつで、アスカの師匠とどっちがかっこいい？」

「比べられないわよ。どっちもかっこいいから……」

アスカの保護者である山路はとても魅力的な男である。本当ならアスリートとして第一線で活躍できる運動神経がありながらそれを自身の榮譽のためではなく困っている人達のために使うべく日々鍛えているところは、本当の意味でかっこよく思える男なのだ。

どんな小さなことでも一生懸命にやり、笑顔でそれを締めるところは特に……

それを思い出したのかアスカは、頬を染めてヒカリに言葉を返した。

取り留めなく学校はカリキュラムを終え、いつも通り放課となるのだった……

「あゝあ。今日は、アタシが買出しか。たまには、いいわよね」

帰宅部のアスカは、帰りにスーパーに寄るために帰る家から少しずれたコースを歩いていた。時刻は夕暮れに近い…

「こういう日だったかな。あの人であったのは……」

アスカは、あの日泣いていた自分の許へ風のように現れた男の姿を思い浮かべた。緑のマフラーを靡かせた赤い仮面をつけた忍者のようなバイク乗りの姿を……

何となく彼女は、路地に視線を向けた…

「?!?!?!?!?!」

そこには、黒いフードを被った骸骨が立っていた。骸骨は自分が見られていることに気がついていないのか、そのまま背を向けて奥へと引っ込んでしまった。

「なにっ?!?!?!?!?!あれッ?!?!?!?!」

アスカは急いでそれを追おうかと思ったが、まずは…

「師範から、専門家を呼んでからって言ったわよね。専門家ね……」

内心、ここが頼りになるかは微妙だと想いながらアスカは、警視庁特殊犯罪対策課G5の緊急コールを押すのだった。

G5に緊急コールが入った。それは、怪生物らしい何かが目撃されたようだった…

主任 時田シロウ

早速、目的地へ出動命令を下した……

「G5。出動！……！！！」

「了解！！！」

隊員たちは直立不動で言った後に、G5の足である特殊トレーラーに乗り込むのだった。

「いよいよですよ」

連絡要員のマユミが緊張した面持ちで言った。その間にカラルはG5を装着し、いつでも出動できる態勢に入るのだった。

「…最後にこれを巻いてと……」

カラルが装着したG5スーツは、少し灰色が掛かった黒を基調に白い虎縞模様を描いたものであり頭部は、バツタに似た複眼を持ったメットを装着している。

彼が首に巻いたのは、白いマフラーであった……

”ミレニウム・アミーゴ”

「すみませんね。曖昧なこと……」

「いいえ、十分ですよ。それだけでも聞けたましたら。それじゃあ、失礼します」

マヤからの質問が終わり、彼女を見送ったシンジであった。

「君も大変だな……」

本郷がシンジに労いの言葉を掛けた。誘拐事件についての市民としてのコメントとアンケートのようなものをシンジはマヤから受けたのだ。

一応、シンジは銀色の仮面をつけた男の目撃者ということになっている。

とりあえず、これで夕方の用事は済ませた。後は……シンジは、警察の特殊トレーラーが店の前を通り過ぎていくのを見た。

「何かあるかもしれない……」

彼の第六感が何かが起こる事を告げていた。自身のやらなければならぬ仕事に直結した……

「行つて来なさい」

本郷がシンジに言葉を掛けた。その言葉に応じるようにシンジは裏口から出て行つた。

ラムも行こうと思つたが、シンジが視線で留まるように伝えてきたので、このまま店内で待つことにした……

裏口から出て行つたシンジを物陰からマヤが見ていた。

「やっぱり、何か重要なことを知っているのね。今日こそは、大丈夫よ……」

そう言つて、ママチャリのペダルをこいでシンジを追跡するのだったが……

「な、なんで…追いつけないの……」

追跡して五キロのところまでスタミナ切れを起こしていた……

同時刻、アスカは先ほどの骸骨ことスカル魔を気づかれないように追っていた。忍者を自称するだけあってその動きはまるで猫科の動物を思わせるほどしなやかで無駄のないものであった。

(フフン。戸陰流忍術の達人のアタシに掛かったら、こんなお茶の子さいさいよ)

絶対にあの骸骨はろくでもない奴に違いない。アスカは、そう確信していた……………

骸骨が向かっているのは、廃線になった駅のようだった……………

(やっぱり、何か企んでいるのね。アンタの野望はアタシがくじいてやるわよ!!!)

まさか、追われていることに気がついていないスカル魔は……………

「あのオルフェノクめ。今度は、やくざ同士の争いに介入しやがって…余計な手間をとらせてくれるなよ」

そのころ、廃墟と化した駅では暴力団と思われる人間達による争いが始まっていたのだが…

「うわあああ!!!!!!」

一人、また一人とそこに突如として現れたモスオルフェノクの毒により消滅していく……………

「こ、こいつっ！?!?!?!」

拳銃を撃つのだが、まるで効果がなくモスオルフェノクは不思議そうにしていた……

「……………」

断末魔の叫びが木霊した……

しばらくしてから、スカル魔がそこへやってきた。

「詰めが甘いぞ」

スカル魔の足元には、首を切断された男の死体……………

間一髪を言わせぬようにそこへ一台のトレーラーが二体の異形に對峙するようにして現れた。

カメラからそれを見ていたマリイは、

「見たところ、オルフェノクと何かが一緒にいるようね」

「暴力団の抗争が現場で合ったようです。そこへ……」

「介入したのね……いいわ、渚。オルフェノクの殲滅は絶対よ」

<分かっているよ。それじゃあ、行くよ!!!>

トレーラーの後部ハッチが開き、サブマシンガンタイプの武器”スコーピオン”を構えたG5が戦場へと降り立った……

「ん？なんだ……」

スカル魔が何事かといぶかしげにしているところへ正面にG5の姿が現れたのだ。

「あの姿は……」

「……………」

スカル魔にとっては、忌まわしいあの戦士達の姿を模したG5はまさに胸糞の悪いものであった……

「君たちの犯罪行為は見逃せないよ」

牽制のためにG5は、モスオルフェノクとスカル魔に向かって発砲を始めた。

「ちっ!!」

スカル魔はこれを鎌の刃ですべて弾き、その間にG5に接近する。

「スコープオンでは牽制は、無理か…なら接近戦で…」

G5は武器を直ぐに接近戦用の高周波ブレード”デストロイアー”に持ち替えてスカル魔の鎌に対抗する。

高周波ブレードによる攻撃は当たればこそ凄まじい威力を発揮するが、スカル魔はその巧みな体術でこれを回避し、G5の装甲に火花を入れるようにして傷つけていく。

だが、この程度ではダメージを受けることはない。

「頑丈な奴だな!!!!!!」

スカル魔はG5の頑丈さに唸ったが、背後ではモスオルフェノクが活動を開始した。

「……………」

無言のままモスオルフェノクは、毒の霧をG5目掛けて放つのだった。

スカル魔は毒の威力を知っているので、直ぐに回避した。だが、G5は回避することが出来なかった……

「なんだい？この霧は、なに!!!!!!」

見れば、装甲が毒によって腐食されているのだった。このままでは、動きに支障が…

<第一装甲解除!!!!!!>

トレーラーからのオペレートにより装甲が解除される。急いで毒の霧から逃げるものの、解除された薄い装甲目掛けてスカル魔が襲ってきたのだ。

「くっ！！？！！」

薄いといっても防護服なので、切りつけられただけではダメージを負う事はないのだが、衝撃が襲ってくるために、無様に地面に伏すように転がってしまった。

高周波ブレードで対抗するが、再び毒の霧が襲ってくる。ブレードで振り払うようにするものの、腐食性の毒はG5の神経であるGFアイバーにまで浸透していく…

動きが鈍くなる間に、スカル魔は鎌の刃でG5のベルトにその凶器を突き立てる。

「しまった！！！！」

途端に動きが鈍くなる。パワーユニットがやられたのだ。これにより、G5は沈黙するしかなかった…

「なによ…あの化け物は…ああ、秘密兵器が…」

アスカは物陰で戦いの顛末を見ていた。自分が出ようと思ったが、あの毒に太刀打ちできる術などないことは彼女にもよく分かっていた。

どうするべきか……彼女がそう思っている時に覚えのある風がアスカの許を訪れた……

「後は僕に任せてくれないか……」

アスカが振り返り、最初に見たのは、優しげな色を浮かべた緑色の目だった

「……ZX？」

いや、彼女が知っているのは銀ではなく赤い頭部を持っていた男であり、目の前に立っているこの男ではない……

だが、彼が何者かはアスカも知っている……

「仮面ライダー……」

彼女の言葉に銀の戦士仮面ライダーシャドウは力強く頷いたのだ……

スカル魔の斬激に切り付けられたうえにモスオルフェノクの毒に装甲が解かされ、さらにはパワーユニットやられて行動不能に陥るG5。だが、諦めずに戦おうとするのだが…

「動けよ!!!動いてくれよ!!!!!!」

カラルは必死で呼びかける。だが、パワーユニットをやられたG5はもはや、重荷でしかない……

専用の武器もまたスーツに連動しているために許がやられてしまえば、後は使い物にならないのだ……

「くそっ!!!?!?!」

無理やり立とうとするものの、重くて一人では起き上がれない。その間に、モスオルフェノクの前に行くように死神を思わせる”スカル魔”が大鎌を掲げて迫ってくる。

「…忌々しい…奴らの姿に似た偽者め……」

「奴ら?」

スカル魔のいう奴らが気になったカラルだったがそういう場合にはなかった。大鎌は彼のくび許を狙って振られようとしたときだった……

カシャン…カッーン…カシャン…

という金属音が響いてきた。それは、視覚用カメラを失ったG5を

通じてトレーラーにも聞こえていた。

カラルには見えていた。自分たちを見下ろすように立っていた銀色の戦士の姿を……

スカル魔は、銀の装甲を纏った戦士の姿に覚えがあった……正確には、あの姿に似た戦士達の特徴に驚いていたのだ。

「か、仮面ライダー……」

「……………」

モスオルフェノクも驚いていた。そう仮面ライダーとは、自分たち異形にとっては恐ろしい存在であったからだ……

「き、聞いていないぞ!!! 敵が仮面ライダーだなんて!!!!!!!」

スカル魔は焦った。話が違うではないかというぐらいに……やはり、アイツは信用できなかったんだと叫びたかったが……

その間にも銀の戦士 仮面ライダー シヤドウは高台より跳び降り自分たちの正面に対峙するように立ったのだ。

「昨日の事件は、お前たちの仕業か……」

厳かな声でシヤドウは、二体の怪人たちの問う。怪人たちはシヤドウの声になお更惧れを感じ……

「うわあああ!!!!!!!」

最初に動いたのは、スカル魔だった。こいつから逃れたかったが、仮面ライダーに一度対峙してしまったら二度と逃れることは出来ないと知っているからだ……

大鎌を振り回しシャドウに切りかかるが、

「ムンツ！！トオオツ！！！！」

鎌の刃を両手で取り、シャドウはレッグトリガーを荒々しく鳴らしながらスカル魔に強烈な蹴りを食らわせたのだった。

その強さに怯えるようにして、モスオルフェノクが毒の霧を出すために羽を飛ばたかせようとした。

「ま、待て！！！俺を巻き込むな！！！！」

モスオルフェノクの直線状に居るスカル魔は焦ったように言うが、すでに事は遅かった……

放たれた毒がスカル魔の気管から肺に浸入し、せつかく直された報酬を無残に破壊したのだ。

「うわあああああ！！！！ツ……………」

強化細胞が破壊され、スカル魔の視界が暗転し激しい痛みが身体を走り、そして消滅していった……………

生への渴望を求める彼の想いを現すように白くやせ細った手を伸ばしながら死んでいく様は哀れとしか言いようがないものである……………

シャドウは、上手く回避できたが、毒の霧を少し吸い込んでしまったので、僅かに息苦しいものを感じた……

死んでいったスカル魔が恐ろしかったのか、モスオルフェノクはさらに毒の霧を発生させるべく動き出す。

「もうやめろ……戦うのをやめたいのなら、お前がこの場から去れ。そして、もう人を殺すのはやめるんだ」

「……………」

シャドウが羽を羽ばたかせるモスオルフェノクに忠告した。これは、最後通告である。

「……………デキナイ……………」

モスオルフェノクは、もう引き返せないところまで来ているのだ。力に目覚めてから、何度も殺人を犯してきた自身がそれをやめて生きるなどとうてい適えられないものなのだから……………

モスオルフェノクはシャドウ目掛けて毒の霧をはっせいさせる。シヤドウは高く飛翔することによってこれを回避した。

「……………毒の霧か……………」

かなり強い毒であることはシャドウ自身もよく分かっていた。だが、これを理由に奴を野放しにするわけにはいかなかった……

奴が何故、人を殺すのか。それは、奴自身が力を恐れているからだ……その力に痛みを覚え、そして痛みは膨れ上がり、暴力へと駆り

立てる……………」

「自分の中の力に脅かされて、それから逃げようとするのか……………」

シャドウは、構えを取りモスオルフェノクに近づいて、拳を連打する。あまりに早い動作だったためにモスオルフェノクは反応することが出来ずに倒れてしまった。

「それを吐き出すために痛みを他社に与える……………お前は、自分自身の力に心を飲み込まれて……………」

言い終わらないうちにモスオルフェノクはシャドウに爪を立てて襲ってきたが受け止められ、カウンターのパンチを顔面に食らってしまった。

「……………」

恨めしそうにモスオルフェノクはシャドウをにらみつけた。シャドウは、そんな視線を諸共しない強い視線をモスオルフェノクにぶつけた。

「正義のためとは絶対に言わない。お前がこれ以上、力に飲まれるのなら、僕がその力の痛みから解放しよう！！！！」

この異形は引き返せないところまで来ているのだ。いまさら全うに生きられるはずも無く、これからも犠牲を強いるであろう事は明らかであった。

ならこれ以上の犠牲を出さないためには、このモスオルフェノクを倒さなければならぬ……………」

シャドウは、飛び上がり必殺の蹴りをモスオルフェノクに対して繰り出したのだ。

「シャドウ・キック！！！！！！！！！！」

モスオルフェノクは、やっと開放してもらえると悟ったのか、両手を挙げてそれを受けたのだった。そして、青い炎となって灰になり消滅した……………

「……………」

シャドウは無言のまま、モスオルフェノクの成れの果てに背を向けて、G5のところへ歩いてきた。

「君は……………」

仮面越しに見える銀色の戦士にカラルは戸惑ったが

「手を貸そうか？」

そう言ってシャドウは、カラルに手を伸ばしてきたのだった。

「ああ、これを外すのを手伝ってくれるかい？」

シャドウの手を借り、カラルはG5スーツを脱ぐことが出来た……………

「仮面ライダーか……………」

カヲルは、夕闇の向こうに去っていくシャドウの姿を見ていた。そう、あの姿こそ自分がなりたかったものだったから……

誰よりも他者の悲しみを背負い、そして罪を背負ってでも他者を護るといふ己の道を行く戦士の姿は……

「次に会った時は、もっと強くなって君と肩を並べられるように頑張るから、待っていてくれよ……」

初戦はG5の勝利と記録に残るだろう。だが、この勝利を齎してくれたのはあの銀色の戦士が居てくれたことに他ならない……

だから、次こそは彼に一目置かれる戦士になりたいとカヲルは思ったのだ。その決意を表すかのように彼は拳を強く握ったのだ……

「鎧馬鹿のいつてた仮面ライダー　シャドウね。あれが……………」

アスカもまたシャドウを見送っていたのだ……

その夜、ゲヒルンにあるものが運び込まれた……それらを待つのは、
黒い大神官長ダンテム…大神官ダロム、バラオム、ビシユム達……
……

第五話「PRO

J E C T
G ・ 5
了

第五話「PROJECT G-5」（後書き）

色々やっちゃった感がありますが、これもこれでいいかなと思っ
てしまいました（笑）

タグに多重クロスオーバーとつけておいた方がよいでしょうか？

第六話「…世界の敵として…」(前書き)

こちらを更新しました。どうぞー！ー！

第六話「…世界の敵として…」

” ジオ・フロント ” 最奥部 ターミナル ドグマ

研究機関ゲヒルンが居を構えるこの地下空間の最奥部には、ヘブンス・ゲートと呼ばれている場所がある。

その一室に彼女は居た。さび付いた床、打ちつけのコンクリートの一室に……

蒼い髪を持ち、白磁器のように白い肌の少女が……

「うっ……」

肩を抱くようにして彼女は身体に走る痛みに呻いた。ざわざわと何かが自分ではない異物が動いているような感触には何時までたってもなれない。

床に膝を着き、倒れこむ。

「うっうっ……」

痛みはさらに激しくなる。目をつぶる彼女に四つの影が近づいてきた。

「黒き月の巫女」

「あなたは……」

少女が目を開けて視線を向けると足元に黒いローブを着込んだ人物が居るのを確認できた。

「そろそろ、受け入れたらどうですか？」 リリス”を……」

黒いローブの男 大神官長ダンテムは足元に倒れる少女に目深に被ったローブから冷たい視線を投げかける。

「ホホホホホホ。どうしたのですか」

呻く少女の姿が愉快なのか、ビシユムがダンテムの横から躍り出るように現れた。

他の大神官、ダロム、バラオムもまた冷たい視線を投げかけていたのだった。

「いい加減に受け入れたらどうだ？お前には、それを受け入れる義務がある」

ダロムが言葉をつむぐ。

「綾波レイという縄りをなくせ……」

彼女は、この言葉に嫌なものを感じた。彼らは、勝手にこの身体に埋め込んだこれを受け入れるという……

分からないものを受け入れることなんてできない。レイはそう思っ

た……

「まあいい。いずれにせよ、痛みを屈する。それまでの時間は、十分に……」

そうやってダンデムは、レイの幼さを残した貌に視線を寄せたのだ
った……

夜の大都会は、まさに地上の銀河であった。銀河には様々な建築物がある。”第三東京市 市議会”、”ビジネス街”など町全体を見渡せる巨大なハイテクビルを構える桐原コンツェルン本社の一室に彼らは居た。

「この度の共同戦線の成功を乾杯しようか」

杯を掲げるのは、桐原コンツェルン総帥 桐原剛三。またの名をゴ
ルゴムが有する”剣”を司る機甲大隊の大隊長 クールギン。

「ああ、それにしても機甲大隊の戦力は凄いな。おかげでこっちの方は随分とはかどった。さすがは世界を相手に戦う先駆だけはある」

同じく杯を掲げたのは、デッド・ライオン。クールギンと肩を並べる”目と耳”を司る機械化大隊の大隊長である。

「当然だろう。逆らうものには容赦なく死の制裁を与える。これが闇に居るものの掟である……」

「確かにそうだったな。”ゼーレ”から持ち出した”アダム”。ア
レを一体どうするのかね。創世王様は……」

クールギンの言葉にデッド・ライオンは同意した。彼自身も闇に生
きるものの掟を確りと弁えているのだから……

だが、それ以上に腑に落ちないこともある。あの”アダム”はどう
のようにして使うのだろうか？自分にはその辺りの事はよく分から
なかったのだ。

「我ら、敗残者には言う必要が無いと考えているのだろうか？大
神官長様は……」

皮肉をいうようにクールギンは頬を緩めて言った。心底愉快そうに
彼は笑った。

（それに、有象無象の輩を態々暴れさせるぐらいだからな…それほ
ど、気にされては困るもののようにだ……）

「何だ？お前は…まるで反感を持っているみたいじゃねえか」

「組織に属するものは、多かれ少なかれ上には不満を持つものだ。
それを表に出すほど私は愚かではない……」

「なるほどな。さすがは元ネロス帝国の？2だけの事はある……」

組織というものをよく理解しているクールギンにデッド・ライオン

は感心の言葉を示した。

「そういうお前こそ。元は大幹部であろう…いや…口が過ぎた」

クールギンは、大幹部といったところでデッド・ライオンの表情が僅かな怒りを含んだのを見て、それを詫びたのだった。

「いや、構わない。俺が組織崩壊のトリガーを引いたのは疑いのない真実だ。それに起こっても、何にもなるまい…」

デッド・ライオンは心のうちにある怒りを落ち着かせた。長年の経験がなせる業であろうか……

「そうか、だがこの酒の席を不味くするのは気が引ける。そうだな、こいつを空けようか」

クールギンはこの場を良くする為に、部屋の隅にある冷蔵庫からキヤビアを取り出した。

「キヤビアか。そいつは、今となっちゃ、金よりも貴重品だぜ」

デッド・ライオンは突然出てきた食材に舌鼓を打つのがあった。

「構わん。我らの勝利を祝う、ささやかな祝いの品だ…」

二人は夜が更けるまで宴に興じるのであった……

「それにしても、仮面ライダーが再び俺の敵になるとは、つくづくあいつ等とは縁があるんだな……」

デッド・ライオンは、今ゴルゴムが”異端の王”と呼んでいる銀色の戦士のことを話題に出した。

「仮面ライダーか…私自身は、実物を目にしたことはないが、それだけ凄まじいようだな。”力”は……」

クールギンも仮面ライダーについては、一応の理解はもっていた。だが、彼自身敵対したことはなかったので、詳しいことは言えない……

「確かに力もある。それ以上に奴らには”運”がある。何かが憑いているとしかいえないぐらいのな……」

「つまり、ピンポイントで組織の根本を狙っていくのか？」

「そんなところだ。奴らの存在自体が呪われているとしか思えん。一体の改造人間に強大な力を持つ組織が滅ぼされるのは、未だに信じれんほどの悪夢だ」

「…そうか。仮面ライダーではないが、第二次世界大戦の時に作られた一体のロボットに私が居た組織も滅ぼされた。あれほどの繁栄を詠っていた”帝国”が滅ぼされるなど笑い話にもなるまい……」

世界各国で活躍し、当時世界を包んでいた東西冷戦をあり、大国相手に謀略を張り巡らせていた組織が一年も持たぬうちに滅ぼされたことは、今考えてみても奇跡か神がかり的な何かがあったとしか思えないのだから……

「だが、俺たちは再び闇の世界の戦場に立っている。それは、かつての組織のためではないがな……」

デッド・ライオンは鉤爪を挑戦的に掲げて言った。

「そうだな。かつての帝王ゴッドネロスが思い描いた世界征服計画はもはや、ただの絵空事でしなくなってしまうた。それは、かつての組織が同じく掲げた”世界征服”、”人類抹殺”もそうだ。我々がこの世界の戦場に立つ意味は一つしかないな……」

クールギンは、瞳に凄まじい気迫を伴わせて言葉をつむぐ……

「ああ、俺たちに唯一残されたこの血塗られた生を全うするためだ……」

「その通りだ。世界の敵として、歩き出したのなら我々は、行き着く先まで行くのが道理なのだから……」

そう自分たちの生き方などすでに決定している。それをごまかしたり、償って全うに生きても空しいだけということを二人はよく理解していた。

「生きてやろうぜ。クールギン…そして、この世界に居る限り”悪”を貫こうか……」

「そうだな…だが、”悪”の敵は正義だけではない。同じ”悪”もまた、戦うべき相手なのだから……」

クールギンの脳裏に、ゴルゴム神殿の王座に付く魔王 創世王の姿が脳裏に浮かんだのだった……

「俺もその意見には賛成だ。味方だと思っていた奴が、他の”組織

”の使いだったということも十分にある「

「ほう、それなら、私もか？」

「おいよせ、酒が不味くなる。その話題はよそうな」

「また、口が過ぎたな……」

二人は、宴を時間の許す限り楽しむのであった……

その日、シンジ、本郷、ラミの二人はゲヒルンへと足を運んでいた。

ラミは銀髪、赤目が目立つので黒く染め、カラーコンタクトを入れて変装をしていた。

「本郷さん。こんな風に堂々と行くんですか？」

シンジ達はゲヒルン直行のエレベーターに乗っていた。

「ああ、忍び込むという手もあるが、まずは堂々と相手を見るのも手だ。それに今日は赤木ナオコ博士の公開討論がある。聞かない手はない……」

そうやって本郷は手の持っているチラシをシンジとラミに見せた。シンジが注目したのは、人口進化研究所ゲヒルンの項目である。

「確かここが、人口進化研究所…かつて、僕の両親がいた場所…」

「…両親がかい？今はどう過ごされている」

「ええ、何年前に母が死んだこととその後父も死んだそうです…」

「…」

「そうか…ご冥福を祈るよ」

「ありがとうございます」

本郷の言葉にシンジは頭を下げて礼を言った。かつて、自分を置いて死んでいった両親達……一度は恨んだ事もあったが、時と傍に居てくれた人達がそれを消してくれた。今の自分には、恩人である”彼”との約束を果たさなければならぬのだから……

かつて寂しさに泣いていた幼少期に現れて、家族というものところへ導いてくれた彼のためにも……

「……………」

どこか遠い目をするシンジをラミは黙ってみるしかなかった。

「G-5がここまで痛めつけられるなんて…もう少し慎重に行うべきだったわね」

マリィは、G5スーツの修理と強化を行いながらそう呟くのだった。

「そうかい？でも、それを打破できるように僕が…」

「根性で何とかなる問題じゃないわよ。肝心のスーツがやられたら何が残るっていうの？」

拳を顔面の前に掲げて覚悟めいたことを語るカヲルに対してマリィは呆れた口調で切り替えた。

「でも、スーツだけで勝敗が決まるわけじゃない」

「そうね。使う人間にも大なり小なり役目は大きいけど、戦う手段と目的がなければ何もできないわよ…」

ムツとした口調で言うカヲルに対してマリィは言っただった。

「……それだけじゃないってところを今度は、証明するよ」

そう言ってカヲルは席を立った。

「何処へ行くの？」

「トレーニングだよ。敵は何時来るか分からないからね……」

「そう……行ってらっしゃい」

振り返らずにマリィは手をぷらぷらとさせるのであった……

「なんだい……マリィ君……人間の武器は、G5だけじゃないんだよ……」

軽い愚痴を零すようにしてカヲルは、射撃訓練場へとむかうのだった……

「人間の進化は行き詰っています。これを意味するのは他でもありません。種が滅ぶことです」

壇上に立つナオコは、声高々に言った。ゲヒルンの討論会場には様々な顔ぶれがあり、その中にシンジ、ラミ、本郷の三人がいた。

「故に私達は、人工的に人類を進化させ、滅亡から救う研究が必要なのです。そして、それこそが人類の幸せであることは、間違いないでしょう」

ナオコの自信に満ちた言葉に会場が大きく沸いた。だが、シンジ、ラミ、本郷の表情は優れなかった……

「行き詰っているから、人工的に進化させる？望まない人達が、受け入れなかったらなんというつもりだろう…」

シンジは、人間全体の幸せというナオコの言葉の意味がどうしてもピンと来なかった。理由は、言うまでも無く、自身はナオコの言う人類の幸せなどあまり理解していないのだから……

ラムは無言の表情でナオコを睨みつけるようにしていた。どうやら、個人的な何かがあるようだった…

「あんなことをしていて、よくそんなことを…人類の幸せのためなら何をしても許されるのかしら？」

他の人達は、理解できない自分らと比べ物にならないほど賢いのだろうか？シンジとラムには、どうしても理解ができなかった…

「誰か、質問はありませんか…」

満足げな視線を会場にナオコは向けた。皆が尊敬の目で自分を見ている。実際、質問などという野暮なこととはしないだろうと思っていたが…

「質問というより、これは私、一個人の意見だが…」

本郷が手を上げて立ち上がったのだ。

「本当に人工的に進化させることが、人間にとって幸せなのだろうか？オルフェノク、アギトのように進化してしまったことを苦に絶望する者達もいる。それを分かっている、あなたはそれを言ってい

るのか」

人間の進化は行き詰っているかもしれない。だが、それは人間が生物として種として歩んできた道だ。

それをいまさら、滅ぶという事を恐れることはないと思つた。数多くの生物達が生まれ、繁栄しそして滅ぶのは定めである。これは、どの生物に対してもいえることなのだ。

人間だけが永遠を約束される事は絶対にありえない。

「そうですか、ですが進化には必ずしも犠牲があるものです。それは、種全体の取つての偉大な一歩なのです」

つまり、進化のためなら何を犠牲に居ようとかまわないのだろうか？

ナオコの発言に本郷は、

「確かに海から陸へ上がってきた生命全てが繁栄できた訳ではない。その犠牲が種としての第一歩であることは私も認めよう。だが、それは誰にも強要されたわけではなく、生命が自らの意思で上がってきたのだ。それを”進化”だ”人類の革新”のために、強制的に行うことは、人間の勝手な傲慢ではないのか？」

本郷の言葉にナオコは、激情に駆られた。崇高な使命を帯びたこの仕事に難癖をつけるような彼の発言に対して……

「あなたは、粗探しをしたいのですか！?!?!?!」

「いや、違う。私はただ、それだけが全てのように考えることは視野を狭くし、他の可能性がなくなるのではないかと言いたいただけだ……」

本郷は、少し暑くなったナオコをたしなめるように言った。

「その研究全てが間違っているとは、私は言わない。ただ、その理想を押し付けるのだけはやめてほしい。理想は語っても良いと思うが、押し付けたらもうそれは、理想ではなく単なる妄執でしかないと思う……」

ナオコは本郷が気に入らないのか厳しい視線を時折投げかけてきたが、彼は気にすることはなかった。

睨みつけてくるナオコに対して本郷は気にすることなく背を向けて行った。続くようにしてシンジとラミも続いたのだった……

(…進化か… 人類の行き詰った進化を促進するために人工的に行うか…… 何故、行き詰ったのかをゲヒルンは考えるということをしな
いのだろうか?)

進化とは、生命体が生き残るために新たな環境に進出していくと本郷は抑えていた。かつて魚類が両生類に進化したのは、海に両生類の先祖を脅かす存在が居た故にそれから逃れるための策だったのだ。そしてその時の海を支配していたものは滅びた……

つまり人間はもう行くべき場所まできたのだと思う。それゆえに進化する必要性を種全体が認識していないのだと……

一部が必要といい強制することは、かつて自分が戦ったあの悪行の

数々を行った組織となんら変りはないのだ……

そう、彼らもまた人類を支配する神気取りで、それを行っていたのだから……

「本郷さんは、ああは言っていますけど、ほんとの所は人工的な進化には反対なんですよね」

シンジが横から本郷に聞いた。本郷は頷き、

「ああ、進化するのなら必ずそのときが来るさ。人間に限らず、生き物にとっての全ては目の前のことでしかない……」

「目の前のことですか……」

「そういうことだ。人間に出来ることはせいぜい手の届く範囲のことだけだと思う」

シンジは、本郷の言葉に対して頷いた。確かに如何に大きな力を持っていても人間には変わらない。一つの力で全てが解決することなどないのだから……

「だから、どうしようもない事もあれば届かない想いもあるんですね……」

「ああ、そのたびに辛いと思うだろう…だが、それは誰しも同じことだ。人間である限り、皆がそうなのだから……」

本郷の言葉にシンジは頷く。自分は、壮大で崇高な経験などしたことは無いが、本郷の言うように人間に出来ることは手に届く範囲の

出来事ではないことは、間違いないと思うのだった…

「人類の幸せは、おそらく考える以上にちっぽけで、平凡なものだろうな…」

そんな本郷の後に続くようにして、ゲヒルンを後にする一同であった……

ゲヒルン本部の奥深くで、六分儀ゲンドウは冬月と共に作業を行っていた。

「いかな…まだまだ、足りん」

冬月は、異様なまでに減っていく数値をみて苛立った声で呟いた。サングラスをかけた男 六分儀ゲンドウは沈黙したままデータを見ている。

「生贄が必要だな……」

沈黙していたゲンドウがニヤリと笑っているのだった。どうやら、人には決して面と向かっていえるものではないことをやりたいらしい……

「また、ANGELを使うのか？」

「ああ、ANGELは、我々の唯一の戦力だ。今、使わないで何時、使うのだ？」

「そうか…ならば、慎重に事を運ばせなければならぬ……」リス”の培養に必要な生贄はかなりの数が必要だ」

冬月は、まるで実験動物を扱うような視線でモニターに移る光景に目をやった。そこには、白い肉の塊としか思えない何かによって捕食される人間の姿があった。

「六分儀、あの三神官様たちの計画だが、実際のところどうなのだろうか？」

「フン。あの小娘は所詮は、予備で、我々のための糧だ…態々、我々までもが化け物になる必要性は無い…」

ゲンドウは、忌々しそうに自分をコケにした連中によって付けられた傷口を見るのだった。

「そうか…それならば、我々の計画も急がねばならぬ……」

二人は作業に没頭する。そんな二人をじっと見る影があったことに誰も気がつかなかった……

「化け物になる必要性は無いか…臆病者どもめ…それで、よく暗黒組織の幹部を気取れたものだな……」

裏が赤地の黒いマントをなびかせたのは、アंकウであった……

「いずれにせよ。邪魔になるのなら、私が消してやる……」

その頃、ターミナルドグマに近い収容施設から一体の異形が解き放たれた……

ぬめりのある表面を持った蛇に似た頭部を持った烏賊に似た奇怪な生物が……生物がぐりぬけた門は、ANGEL?04……

カナルは、署内のトレーニングルームでひたすら汗を流していた。ウェイトトレーニングを主に、サンドバックへの打ち込みなど……

普段はアルカイクなスマイルを浮かべているのに、今ではまるで、体育会系の青年のような汗だけで凄まじい形相でトレーニングを行っているのだ。

「まだだ！！彼と肩を並べられるには、今のままではいけない！！」

サンドバックを、前回交戦した敵生体を重ねて彼は、打ち込む。自分の夢を適えるために……

彼は、トレーニングでも首に白いマフラーを巻いている。彼の脳裏に野獣の如く白い翼を持つ天使達に向かっていく自身に夢を与えて

くれたトモダチを自分自身に重ねた。

そして、スーツだけではないことを自分が証明しなければならないのだから……

ミレニアム・アミーゴに帰宅したシンジは、道着に着替えて第三東京市の中央公園まで走りこみ、鍛錬を行っていた。

「はああああ……」

深く息を吸い、静かに吐く事で腹に力を入れ、地に根を下ろすようにして全体重をかける。流れるように構えを取り、空を切るようにして拳を突き出し、大きく飛翔し、二段蹴りをした。

まさに一分の隙の無い完璧な動きであった。だが、シンジはこれで満足しないのか、再び別の構えを取り、視線に厳しい色を浮かべて再び拳を空に打ち込んだ。

「ムンっ！！！！トオオ！！！！」

気合を入れてシンジは鍛錬に身をいれ、それから三時間ほど行っただった……

「まだまだだな……」

今までの戦いよりも険しくなる戦いを考えるといくら鍛えてもまだまだ足りないものをシンジは感じるのだった。

「ん…」

ふと視線を近くの木に向けると、そこにはセミの幼虫が地中より木に登ってくる光景があるではないか……

「そうか…今では、当たり前だけど、僕がまだ物心が付いていない頃には、特定の季節でしか見る事ができなかったんだっけ…」

時は移り行くもの…そして、世界は変わっていく……自分自身の身もまた変った…心も……泣き虫だった頃の自分が見たら、どう思うだろう。

「進化か…本郷さんの言うように本当に必要な時、必要な人が手に出来るんだろうな……僕や蝉は、よく分からないものより今、目の前のことだけで精一杯なんだね」

穏やかな笑みを浮かべてシンジは、この場を後にした。人間の幸せというものは、この手に届く範囲にあるのだろう…

だからこそ、彼は目の前にある険しい道を行くために強くなるための鍛錬を行う……

それは、生き物も同じだ。シンジが背を向けた公園のベンチに三匹の子猫を連れた母猫が子を労わるようにして、その毛並みを舐めていた……

第三東京市の公道は昼夜を問わず、人、車が行き来している。まさに眠らない大都会営みを支えている土台と言える。

文明を発展させる原動力はやはり人の力であろう……そんな人達が行きかう町に、人外の存在の影が忍び寄る。それは、マンホールの扉の向こう側に感じる人々の存在を感じていた。

何処へ行っても、人間ばかり……まさに、それにとって都合な餌場だった……だが、目立っては元も子もない……

影は薄暗い下水道を移動する。その影が、近くでたむろする溝鼠達の上に差した……

「まったく。ここは、天国だぜ……へへっ……」

そこで声を上げるのは、薄汚い格好をした所謂ホームレスといわれる人種であった。近くに捨ててあるレストランの裏にある残飯を漁っているようだった。

近くのマンホールが音を立て、なり始めた…そのことにホームレスは気づいていない…そして、激しい音と共にそれは現れた。

「ああっ!!?!?!?!ば、化け物!!?!?!」

ホームレスが見たものは、蛇とも烏賊とも付かない異形の怪物であった…怪物は、光の鞭のようなものを二本ほどだしそれを、彼に向かわせ……

「や、やめろおおお!!?!?!」

賑やかな表通りとは違う寂れた裏で叫びを上げる彼の叫びを聞くものは誰一人として存在しなかった……

トレーニングを終えたカヨルは、自分のデスクに戻っていた。他にやる事が無いのか、彼は普段はあまり見ないG5のマニュアルに目を通していた。

スーツ無しでは、あの怪物たちに立ち向かうのは無理かもしれないならば、このスーツをもっと上手く使い、自身も強くなるうとカヲルは思うのだった。

そこへ…

「新しく、G5は規格が変更になったわ。目を通しておいて……」

読んでいたマニュアルの上に重ねられるようにして新たなマニュアルがカヲルの目の前に現れた。

「これは、どういうことだい？」

「見ての通りよ。変更点はG5が今までよりも速く運用が可能になったことかしら……」

カヲルに渡されたマニュアルには、ベルトのようなものが描かれた図面があった。コードネームは、”オルタ・リング”

「これは？」

「それはね、G5スーツがある特殊な状態で收容されているわ。発動させるキーワードは、”変身”よ」

マリイの言葉にカヲルは、直ぐに資料を机に放り出して、実物を見に行くべくオフィスから急ぎ足で行ったのだった……

「あなたの希望通りよ……」

マリイの言葉はカヲルに聞かれることは無かった。

シンジは訓練を終え、再び走りこみを行っていた。すでに時刻は夕暮れであり、学校帰りの学生、サラリーマンの姿が多く目に付いた。いつものように走りこんでいたシンジだったが、不意に何か足元を過ぎったのを気配を感じた……

「ん？なんだ……この気配は……」

鋭い五感が彼の真下に迷路のように都市全体に広がる下水道を行く異形の存在を察知していたのだ……

その異形が地上に上がるような動きを見せていることに……

「何か、あるな……」

そう言ってシンジは、ユーターンしてその存在を追うのだった。

シンジから数十メートル離れた先の人気の無い通りを、仲のよさそうな姉妹が歩いていった。

「おねえちゃん。あの鎧？着てる変な人の何処がいいの？」

「えっ！！？そ、それは、なんと言つか…ほっとけないのよ…アスカと同じで……」

雀斑にお下げの高校生 洞木ヒカリは、今日も東奔西走という勢いで風変わりな友人達をフォローした一日が脳裏に浮かんだのだった…
思い出しても泣けてくるものばかりである…最近のトウジは、ジヤージではなく鎧姿で、アスカはアスカで……

「アスカさんって、あの忍者の格好をしている人だね。コスプレなの？」

小学五年生の妹、コダマが何となく思うことを言ってみた。

「違うのよ。アスカは、そういうのじゃなくて、真剣なの…真剣すぎて、ちょっと周りが見えていないというか……」

ヒカリは、そうは言うものの苦笑してしまうものを感じるのは「愛嬌」というものである。

「へえ〜。そうなんだ…」

そんな風に会話をしている二人の背後にあるマンホールが不気味に揺れる。

「なにかしら？」

ヒカリは不意に背後に気配を感じ、振り返った。彼女の視線の先に

は、小刻みに揺れるマンホールがあつた。そして……

激しい音を立てて、それは二人の前に現れた。

「きゃあああああ……！！！！！！」

「お、おねえちゃんっ！！！！！！」

二人が見たのは、蛇とも烏賊とも付かぬ異形の怪物であつた。その怪物は、二人に鎌首を上げて、赤く輝く鞭をしならせるようにして向かわせたのだった……

二人は急いでこの場から逃げようとするが、鞭は二人をあっという間に拘束してしまう。

異形 シヤムシエルは二人を捕まえ、マンホールの中へ再び入ろうとするもの……

「貴様っ！！！！ゴルゴムか！！！！！！」

そこへ、道着を来た青年が鞭に飛び掛かった。そして、無理やり鞭を掴み、シヤムシエルの身体を持ち上げ、マンホールから無理やり引っ張り出して反対側に投げつけたのだった。

その衝撃により、鞭から二人が解放された。

「大丈夫？」

早速、二人に駆け寄り、シンジはその怪我の有無を尋ねた。

「ええ、大丈夫です。コダマは…」

「うん…大丈夫」

二人の返答に安心したシンジは、

「さあ、早くここから急いで逃げるんだ」

「は、はい…」

シンジに押されるようにして二人は急いで、この場から走り出したのだった。シャムシエルは恨めしそうにシンジを見る。

「こいつは…前の奴と同じか…なら…」

第三東京市の着き、リツコと会った夜に遭遇したあの目玉の怪物の同類だとシンジは思った。その証拠に、あの赤いコアらしきものがこの異形の胸に存在している。

「変・身！…！！」

シャムシエルと対峙し、シンジは構えを取り、仮面ライダーシャドウに変身した。

「とおっ…！！」

シャドウは、シャムシエルに向かって駆け出した。シャムシエルは、これに対抗するようにして光の鞭を叩きつけ、シャドウを攻撃する。

「むっ…」

鞭の威力を察したのか、シャドウは一旦、後退しシャムシエルの出方に注意するようにして構えを取った。

シャムシエルとシャドウ…二体の異形同士は一触即発の緊張状態のまま対峙する。

だが、それは直ぐに破られた。シャムシエルが攻撃を仕掛けたのだから……

「アーム・トリガー!!!!!!」

肘から飛び出したアーム・トリガーが光の鞭を防ぐ。だが、敵の攻撃の方が凄まじいのかアーム・トリガーが悲鳴を上げた。

「一瞬だけでもいい…だから、トオオツ!!!!!!」

シャドウは、シャムシエルとの距離をつめるようにして飛翔し、そのまま強烈な二段蹴りを蛇に似た三角形の頭部に食らわせたのだ。

強烈な蹴りにシャムシエルは、近くの壁に叩きつけられたが、直ぐにシャドウから離れるべく、行動を開始した。

近くにあった二本の電柱を鞭で叩き落したのだ。

「なにっ!!!くっ!!!!!!」

勢い良く倒れこんでくる電柱と切れた電線から飛び出す火花から身を護るシャドウであった。その隙にシャムシエルは、自身の逃げ道

である下水道へと再び姿をくりましたのだった。

「しまったっ！！！！逃がしたか！！！！」

シャドウは直ぐに、全感覚をフルにしてシャムシエルの行方を追った。そして、ここより離れた自然公園の方角へ向かっていることを察したのだった……

シャドウから逃げ出したシャムシエルは、下水道を進み、近くのコンクリートの壁を砕き地面をまるでモグラのように突き進んだ。

そして、再び地上へと現れた。目的は、人間の捕獲……邪魔が入ったぐらいで中断してはならないのだから……

この見通しが甘いことに気づかれるとき、シャムシエルは悔いを残す最後を迎えることは間違いないであろう……

シャムシエルが地上に現れたのを物陰で見っていた人が居り、さっそく警視庁のG5にコールが掛けられたのだった……

G5の本部にて、一般市民からの緊急コールが掛かった。

「第三東京市の自然公園にて、謎の生命体発見。形状は、未確認生命体、アンノウン、オルフェノクとは一致せず……おそらくは、新種です！！！！」

マユミが報告する。その間にカヲルは早速、新装備である”オルタリング”と呼ばれるベルトを腰に装着させた。

「よしっ、行って来るよ」

主任である時田は、現在、不在なのでオペレーション席に着くマリイに軽く会釈をして専用のマシン”ガード・チェイサー MK2”に乗り出動するのだった。

その頃、赤茶けた色をしたバツタを模したバイクに乗った銀色の戦士が走っていた。

向かう先は、第三東京市の中央に位置する自然公園である。

「ひ、ひいいいいいっ！……！」

シヤムシエルは、ちょうど、近くに居たホームレスを襲っているところだった…

「待てっ！……！」

カヲルは、両者の間にガードチエイサーを割り込ませるようにして、異形シヤムシエルの前に対峙した。

「こいつは……天使か……！」

カヲルは、専用のマシンから降りつつ自然公園に現れたその異形シヤムシエルに視線を向け…

「変身……！」

新たにG5に備え付けられた装備、”オルタ・リング”により、カヲルは一瞬にしてG5ツールを身に付けた。

牽制用の武装スコープオンをシヤムシエルに向け、攻撃を開始する。その間にホームレスは逃げ出した。

スコープオンから発砲される弾頭をシヤムシエルは全て、弾き落とすように鞭で叩き落とす。

光の鞭の仕事は圧倒的に速く、弾頭を全て処理するとG5本体目掛けて矛先を向かわせたのだ。

「凄い速さだ！！！！」

迫る鞭を回避し、G5はシャムシエルに近づくものの追撃する鞭から逃れられずに火花を散らして地面に倒れこんでしまった。

「ちっ！！？！」

G5は直ぐに、武装をスコープオンからグレネードガンに変えて、シャムシエル目掛けて発砲した。

発射された炸裂弾により、シャムシエルの表面に黒煙と炎が盛大に花を開かせるようにして弾けた。

「ダメージは…受けていない！！！」

G5のセンサーがシャムシエルの表面を瞬時に分析し、その状態がまったく異常が無いことに軽く舌打をするしかなかった。

シャムシエルは、G5に反撃として鞭を高速で突き立て、向かわせた。

「デストロイアー！！！！！」

直ぐにツールを接近戦用のものに変えて、迫る鞭を払うようにして防御に徹した。

小ざかしいG5に業を煮やしたのか、シャムシエルは、攻撃させている鞭のうち的一本を地中にもぐらせた。

「あれっ？もう一本はどこへいった」

攻撃の手が少しだけゆるくなった事に疑問の声を上げた時、地中から光の鞭がデストロイヤーに刃の鏢元を切り裂いたのだ…

「しまった！…うわ！…！」

防御を失ったG5は、正面から攻撃をまともに受けてしまい、後方へと吹き飛ばされてしまったのだった。

「くううううう…！！！！！」

直ぐに敵の正面に向き合うように態勢を整えようとするものの、敵の攻撃の方が異様に早く反撃すらままならずにやられてしまう絶対絶命の危機に陥ってしまった。

そう、二本の光の鞭はまっすぐ自分の首下に向けられていたのだから……

だが、運命はG5を見捨てることは無かった。

「トオツ！！！シャドウ・チョップ！！！！！」

シヤムシエルとG5の間に割って入るようにして、銀色の戦士が緑色の光を放った手を刃として、光の鞭を切断するのだった。

鞭を切られたことに、シヤムシエルは僅かに後退した。どうやら、いきなり現れた乱入者に対して警戒したようである。

「仮面ライダー・シャドウ！！！！！」

挑戦的に腕をシヤムシエルに向けて、シヤドウは構えを取った。

「仮面ライダー……シヤドウ……」

G5は、自分の前に立つ男に向かって復唱するようにして呟いた。

そしてシヤドウは、その跳躍力を持ってシヤムシエルの正面にたち、攻撃を開始する。

拳がシヤムシエルの腹にヒットし、その体が拳の威力により大きく揺れ、そして凄まじいとび蹴りが襲う。

シヤムシエルは、これを回避すべく光の鞭を発生させて、シヤドウを追い払うようにして鞭を振るった。

「くっ…速い!!!!!!」

しなる鞭を回避しつつも、構えを解くことなく攻撃の機会を掴むべく、暗いつくようにしてシヤドウはシヤムシエルと対峙する。

だが、シヤムシエルの鞭は、そんなシヤドウを突き放すように恐ろしいほどのスピードで振るわれた。

「くっ!!!!?!」

森林地帯へ逃げ込むようにしてシヤドウはそれを避ける。軌道上にあった木々が真っ二つに切り裂かれ、地面に振動を響かせながら落ちていく……

「切れ味だけは、凄まじいな……」

シャドウが敵の恐るべき力に、唸る間にもシャムシエルは追撃の手を緩めることなく鞭の長さをさらに延長させ、鞭をまるで意思を持つ蛇のようにシャドウへと向かわせる。

「来たか!!、なに!!?!」

迫り来る気配に構えを取ったシャドウを不意に足元から光の鞭が高速でシャドウの銀の強化リプラスフォームを傷つけ、火花が散った。

「うおっ!!!うっっ……」

シャドウは間接部分を狙うようにして襲ってくる鞭から逃れるようにして高く飛翔する。だが、柔軟性を持つその鞭は、飛翔したシャドウに瞬く間に追いつき再び、彼の身体を傷つけた。

傷つけられバランスを崩したシャドウは地面に激突した。そこへ、シャムシエルはシャドウの首を切り落とさんとすべく鞭を振り下ろさせるが、シャドウはこれを回避する。

(なんて、攻撃だ…あいつほどじゃないにしろ、厄介なことには、変わらないか……)

肩のリプラスフォームの切り傷から煙が出てくるのを感じつつ、シャドウは遙か遠くに居るシャムシエルに視線を向ける。

自分が先ほど転がった場所には、まっすぐと着きたてられた光の鞭があった……

鞭による攻撃は異様なほど強く、早い。本体自体はあまり移動していない。どうやら、奴はその分動作がのろいのかもかもしれない……

それでも人間のそれよりの速いのは明確であろう。並みの改造人間には遥かに劣る……あくまでも彼、シャドウの主観によるものであるが……

二本の鞭をシャドウに向け、シャムシエルは再び襲い掛かる。だが、すでにシャドウの心は決まっていた。

レッグトリガーを鳴らし、一気にシャムシエル目掛けて駆け出したのだった。

追撃すべくシャドウの後方から二本の鞭が向かってくるが、これを打開する策をシャドウは持っていた……

「蝗龍！！！！！」

シャドウの緑色のマクロアイが光り、その呼びかけに応えるようにして赤茶けたボディーを持った蝗のフォルムを持ったバイクがシャムシエルに向かっていく……

頭部にあるクラッシャー荒々しく鳴らし、シャムシエルの横へ突撃したのだ。

この攻撃によりシャムシエルは、不意をつかれてしまった。気がそれてしまったのか、鞭が一瞬だけ止まってしまった。

「今だ！！！！！」

シャドウは好機を見出したのか、一気に距離を詰め、シラムシエルの蛇に似た頭部に思いっきり拳をたたきつけた。

声にもならない叫びを上げてシラムシエルはダメージを負う。怒り狂うようにして、鞭をシャドウの背後から一直線に立て向かわせたのだが……

「悪いけど、無駄な足掻きは良したほうがいいよ。見苦しい……」

戦いの成り行きを見守っていたG5は、グレネードガンをシラムシエルの鞭に向かって発砲したのだ。炸裂弾が派手に爆発し、鞭の進行を止めた。

(これで、彼は奴に止めをさせる……)

「ありがとう……」

シャドウは、援護をしてくれたG5に感謝した。そして、一気に決着を付けるべく、

「トオツ!!!!!!シャドウ・パンチ!!!!!!」

拳に淡い緑色の光りを纏わせて、シラムシエルの右側の鞭を発生させている器官を粉碎した。粉碎されたことにより、シラムシエルはシャドウから逃れるように後退しようとするのだが、これを逃がすほどシャドウは甘くは無かった……

力を込めた構えを取り、体内のキングストーンを光らせ、シャドウは大きく飛翔する。

「シャドウ!!! キック!!!!!!」

緑色の鏝と化し、シャドウはシラムシエルのコア目掛けて一気に突っ込み、それを粉碎した。

シャドウのけりにより、コアを碎かれながら吹き飛ばされたシラムシエルは、十字型の光りを放ちながら爆発し、消えたのだった……

……

「やったっ!!!」

G5ことカラルは、声を上げて言った。背を向けていたシャドウがカラルに向かい合うように振り返った……

「ありがとう、あなたのおかげで助かりました」

シャドウは、G5に歩み寄り、握手を求めた。その行為にG5は、

「君がいなければ、アレには勝てなかったよ」

シラムシエルとの戦いに勝利したシャドウ、そしてG5は互いの存在を認め合うかのように強く握手をしたのだった……

……

”心が眩く…戦う事に嫌気が差した自分にはもうどこにも居場所はない…”

その声は、かつて自分に全てを教えてくれた師匠の痛みの声だった…

”待ってくれ。あなたは、紛れも無く真の戦士だった!!!”

暗い意識が覚醒していく…そして、見慣れた鋼鉄の天井が視界に大きく映し出された…

「俺は…生きているのか？」

そして見慣れた灰色の手を見る。彼の名はゴチャック。機甲大隊の中で最も格闘術に優れた戦闘ロボットである…

芦の湖の岸辺で仮面ライダーシャドウと激闘を繰り広げた強豪だった…

「奴に倒されたはず…そうか、お前が…」

上半身を起こし、右側に佇む自身よりも大柄なロボット　バルザックに視線を向けた。

「そつだ、俺の独断だが…」

「そうか、悪いな…」

ゴチャックは一言応えるとベッドの左側から降り、バルザックに背を向けた。

「これから、どうするつもりだ？ゴチャック…」

「決まっている。戦闘ロボットの俺が戦うこと以外に何ができる…」
バルザックと対峙するようにゴチャックは振り返る。

「俺のやるべきことは、もう一度仮面ライダー シヤドウと戦うことだけだ」

拳を力強く握りながら掲げてゴチャックは、敵 仮面ライダー シヤドウとの戦いに闘志の炎を熱く燃え上がらせるのだった……

第六話「…世界の敵として…」了

第六話「…世界の敵として…」(後書き)

第七話「黒き月の巫女」(前書き)

こちらを投稿します。どうぞ……!!

前に書き溜めていたので連続投稿です。はい……

第七話「黒き月の巫女」

第三東京市 警視庁 G-5

「それで、仮面ライダー シャドウと握手をしたわけ？」

「そうだよ、マリイ君」

マリイの質問にカヲルは、アルカイツクスマイルを浮かべて応えた。彼の顔にはこれまでにない充実したものが浮かんでいた。

「つまり、彼は私達側の味方なのね…これだけは、間違いないと考えていいのね」

「そうだよ。仮面ライダーは、人類の味方で”トモダチ”さ…」

カヲルは少年のように輝く笑顔で言うのだった……

彼の脳裏に銀の戦士が自分を認めてくれたかのように握手を求めてくる光景があつた……

「人類の味方ね…」

マリイは、G-5が扱う警視庁 X白書に記録されている未確認生命体第四号、アギト、ギルスと同じものと判断した。

だが、X白書には”仮面ライダー”と名乗りながら、犯罪に手を貸

す存在も記載されている。これは、”謎の失踪事件”の頃に目撃されたものであった……

「マリイ君。君は、彼を疑うって言うのかい？」

疑心暗鬼なマリイの態度にカヲルは少しだけ声色に怒気を強めた。

「もう少し、判断の材料が欲しいだけよ…それだけだから…」

マリイは特に悪びれもせず報告書にサインをし、そのまま席を立って出て行くのだった。

「理屈なんかよりも実際に会ってみれば、分かるんだ……」

一人、オフィスでカヲルは強く拳を握って言った。

カヲルと分かれたマリイは…

「仮面ライダー、最初に噂されたのは1971年から…何故、彼は人類を護ろうとしたのかしら？」

マリイは、警視庁のビルから見える第三東京市の夜景を眼下にしなから、呟いた……

その夜、ラミは不思議な夢を見た……

” ANGRRL?05より、コアを抽出…培養実験を……”

手術台で拘束具を付けられた彼女は、空ろな目で施設を行き来する職員達を見ていた。まるで、自分を道具か実験動物のように扱う彼らには、怒りを通り越し、呆れるしかなかった。もう何かに怒る気力さえ失われていたのだから……

サングラスをかけた髭面の男と老紳士、紫の口紅を引いた女性科学者がなにやら話し合っている。だが、上の空のラミの耳には会話の内容は入っていない……

いつまで続くか分からない曖昧な時間の中…ラミは少女に出会った。

少女は、半透明の筒の中に入れられ、凄まじい形相で苦しんでいた

……

” ああああああああああつ！！！！！！！！”

それを白衣の研究員達は実験動物を見るかのように冷徹に観察している。

少女の目が、ラミに向けられた。その目は、

” た、助けて…だれか……レイを助けてよオっ！！！！”

と焦げ茶色の目に毛細血管のような触手が走り、赤いルビーのよう

な目に代わって言った……

” リリスの遺伝子の結合は中々のものだな…… ”

” ああ…これが成功すれば、あの敗残者の軍団にでかい顔をさせなくて済むな…… ”

二人の男達は、嫌な笑みを浮かべて応えるのだった。ラミは、助けようと思った。だが、力を抜かれた自分に何が出来る……

(だれでもいい…この状況を、あの娘を助けられる誰かがいれば……)

その数日後、彼女は施設を脱走し銀色の戦士に出会うのだった……
重い瞼が開かれ赤い目に数日前から見慣れた天井が映った

「……知っている天井。でも、あそこじゃない……」

ラミは、呟きながら額に掛かっている前髪を左サイドに寄せた……
時刻は、深夜の二時を少し過ぎた辺りであった……

深夜を過ぎた時間、シンジは、人通りの無くなった公道に出ていた……

「オレビスっ！！！！居るんだろ。出て来いっ！！！！」

どうやら、呼び出されたようであった。

「すでに来ている……」

シンジの声にあわせるようにしてオレビスの姿が闇の中から浮かび上がってきた。

黒い鱗のような皮膚と逞しい体躯に異様に青白い顔の双方に浮かぶ鋭い視線がシンジに向けられた。

「今日は決闘なのか？」

「ああ…そつだ。今回限りは邪魔者が色々と忙しく、奴らも暇が無いのだ…」

オレビスは、笑いながら剣と盾を構えた。呼応するようにしてシンジも構えを取った。

「さあ、早く変身して。俺と戦うのだ！！！！」

(一応、忠告も兼ねているのか…そのことは後で考えよう……)

シンジはオレビスの言葉が気になったが、今は目の前にいるこいつを何とかしなければならぬと思っ…

「変身っ！！！！」

構えを取り、銀の戦士仮面ライダーシャドウに変身した。

「いくぞ…仮面ライダー シャドウ」

オレビスは凄まじい突きシャドウに向かわせる。シャドウは、これをレッグトリガーを上手く使って逸らし、カウンターとしてオレビスの首目掛けて強烈な蹴りを浴びせるのだが、

「やらせんっ！…！」

これを盾で防ぎ、シャドウから距離を置くべく一旦後退する。シャドウは、オレビスを追撃しようかと思っただが、深追いをしては、逆にやられることも考慮し彼もまた後退するのだった。

「……………」

無言のままシャドウは、拳に力を込めて、戦闘用の構えを取りオレビスと対峙する……

「……………」

オレビスもまた無言のままシャドウと対峙する。互いに攻撃のタイミングを図るようにして、それぞれの視線をぶつける……

張り詰めた緊張感を最初に切ったのは、シャドウであった。

「トオッ！…！シャドウ・キック！…！」

「ムンっ！…！…！」

これを迎え撃つようにして、オレビスは盾と剣を交えて構える。シヤドウ・キックが凄まじい勢いで彼の眼前に迫る。

オレビスの盾に緑の閃光が走り砕け散る。だが、オレビスは…

「あああああああああああつ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

手元の盾が砕けることを恐れることなくシヤドウの銀色の強化リブラスフォームに剣を一太刀浴びせた。

「うわああつ!!!!!!!!!!!!!!」

オレビスの一閃により、シヤドウは後方へと吹き飛ばされた。

「俺の技の勝ちだつ!!!!!!!!!!!!!!」

その瞬間、オレビスの盾が音を立てて砕け落ち、彼の左腕にも衝撃が伝わった。

「ムツ…だが、このまま一気に行く!!!!!!!!!!!!!!」

オレビスは、アスファルトの上に膝をついているシヤドウ目掛けて駆け出し、彼のくび元目掛けて剣を振るおうとしたが…

「やらねっばなしじゃないよっ……………」

シヤドウは、アームトリガーで剣を防ぎ、拳をオレビスの腹に当てた。

「ムウウウウウ……」

衝撃を受けたオレビスはシャドウに視線を向ける。シャドウも同じく彼に視線を向けていた……

「どうやら、勝負は、また引き分けのようだな……」

「ああ、でもお前が優位だけどね」

二人は、言葉を言って離れた。シャドウは少し苦笑していた…オレビスも笑みで応じ……

「そうだな、気分がいい勝負だった。またの勝負、それまで腕を磨いておけ……」

そしてオレビスはマントを翻して去っていった……

「ああ、今度はあつといわせてやるから、お前も腕を磨いてくれよ……」

シャドウは拳を握り、緑の目に闘志の色を燃やすのだった……

しばらくして、変身を解いたシンジは、”ミレニウム・アミーゴ”

の裏口から帰宅した。

「今日は、随分と手痛くやられたようだね」

”ミレニウム・アミーゴ”に帰ったシンジを迎えたのは、本郷であった。

「ええ、ちよっと……」

シンジは苦笑しながら応えた。

「そうか…日を置かなくていいのかい？」

「何ですか？」

突然の本郷の言葉にシンジは疑問の声を上げた。

「ゲヒルンに乗り込みつもりなんだろ…」

「はい。敵もそうですが、僕のほうも予定通りに動ける身ではありませんから……」

シンジは本郷の言葉の意味を理解して言った。この人には何もかも見通されている……やっぱり、適わないな……

「シンジっ！！直ぐに、ゲヒルンへ！！！！」

二人の下へラミが息を荒くしてやってきた。どうやら、直ぐにでも行かなければならないという衝動に駆られているらしい。

「分かっているよ。夜が明けたら直ぐに行こう……」

シンジはそう言ってラミに応じた……………

第三東京市のマンションで伊吹マヤは、ベッドの上に横になり何かを考えるように目を細めた……………

少しだけ開いている扉からは、現在同居人となったりツコがシャワーを浴びている音がする……………

「…本当にこの町で、私達の知らない戦いがあるのかしら……………」

三日前……………

第三東京市国際空港……………

「先輩。今日は、どうしてまた、空港へ？」

伊吹マヤは数日前から自身の部屋に居候している赤木リツコに聞いた。

「ええ、あと少ししたら、私の同僚が来るわ。彼女と一緒に行かないといけないところがあるの……」

「へえ〜。どういふ仕事のですか？やっぱり、ゲヒルン関係の……」

マヤが特に指し触りの無い言葉を出すのだが、リッコの口からは思いもよらない言葉が帰ってきた。

「いいえ。科学者ではないわ…ICPOの捜査官よ…」

「あ、ICPOですかっ?!?!」

信じられないという声をマヤは上げた。

「声が大きいわよ。この話を出したのは、あなたにも協力してほしいからなの」

リッコは真剣な声でマヤに向かい、

「これから、アンリエッタが着たら話すんだけど…あなたはどうする?」

「はい…ですが、一つだけ聞かせて下さい。その捜査には、第三東京市に現れた銀色の戦士と関係があるのですか?」

マヤが自身が追い続けている銀の戦士のことについてリッコにたずねた。彼女の言葉にリッコは…

「ええ。そうよ、彼が関わっているわ。仮面ライダー シャドウが…」

リッコがそういったとき、ゲートを通るサングラスをかけたナチュラルブロンドヘアの美女が現れた。

「リッコ…久しぶりね……」

その女性は、サングラスを外し微笑みながら言った。彼女の名は、アンリエッタ・バーキン。

「ええ、あなたも。アンリエッタ……」

リッコもまた微笑んで応じるのだった。

一堂は空港のカフェに来ていた……

「まずは、あなたに真実を知る覚悟があるのか尋ねるわ。伊吹マヤ……」

アンリエッタは、マヤに対してこれ以上に無い真剣な眼差しを向けた。

「真実ですか……」

「ええ、リッコが言うのは貴方は仮面ライダーシャドウを追っているのね。彼を追う事は、貴方の今居る世界の常識が覆るほどの真実が存在するわ……」

アンリエッタの言葉には、引くなら今だけと聞こえる。おそらく、

リッコも自分から手を引いてくれることを願って彼女と引き合わせただのだろうかと勘ぐってしまう。

だが…

「知りたいです。ジャーナリストとしてとか、興味があるからじゃなくて…ただ、事件のことを一人でも知りたい人が居る限り、原因の究明を求めることが私が選んだ仕事だからです」

マヤは、真剣な眼差しを持ってアンリエッタとリッコに言った。二人は彼女の熱意に、

「いいわ。貴方ならきつと、真実をしっかりと伝えてくれるわ……」

アンリエッタは、真実を語り始めた……

「まず、この世界は様々な悪の手によって脅かされてきたわ。古くは、人類が生まれる前にまで遡る……」

彼女から語られるのは、決して歴史の表舞台にあらわれることの無い”真実の歴史”である……

第三東京市 ゲヒルン本部…

この日、ゲヒルンは慌しい喧騒にあった。まるで、嵐が来る前に逃げ出す獣達のように……

「一体。これは、どういうことなの？」

特に落ち着き無いのが、赤木ナオコである。上から言われた命令に加え、さらには期待していた娘が突然辞表を出してきたことだった。辞表を出した娘の行方は、未だに彼女はしらなかった……

「簡単なこと…奴に対しての対策だ…これは…」

彼女の言葉を待つようにしてクールギンが言葉を発した。銀の鎧とマントを身につけた姿である。

「だからってっ！！！！ここは、私達の担当だわ！！！勝手なことはしないでっ！！！！」

いきなり上がりこんできたクールギンに対してヒステリックに彼女は叫んだ。

「だからどうした。おまえ達は、頭こそいいかもしれんが、戦いに関しては素人だろう……」

「戦いぐらい…シユミレーションは完璧…」

ナオコが虚勢を張るようにして、自身たちの優位性をクールギンに示すもの…

「下らんな…絵空事で語るなど…もはや、問題外だ…」

クールギンは、ナオコの言葉をこれ以上に無い冷たい言葉で切り返した。二人のやり取りをゲンドウは、見守るが、彼自身はナオコに加勢するつもりはないようだった。

理由はいうまでもなく、クールギンに対して懼れを抱いているのだ。影でこそは、言いたい放題言っているのだが…

ゲヒルンのトップの癖に何も言わないゲンドウに対して、ナオコは内心自分勝手な怒りを抱くのであった。

「だからこそ、今回の必要なものの運搬のために我々が動いているのだ…奴が攻めてきた時、この黒き月、そのものが要塞と化すであろう…」

所長室から見える光景をクールギンは、視線を向けながら言った。そう、すでに地下空間、ジオ・フロントには機甲大隊の精鋭たちの配置が完了しているのだ…

「作戦の成功率は、常に高いもので無ければならん…不足の事態に対応できる臨機応変に動いて、目的を達成するのだ…」

クールギンがそういったとき、一体のロボットがやってきた。戦艦の司令塔を模した頭部を持った大柄なロボット ドランガーが。

「大隊長。WEAPON ロボット及びバトルロイド、ヨロイ軍団の配置と積荷の道筋は確保できました」

ドランガーは恭しくクールギンに頭をたれた。

「そうか、ご苦労だったな…そちらの戦力は？」

クールギンはドランガーに労いの言葉を掛けた後、ナオコとゲンドウにたずねた。

「……………ANGEL?07と08よ」

まるで親の敵を見るような目でナオコは言葉を返すのだった。

「足りんな…戦闘員を数十人ほど動員しろ。ANGELのフォロイとしてな……………」

「ANGELの戦闘能力なら、十分標的を倒すことは可能だわ…」
クールギンに噛み付くようにしてナオコは反論を述べる。あくまでも自分のやり方に口を挟むクールギンが嫌で仕方ないらしい…………

「それならば、我々は必要ないといいたいのだな。いいだろう…我々はおくまで、物資とここでの護衛に徹してやろう」

何か含んだような笑みを浮かべてクールギンはドランガーを引き連れて所長室から出て行くこととした…………

「施設内の護衛は、必要ないな…あくまでシミュレーションの範囲は、施設の外だからな…」

そう言ってクールギンは出て行くのだった。

(妙に頭のいい奴は、どうしても傲慢になりやすいな…知識があるからといって、人間的に最上位にあるというわけではないのにな…)

ナオコとゲンドウの顔を思い出してクールギンは内心、吐き捨てるように嘲笑うのであった……

”ジオ・フロント”のいたるところに配置された機甲大隊所属のヨロイと強化服で武装した一団があった。

機甲大隊 豪傑 チューボ……

戦国時代の日本の武将のようなヨロイと強化服を纏った男が居た。

「我ら機甲大隊の力を存分に発揮するのだ!!!!!!」

「「おおう!!!!!!」」

以下、ムキムキマン、フーフー・チュウが声を上げるのだった。鎧武者を思わせる外見をしたチューボと違い、この二人はまるで古代に居たスパルタ族のように凄まじい筋肉を持っていた…彼ら曰く、”肉体こそが究極の武器”である……

ラミの記憶を頼りにシンジは、ゲヒルンに通じる秘密の回廊を通っていた。高圧電流が流れる太いパイプが走る薄暗い通路を明りをつけることなく二人は進むが、シンジがもつ驚異的な視力により、真昼のように全てお見通しであった……

特に何の支障も無く二人は回廊を突き進んだ。時折、生暖かい空気が頬をなぞる。

「……………」

ラミは、この先へ進むたびに嫌なものが身体の奥からこみ上げてくるのを感じた。この奥にある大空洞には、彼女にとって嫌なものしかなかったのだから……………

「大丈夫？」

シンジがラミを気遣う言葉を掛けた。彼女の心情を察してのことである……

「大丈夫。貴方をあの娘のところまで案内するのが、私の役目だから……………」

あ のとき、同じ境遇にあったマトリエルと共に隙をついて脱出した。外に居るであろう、全てから開放してくれるものを求めて……………

「わかった。だけど、無理は身体に障るよ……………」

「分かっているわ。貴方には、言われたくないかもその台詞は……………」

「それは、参ったな」

シンジはラミの意地の悪い言葉に”からから”と笑い声を上げて応えるのだった。

二人の後を本郷が付けていた…

「私だって、陰謀を黙っていられる性質ではないのでね……もしものこともある……」

改造人間であるシンジの感覚に感知されないよう、慎重な足取りで本郷は進んだ。

「なるほど…敵も相応の準備をしているわけか…」

本郷は、この回廊を監視するものの気配に気がついていた……シンジ達がこの回廊へ入ったときから、改造人間を始めとした人間を越えた者達ですら感知することが困難な監視網が張られていたことを……

「これは、ゲヒルン、ゴルゴムの技術ではないな…おそらくは、別の組織の技術が……」

本郷が答えを出そうとしていたとき、不意に何者かの気配が…

「むっ…誰だっ！…！そこにいるのは！…！…！…！」

「フフフフフフ。この監視網に気がつくとは、さすがだな……」

現れたのは、銀の鎧とマントを身に着けた男であった。その男から

感じられるのは、剣のように鋭利な覇気と殺気……

「貴様はっ！……クールギン！……！！！」

「良く知っていたな。光栄だ、本郷猛に覚えてもらえるとは……」

クールギンは、警戒色を強める本郷に対して頭を下げた。彼なりの敬意の表れなのだろうか？

「この業界にいるものとして、貴様らのような”悪”の噂はよく耳にするのでな……お前は、死んだはずではなかったのか」

「ああ、そうなっているな。だが、死んだはずの人間が生きている現実、この世界では当たり前だ……」

本郷の言葉にクールギンは、人の噂などあてにならないといった口調で応えた。

「やはり本当だったようだな……この組織が他の”組織”の戦力を取りこんだという噂は……」

「色々都合があるのでな……いいビジネスにはなっている」

クールギンは本郷と言葉をこれ以上続けるつもりは無いのか、背を向けた。

「何処へ行く？貴様は、戦うために着たのではないのか？」

「依頼者とこつちとのトラブルは付き物なのだ……言われたこと以外は実行に移さない。それだけのことだ……」

そう言ってクールギンは回廊の奥へと去っていくのだった……

「トラブルか……」組織”の抱えている問題は、そうとう根が深いよ
うだ……」

本郷は、クールギンの言葉の意味に現在の組織が抱えている問題を
察するのであった。

本郷と別れたクールギンは、目の前に白いフードを被った三つの人
影を束ねる黒いフードの男が居るのを見た……

「大神官長さまと三神官様……何かありましたか？」

それらが何者であるのかを察してるようである。自分が所属してい
る組織の幹部達だ……

「クールギン。頼みたいことがあります。それも内密にことを運び
たいのですよ……」

目深に被った大神官長の表情は伺えないが、なにやら自分に何かを
させたいらしい……

「それは、ゲヒルンの本部に関することですか？大神官長様……」

「ええ、機械化大隊に命じてANGEL達は、全て運び出しました。後は、”黒き月の巫女”を残すだけです…」

大神官長 ダンデムの言葉にクールギンは、何か探るように目を細めた。

(おかしい。あの巫女は、創世王の言う約束の儀において重要な位置にあるはず。それを、何故……)

「貴方の思うことは、分かりますが、創世王様は、楽しみたいと仰せられておりました…それは……」

「そういうことですか…それならば……」

クールギンもダンデムの言葉を理解したようだった。そして、ゲヒルン本部前に陣取っていた機甲大隊に大きな動きが見られたのだ…
た……

ジオ・フロントについたシンジ達は、広大な森を進んでいた。地下空間に緑が一杯とは、奇妙な光景だとシンジは思った。

地下空間なら地獄を思わせるドロドロとした場所の方がしっくり来ると思う……

「ここは、人工的なものしかないわ…誰かの気を満足させるための箱庭よ」

ラムは、「ジオ・フロント」そのものに嫌悪感を抱いているのか表情を険しくしながら言った。

「箱庭か…確かにね…」

人工的な”ジオ・フロント”は、見た目こそは豊かな緑であるが、そこに住まう生物の息吹をまったく感じさせることは無かった…ここにあるのは、単なる箱庭でしかないのだ…人が人のために作り上げたものしか…

「……ラム……誰か居る……」

シンジは森の先に見えるピラミッドの形をした施設を歩きかう影を見た。その影達は、黒尽くめのガスマスクをした男達であった…

「あいつらは…人間じゃなさそうだ……」

シンジの感覚が、人間ではないものが放つ特有の気配を察したのだ。とはいっても、怪人でもないし、ロボットでもない……

何ともいえない微妙な気配……そうとしかいえないものだった……強さは、それほどでもない…自分と比べて……

「手荒いけど…やるしかなさそうだな……」

そう言っつてシンジは、慎重な足取りで施設へと歩みを進めたのだが

……

「行く前からか…」

「何？」

背後から自分を見る存在にシンジは気がついたのだ。うかつだった…ここまで接近を許すとは……シンジが振りかえるとそこには、

「お前達が侵入者だな…相手をしてやる」

戦国時代の武將を思わせる鎧を纏った男が逞しい筋肉を持つ二人の男を引き連れて立っていたのだった…

「いやあはあ~~~~女も居るぜ」

「ああ…美人だ…」

この二人に対してラミが表情を強張らせたのはいつまでもないだろう……

その頃、施設内では大きな動きが起こっていた。事を中心に居るの

は、ナオコ、ゲンドウ、冬月の三人とドランガーが一体、二人の護衛……

「これは、どうということなの！！！！！」

ナオコは、突然、施設内に入ってきた機甲大隊に対して抗議するようにつづらに言った。

「大隊長からのシフトの変更だ。これは、創世王様直属の大神官長様からの直々と聞いている」

施設の外での護衛に徹するはずだった機甲大隊が、いきなり施設内に入ってきたことは話を聞いていないナオコらにとって、あまりに突然すぎた。

ドランガーの口調に腹が煮えくり返るような思いの籠った目でナオコはドランガーを睨みつけるものの。相手は、ロボットなので特に効果は無かった。

「話は決まっている。外で争うよりも中で争う方が主となる可能性のほうが大きいのでな……」

ドランガーは、結論を述べて一堂を無理やり納得させるのだった……

納得がいかないナオコとゲンドウを傍目に冬月は……

(急に物を言ってくるとは、こっちの都合はお構いなしか……その原因が、あのユイ君の息子というわけか……)

冬月の脳裏にかつて、この施設で働いた女科学者の姿が浮かぶ。創

世王の逆鱗はおるか、あの大神官達にさえ毛嫌いされて殺された……

(ユイ君も厄介な子供を残してくれたな……親が親なら、子も子というわけといたいところだが……)

彼は、かつてこの施設に居た女科学者とその息子について少しだけ考えてみた。あの女は、人類の進化を詠い、悪の所業すら善に無理やり変えようという美辞麗句を並び立てただけに、真なる”悪”にとつては、嫌なものだったと思う。

それに比べると、現在仮面ライダーを名乗っているあの青年は、少なくともゴルゴム限定に戦い、その力をふるっている……

(だが、どちらも組織に迷惑をかけていることだけは確かだな……)

そこへ、警報が鳴る。

「侵入者が早速来たようだ…三人はこのドランガーと共に来てもらおうか…これも指示なのだ」

そういうと、ドランガーの両脇に居た赤と青のそれぞれの鎧を来た二人が進み出た……

時を同じくして、クールギンはターミナルドグマへ直結するエレベーターの中にいた。

「余興か…創世王は、楽しみのために、ここまでやるのか……」

クールギンは、半ば呆れ、もう半分は底の知れない魔王に対しての惧れの気持ちを呟くのだった……

ターミナル・ドグマ 収容施設……

今や、囚人が居なくなつたこの施設は不気味な静けさに包まれていた。ここに一人の男がいた。

「命令に従つてこいつだけを、残していくとは……何を考えているのかね……」

呆れ口調に物をいうのは、デッド・ライオン。腑に落ちないことがあるのか、表情は硬い……

「余興ではないが、自分の出世の邪魔だからといって仲間を貶めて、余計な敵を作つた野郎と同じ末路だけは勘弁して欲しいな……」

そのさらに奥の施設……

そこには、このゲヒルンで開発されたあるものが収容されている。それは単眼の一つ目小僧のようなフォルムを持った黄色のヘルメットと戦闘服のようなものであった。

脇には、青く輝く炎と紫の炎が揺らめいていた……

シンジはラミを背後に庇いながら、チューボを相手に戦っていた。チューボは、刀を振りかざして襲い掛かってくるものの太刀筋は

つきり言つて丸分かりである。

彼、碇シンジにとって……チューボの刀を白刃取りで取り、カウンターで蹴りを加える。

「トオツ！！！」

「ぐうっ、やるな！！！！」

チューボは、怯むものの果敢に向かってくる。同時にムキムキマン、フーフー・チュウがシンジのサイドから迫ってくる。

「いやあああはあああ~~~~！！！！！！！！！！」

「うぐわあああああ！！！！！！！！！！」

奇声に近い叫びを上げてくる二人に対してシンジは、軽く往なす様にして地に叩き伏せた。体躯の良い逞しい筋肉を持った男達を少し痩せ気味のシンジが叩き伏せる姿は、カンフー映画さながらのものである。

「ラミ、このまま行くよ！！！！」

「分かっているわ！！！！」

ラミの手を引いてシンジは、森を出てゲヒルン本部施設前に躍り出た。背後では、チューボ達の声が聞こえてきたが、無視するのだった……

そこにいた黒尽くめの兵士達は、一斉に飛び出した

「あの女の息子…親子揃って、迷惑ものね……まあいいわ…ANG
EL?07と?08をもつてすれば……」

ナオコがニヤリと笑うと同時に施設の中からヤジロベエに似た奇怪なフォルムを持った怪物が歩み出た……

胸部にある対極図に似た模様をした仮面を怪しく光らせて……

ラミは、近づいてくる気配に誰よりも早く気がついた。

「イスラフェル…シンジ!!!!!!」

彼女が彼の名を叫んだと同時に、激しい衝撃波が一堂を襲ってきた。この攻撃の危険性を察したシンジは、ラミを抱えて高く飛翔する。

逃げ遅れた戦闘員達は、巻き込まれ焼かれていくのだった……

「何て奴だ…仲間まで巻き添えにするなんて……」

シンジはそう言って着地し、死体を踏みつけて前に立つ異形 イスラフェルと向かい合う……

「あいつは……」

「アレは、私と同じ使者……でも、今は違う……唯の怪物でしかないわ……」

ラミは悲しそうにイスラフェルを見る。最後にイスラフェルを見たのは……コアに細工を施されているところだった……

白いフードを着た三人組によって……

「ゴルゴムか……ここまで、やるとは……許さん!!!!!!」

ラミの悲しみを汲むと共に自分達の野望のためにあらゆるものを犠牲とするゴルゴムに対して激しい怒りを瞳に宿らせ、変身する……

「変身っ!!!!!!」

体内のキングストーンが鼓動し、シンジは銀の戦士 仮面ライダー
シャドウへと変るのだ……

そして、シャドウはイスラフェルに向かって腕を上げるのだった。

イスラファエルに向かってシャドウは、その驚異的な脚力を持って一気に距離を詰め、先制攻撃を開始した。

「トオオツ！！！！」

強力な蹴りがイスラファエルの胸部にある仮面に加えられる。レッグトリガーの荒々しい機械音と共に衝撃がイスラファエルを襲う。

「！！！！！！！！」

直ぐにイスラファエルは、反撃として異様に長い両腕にある爪をシャドウに振り下ろす。だが、シャドウはこれを回避し、連打をイスラファエルに加えた。

イスラファエルは、長いリーチを持ってシャドウを攻撃するが、上手く間合いを取り、戦うシャドウにはかすり傷一つ与えることは出来なかった……

その間に物陰にラミは身を潜めるのだが……

「彼も戦っている……今のうちに……」

ここで見守っているよりも、中へ潜入して目的の娘を助けようとラミは思い、イスラファエルが出てきた入り口へと駆け出したのだった。

入り口の近くでは、そんな彼女を暗い物陰から見下ろす存在が居た

……

ANGEL?08 サンダルフォン……

彼らの動きを見ていたものも……機甲大隊　ブルチエック…

戦車をそのまま人間にしたかのような無骨なスタイルを持ち、体中に巻かれたホルスターには様々な弾薬が備え付けられている。

右腕は機関砲となっており、頭部は戦車の砲台そのまんまである。

「さっそく、始めたか……それにしても、いきなり撤退させるとは……」

ブルチエックは、戸惑いに似た声を上げた。それもそうだろう、本来ならこのゲヒルンに配置された機甲大隊の火力を持って外敵を葬るフォーメーションが張られていいのだが、大隊長の命令によりいきなり、解除されたのだ。

撤退するのは、あくまでも外に居る部隊であり、施設内に入ることとなった機甲大隊は別にフォーメーションを組んでいる。

その中に、彼は居た……

機甲大隊　闘士　ゴチャック……

「俺は戦う…戦うぞ……!!」

熱の籠った声を上げて、ゴチャックは施設内の通路を進んでいた……

彼は、再び仮面ライダー　シャドウと戦うためにこの戦場に立つために赴くのだった。

イスラフェルと戦うシャドウであったが、変化が起こった。

シャドウに対して劣勢のイスラフェルは、この状況を打開するためにとある手段をとるのだった……

イスラフェルが抱いているコアが不気味に淀み始めた……

「ん？なんだ…この感じは…」

目の前にいるイスラフェルから妙な感覚をシャドウは感じた。まるで、一人の人間から二人分の気配が感じられるかのように……

イスラフェルの動きは予想以上に早かった…なぜなら、まるで魂が抜け出すようにイスラフェルの身体からもう一体のイスラフェルがシャドウに向かって飛び出したのだ。

「なにっ！！！！！」

いきなり飛び出したもう一体のイスラフェルに対して驚きの声を上げるものの、シャドウはこれにけりを加えて払った。

そして、もう一体のイスラフェルはシャドウに向かおうとせず沈黙している。その間にイスラフェルの背中から三体目のイスラフェルが足元からは、四体目が姿を現したのだ……

四体になったところで、イスラフェルはシャドウに対して反撃を開始した。

「くっ！！！！？！！！」

シャドウは、梅花の型を取るべく構え、四体同時に展開するイスラフェルを相手に闘士の気迫を込めた視線で睨み……

「梅花の型ッ！！！！！！！」

四方の空間から襲い掛かるイスラフェルの攻撃を全て往なし、シャドウは甲乙丙丁のイスラフェル達をカウンターで全て吹き飛ばした。だが、ダメージが効かないのかイスラフェルは直ぐに立ち直り、シャドウに向かってきた。

「厄介だな……こいつらは、ダメージをまるで受けていない……」
シャドウは、直ぐにイスラフェルの特性に気がついた。赤いコアを中心に、それぞれが補完しあっているのだ。怪人とはまるで違う……

（埒が明かないな……）

一人で戦うには、あまりに厄介すぎる敵である……これを打開するためには、戦うことの出来る仲間が必要である。

先日会った、あの白いマフラーを巻いたG5が都合よく来てくれるわけではないし、ここで撤退してこいつらを野放しにすることは出来ない……

「やるだけ、やるか！！！！！」

腹を決めてシャドウは、イスラフェルに望むのだった……

その戦いをモニターしていたゲンドウらは、

「勝ったな……」

「ああ……」

互いにニヤリと笑っていた。自分達の勝利を確信するかのよう……

「そうですね……」

ナオコが二人に応えると同時に、別のカメラがシャドウとイスラフェルが戦っている場所へ近づくものを捉えていた……

ナオコは、それに気がつき目を見開かせた。

「あの男はっ！……！！」

そう、映っていたのは自分に対して揚げ足を取るような物言いをした本郷猛であったのだ……

イスラフェルに対して防戦一方のシャドウも本郷の気配に気がついた。

「この気配は、本郷さん…どうしてここに？」

本郷は、50代とは思えないほどの速さで近づき、なんとイスラフェルの一体にとび蹴りを食らわしたのだ。

「トオオオツ！！！！！！！！」

遅しい掛け声と共にイスラフェルを蹴散らし、近くに居たもう一体が本郷に爪を振るうものの回避され手刀をカウンターとして食らわした。

（本郷さん…やはり、あなたは只者ではなかったんですね…）

シャドウは、ここ数日間、彼、本郷猛と過ごしていて彼が只者ではないことを感じていた。

「やっかいだな…四体同時というのは、だが、恐れることはない。一人では無理でも、二人なら……」

本郷はシャドウに振り返りながらそういい、再びイスラフェルに対して正面から向かい合い、独特の構えを取ったとき、腰に風車を備えたベルトが出現したのだ。

「ライダーアアアア・変・身っ！！！！！！」

本郷の腰のベルトの風車が力強く回転し、彼に凄まじいエネルギーを体中に送り…

「トオオオっ！！！！！！！！」

高い跳躍力で飛翔したと同時に、赤いマフラーを靡かせ、バツタに似た銀の仮面をつけた銀のグローブとブーツを身に着けた戦士へと変る。

その名は、仮面ライダー1号……

「本郷さんが、仮面ライダー……」

シャドウは、呆然と呟いた。本郷が只者ではないと思っていたが、まさか…仮面ライダーだったとは……

「驚くのは無理は無いかな…私こそ、悪によって改造され、悪と戦った仮面ライダー。後に私と同じ境遇の者達が現れ、最初の一人として、この名を名乗った」

左の拳を握り、腰の許に構え、右手を斜めを刺す様にまっすぐ伸ばし…

「仮面ライダー1号と……」

シャドウは、まさに大人物に会ったのだった……自分が名乗る仮面ライダーの始祖であり、ライダーの道を切り開いた先駆者……

「シャドウ…私が加勢する…!!ここで行われている陰謀を叩き潰すぞっ…!!!!」

1号の言葉にシャドウは、力強く頷いた。この頼もしい援軍に対して…

「行くぞっ…!!仮面ライダー シャドウ…!!」

「分かりました…!!仮面ライダー1号…!!!!」

1号ライダーの声を受け、シャドウは駆け出したが、それを阻むかのようにイスラフェル乙と丙が動くものの…

「待てっ…!!!!」

1号ライダーが、ファイティングポーズを構えて、イスラフェルに対峙した。

「お前の相手は俺だ…!!!!」

イスラフェルに向かい…

「行くぞっ…!!トオオツ…!!!!」

再び1号は飛翔し、イスラフェル目掛けて脚を突き出し

「ラァイダァァ・キィィィツクッ…!!!!」

凄まじい衝撃が、甲と丁のイスラフェルを襲い、その腕を粉碎した

向かってくる使徒イスラフェル乙丙の二体の攻撃を1号は回避し、

「ライダー返しッ！！！！」

使徒の身体が宙を舞い、地に伏した。切れのある技で二体の使徒を
翻弄する1号……

もう一方では、シャドウが甲丁のイスラフェル二体に対して、優勢
に戦いを進めていた。

「トオツ！！！！」

シャドウは、アームトリガーで使徒の身体に裂傷を与え、さらに連
打、蹴りを加えた。

しかし、シャドウが相手している使徒イスラフェルは一体だけでは
ない。もう一体のイスラフェルは、シャドウに対して衝撃波を放っ
てきた。

だが、シャドウはこれを読んでおり、レッグトリガーを鳴らして高
くジャンプすることで回避したのだ。

「行くぞっ！！！！シャドウ・ブレイド！！！！」

彼の声と共に、シャドウのアームトリガーが伸び、ベルトのキング
ストーンが輝き、呼応するようにして伸びたアームトリガーを中心
に緑色の光りの刃が現れた。

そして、そのままイスラフェルを一気に切りつけたのだ。

「!!!!!!!!!!!!!!」

凄まじい衝撃がイスラフェルを襲う。体の上半身が両断されたのだ。さらに追い討ちとして、シャドウは、再び飛び上がり反転して

「シャドウ・キック!!!!!!!!!!」

必殺の蹴りをイスラフェルに加えたのだ。凄まじい衝撃により、イスラフェルの身体が砂嵐のように歪み、近くに居たイスラフェルに溶け込むようにして吸い寄せられた。

一方、1号ライダーも一体のイスラフェルに対して…

「ライダー切りもみシューーーーーーっ!!!!!!!!!!」

使徒の身体を担ぎ上げるようにして、竜巻のような衝撃を生み出すように勢い良く回してイスラフェルを上空へと投げ飛ばしたのだ。

1号の技により、イスラフェルの身体全体に軋むような痛みが走り、こちらにも砂嵐のような残像となり、近くに居たイスラフェルに溶け込むようにして吸い込まれたのだ。

四体から二体になったイスラフェルに対して、シャドウと1号のそれぞれが対峙する。

一体同士では何も出来なくなったのか、イスラフェルたちは追い詰められるようにして身を寄せ合った…

「行くぞ、シャドウ。俺たちの最大の技で奴をしとめるぞ!!!!!!!!!!」

「分かりました!!!!!!」

1号とシャドウは同時に飛翔し、身体を二転三転と反転させなる。そして互いの最大級の技を放つのだった。

「電光ライダアアアアアアア!!!!!!」

「電光シャドウオオオオオオオ!!!!!!」

「キック!!!!!!」

二人の足に稲妻が走り、そして、使徒イスラフェルを同時に貫いたのだ。十字の光りと爆風がジオ・フロントに上がる……

自転車を駆ってマヤは、いつものようにオフィスへと行く。周りには、様々な人たちが居た。幼い頃より当たり前前に思えてきた日常……

その影には、人々の人智を超えた戦いが存在すると聞かされたことにより、彼女の目に映るこの日常はあまりにも異質なものに見えた……

「戦いは、今も続いているわ……人々の知らないところで……」

アンリエッタの言葉が脳裏に再びこだまするのだった……

ジオ・フロントの最奥部ターミナル・ドグマの奥　へブンス・ゲートに一人の少女が居た。

彼女の名は綾波レイ……

「……………誰かが来たの？」

彼女は、感じていたのだ。力強いものを持った誰かがここへ乗り込んでくることを……

ジオ・フロントを突き進む二人の戦士の姿があった……………

仮面ライダー1号……………

仮面ライダー　シャドウ……………

ターミナル・ドグマにクールギンを乗せたエレベーターが到着した。

「さて、これからどうなるか…創世王の遊びがどう変化するか、見ものとするか……十分、楽しませろよ。黒き月巫女……」

そう言って彼は、奥へと進むのだった……

第七話「黒き月の巫女」了

第七話「黒き月の巫女」(後書き)

まだ続きます。どっぞどっぞ……!!

第八話「魔窟の喧騒」(前書き)

連続投稿です。前にやっていたのがありましたので(笑)

第八話「魔窟の喧騒」

イスラフェルを倒した仮面ライダーシャドウ、仮面ライダー1号は、ゲヒルン本部施設であるピラミッドの前に立った。

「ラミは先に入ったみたいですね」

「ああ、そうだな。ここは、奴らの重要な場所には違いない…彼女が危険だ…」

シャドウの言葉に1号が応える。状況ははっきり言って悪い…

敵の拠点に攻め込むというのは、困難を極めるものである…かつて、1号ライダーが過去に戦った組織の基地もまた、恐ろしい威力と頑強な堅牢を誇った要塞だった。

「急ぎましょう。ラミは当然ですが、ここで助けを求めている人を助けなくては…」

シャドウは、胸中に飛来した焦りに呼応するように足を進めたが…

「急がなくてはならないが、焦りで冷静さを欠いては、何にもならないぞ…」

1号がシャドウを戒めるように言った。

「分かっています。敵を倒すのは、もちろんですが、ラミの安全と彼女の言う娘の救出は最優先です」

シャドウは、1号をまっすぐ見据えて言った。澄んだ輝きを持つ緑の目に1号は……

「そうだな、絶対にやりとげるぞ。そのために君はここへ……私は、加勢に来た……」

「それでは、行きましょう。仮面ライダー1号」

「ああ、行くぞ。俺達、ダブルライダーの力で、悪の陰謀を叩き潰すぞ！……！仮面ライダーシャドウ！……！」

「はい！……！……！先輩！……！……！」

二人は、本部施設へ浸入し風のように駆け抜けるのだった……

「……………何てことだ。ANGEL?07が負けるとは……………」

搾り出すように声を上げるのは、冬月。隣に居るゲンドウ、ナオコもまた同じであった……

「あの男……私の理論に難癖をつけるだけに飽き足らず……」

ナオコは、あの男こと本郷猛の参戦が気に入らないのか、これまでにない憎悪の視線を1号ライダーに向けるのだった。

「……………」

ゲンドウは何もいえないのか、沈黙したままである。サングラスをかけているため視線は何処に向いているのか分からない有様である。

(…あの技は……)

ゲンドウらの背後に立つドランガーは、シャドウがイスラフェルに放った”シャドウ・ブレイド”に対し、並々ならない関心の視線を寄せたのだ。

あの技と同じものを自分は知っている…二度と目にする事の無いものと思っていたモノだ……………

そうかつて帝国を滅ぼしたアイツと同じ技……………

「奴の技だ……………」

ドランガーの突然の声に、ゲンドウらは振り返った。無機物の機械であるはずのドランガーから凄まじい戦闘意欲が渦となって彼らを襲う……………

(な、何なのよ…こいつっ?)

ナオコは突然のドランガーに対して、恐れに近い感情を抱いた。唯

の機械が人間に等しい感情を持つ……夢物語と思っていた幻は、彼女が闇の業界に関わりだしてから現実であることを突きつけた。

ゴルゴムの怪人や創世王、大神官長、三神官も人智を超えた存在であるが、機甲大隊はさらに異質だ……

人間が作り上げた機械仕掛けの兵士達……感情はおろか自身の意思さえもつロボット達の存在は、彼女にとってショックを与えた……

天才と呼ばれ、賞賛された彼女の手で作り出すことの出来なかった存在を見たとき、彼女は嫌悪と嫉妬を抱いた……

機甲大隊は、ネロス帝国という組織の残存戦力らしい……そのネロス帝国以外にも意思あるロボットを作り出した組織は、過去にも無数に存在したという……

代表的なものは、ダーク、バドー、ギルド、ネオギルド、クライシス帝国という組織……

組織以外にも、単独で自身の意思で戦った自律AIを持ったアンドロイド、ロボットは人間顔負けの感情を持っているらしい……

これらの事実は確証に至っていないが、光明寺博士、古賀竜一郎博士が極秘に作り出したものが居るらしいが、あくまでも噂でしかないのだが……

MX-A1という破壊兵器もあったが、これはその極端な勸善懲悪システムの危険性から破棄されたのだが、誰かに改修され、自分の意思で動いているというものも……

自身の限界を遥かに超えた天才達によって生み出されたロボット達は、彼女にとって恐れ以上の忌まわしい存在なのである……………

「ダグ兄弟……」

「はっ、ドランガー補佐……………」

青と赤のそれぞれの鎧を纏った兵士二人が頭をたれる。

「その三人を任せる。私は、ゲヒルン施設へ向かう……」

不測の事態が必ず起こる。ドランガーはそう判断して、ゲヒルン施設へ向かうのだった……………

「ちょっと、あなたっ！！！！」

ナオコの声を無視して、ドランガーはその巨体の背を彼女に向けて歩き出した。

その頃、ラムは自身が辿ってきた記憶を頼りに施設を走っていた。息切れをしつつ彼女はLEVEL6のゲートにたどり着いた。ゲヒルンの中でも最も忌まわしく、おぞましい所業が行われている施設である……………

ここでの所業は、彼女自身がその身で体験している……………それを行う

人間達の醜悪さもまた知っているのだ……………

”人間の進化の可能性の一つ…すばらしいサンプルだわ…”

”まったくだ…これは、人類を必ず幸せにしてくれる…”

”新しい世紀の幕開けだ”

どれを聞いても反吐が出る台詞だとラミは思う。人類の幸せ？それのために今の人たちの幸せを犠牲にしてまで、やる価値があるのだろうか？

本当の幸せ…………

”人類の幸せというのは、思う以上にちっぽけで平凡なものだろうな…”

彼女の脳裏に本郷猛の言葉が響く。そして…あの銀の戦士によって助けられた人たちの笑顔が浮かんだ…………

「本当の幸せは、シンジ…仮面ライダーシャドウが護りたいモノ…………」

ラミは、そのために命を懸けて戦う戦士。そして、それ以前に人々の幸せを奪おうとした悪と戦った戦士達は、世界の平和ではなく、ちっぽけでささやかな幸せを護るために戦ってきたことを知った…………

かつてシンジが話してくれた”彼”も同じだった…………

いま、シンジ、仮面ライダーシャドウは戦っている。彼ばかりに戦

わせるわけには行かない…自分は、あの娘を助けよう…

自分は、そのために此処を逃げ出し、戻ってきたのだから……

そう思い、施設に踏み入れようとしたとき、何かが背後から迫ってくるのを感じた…

彼女はその気配に覚えがあった。自分と同じ使者……

「…サンダルフォン…」

振り返るとそこには、古代の原生生物を思わせるフォルムを持った使徒が居たのだった……

施設内に浸入した1号とシャドウは、大きく二つに分かれた通路に遭遇した。

「二人で分かれて向かうしかないな……」

「そうですね……」

1号は、上下に分かれた通路に対して眩き、シャドウが頷きながら答えた。

「ラムミは、地下の方へ行っただと思います」

「そうか…上も気になるが下のほうにはただならぬ者達の存在を感じる…」

1号の感がそう告げていた。明らかに奴らが待ち構えていることを……

「さっそくですが、来ましたよ……」

シャドウの声に1号が通路のある一点に視線を向ける。壁を伝って、ゲル状の物体が迫ってきているのだ……

「そのようだな……」

それは、二人のライダーの前に到着するとゲル状の物体から一体の怪人へと姿を変えたのだった……

「よく此処まで来たな…仮面ライダーシャドウ…そして、仮面ライダー1号……」

その怪人は、サンショウウオに似ていて、体のいたるところに剥き出しの機械が埋め込まれているという姿だった……

「ザンジオー……」

1号はその怪人の姿に見覚えがあるのか、そう眩いた……

「ザンジオー？ああ、確かに私は、シヨツカーのザンジオーをベースに作られているが、お前の言うザンジオーではない……」

その怪人は、1号に対してそう応えた。そして…

「私は、ゴルゴム所属の機械化大隊所属　ヘル・サラマンドラ…お前達を迎撃するために来た……」

ヘル・サラマンドラは、そう宣言したと同時にサンシヨウウオのように巨大な口からマグマの火球を二人に対して吐き出したのだ。

その攻撃は凄まじく、威力を察した二人はそれを回避する。吐き出されたマグマの威力は二人が察したとおり威力は凄まじく、特殊加工を施されているゲヒルン本部の通路を破壊したのだ……

「何て奴だ……」

「ああ、奴の火球の威力は、1000　を確実に超えている……」

「でも、急がないと……」

「そうだな。シャドウ…こうなったら、奴は俺が引き受ける。お前は、先へ進め……」

敵は思う以上に多い。故に時間が経つほど、先へ行ったラミに危険が迫る。ならば、先へ急がなくてはならない…

「彼女を助けるのは、君の役目だ。仮面ライダー　シャドウ……」

「わかりました！！！！」

1号の声に応えるようにシャドウは駆け出した。それを阻もうとヘル・サラマンドラは機械の腕に装備されている火炎放射器を向けるのだが……

「トオオツ！！！！！！ライダー・チョップ！！！！！！」

それを阻むように1号は、ヘル・サラマンドラの腕に攻撃を加え、

「お前の相手は、俺だ！！！！！！」

1号は、怪人ヘル・サラマンドラとの戦いに突入した。

1号とヘル・サラマンドラの戦いは監視カメラを通じてゲンドウらのところへ向けられていた。

「機械化大隊まで……勝手なことを……」

ナオコにとって頭の痛い問題であった……本来なら自分達の所有するANGEL達を使って、防衛するはずなのに、半ば敵視している派閥たちが許可無く動き回することは……

別のモニターには施設を走るシャドウの姿があった。さすがに早く、

あつという間に施設の中枢に近い場所に到着しようとしていた…

(それにしても…あの女の息子が…世紀王の証を…草の陰で悔しがっているわね。あの女は……)

ナオコは、シャドウを見て何となくそう思った。あの女 碓ユイの無様としかいえない自業自得の最期を脳裏に浮かべて……

”そ、創世王様……！わ、わたしは……！！！”

”黙れ…人間め……！！お前など、虫けらの価値すらない……！！死ぬのだ……！！！”

”あ、あああああああああつ……！！！！！”

情けない断末魔の悲鳴が彼女 碓ユイの最期だった。それとは対照的に赤い刃”サタン・サーベル”の切っ先を向け雄雄しく経つ創世王はまさに、この世の支配者にふさわしい貫禄があったのに……

あの女が犯した罪……それは……

(そのために、この所長を捨て……創世王に走った。身の程知らず……)

ナオコは、隣に居るゲンドウの手を握った。ゲンドウは少し驚いたのか、僅かに震えた……

「大丈夫ですわ。所長…あなたには、私が居ますわ……」

「……そうか。ナオコ君」

首許に手刀を加え、ゲバローズの勢いを殺し、腹部目掛けて強力な蹴りをくわえた。

「うわああああっ！！！！！！！！！！」

ゲバローズは、近くの壁に叩きつけられ、床に倒れた。だが、このまま負けてなるものと立ち上がるうとする……

シャドウは、ゲバローズの攻撃に備えて構えをとる。そこへ、強力な闘志を持つ存在が現れる……

「ゲバローズ。お前では、奴には勝てん」

現れたのは……

「お前は……ゴチャック……」

蚊を思わせる顔立ちをした灰色のロボット……第三東京市に来る前に勝負を挑んできた強敵である……

シャドウにとって、忘れることのできない相手である。思わず、名を言ってしまうほどに……

「そつだ、お前と戦つたためによみがえつた！！！！」

拳を上げてゴチャックは、シャドウに宣言した。直情的な熱血漢の彼らしい台詞である。

「そつか……なら……」

そんなゴチャックに応えるようにシャドウは、気迫の籠った視線を彼に向けた。

「その前に…ゲバローズ……」

「なんだ？ゴチャック……」

突然、話を振られたゲバローズは戸惑いの籠った声で応えた。

「奴とは、一対一の戦いがしたい。だから、何があっても加勢などするな。直ぐにここから離れる」

「…分かった。俺じゃ、仮面ライダーは手に余る。相手できるのは、大隊長、補佐、バルザック、ガルドス、ザーゲン、そして、あんたぐらいだ……」

そう言つて、ゲバローズはこの場を後にするようにこの場から離れていった。

そして……

「行くぞ！……！……！」

ゴチャックは、シャドウ目掛けて向かってきた。

「……………」

無言のままシャドウは、向かってくるゴチャックを見据えながら構えを取り、彼から放たれた鋼鉄の拳に向かってシャドウ自身の拳をぶつけたのだ。

「はああああッ!!!!!!!!!!!!!!」

「ウオオオオオオオオオオオッ!!!!!!!!!!!!!!」

二人の叫びが木霊する…持てる限りの最高の気迫と闘志と共に……

……………

シャドウとゴチャックが戦っている一方で、ターミナル・ドグマ
へブンス・ゲート”に変化が起きた……

彼女が居る部屋で……………

”ゴウン”

重厚な金属音と共に彼女を閉じ込めていた扉は開かれた……

「何？」

誰かが来たのだろうか？部屋の主 綾波レイはそう思い、身を硬く
した。だが、一向に誰も入ってくる気配は無かった……

そこで意を決して彼女は開かれた扉の向こうへと歩いた。扉の向こ
うには誰も居なかった……

「どうして?」

それだけではない、通路にも人の気配はおるか、監視カメラすら電気が通っていないのだ…明らかにおかしい状況である……

赤い瞳に戸惑いの色を浮かべつつ彼女は薄暗い通路を進むしかなかった……

先の見えない闇…それは彼女のこれからを暗示しているようにさえ思えるほど暗く冷たい雰囲気を持っていた……

レイの後姿を見る影が一つ……

「あの小娘か…最近、あのような小娘を野望の一部にしなければならぬとは…軟弱になったものだな…」悪”も……」

影 クールギンはレイに視線をやりながらそう呟くのだった……

「ゼーレの補完計画もそうだが…悪を貫くのなら、自分の力でやり遂げて欲しいものだ…だが、あの小娘、あれでは無防備すぎるか…」

そう言ってクールギンは、レイの後を追うのだった。

「何も決められない子供の力などに縋らずにな……悪は、悪自身の力でやり遂げることが誇りなのだ……」

「うおおおおおっ！！！！」

ゴチャックによる攻撃に対してシャドウは防戦を強いられていた。

「ゴチャック・フライングッ！！！！！」

シャドウの手を強引に掴み、近くの壁に叩きつけ、追い討ちとして拳を打ち込む。

「くっ！！！！てえあああああっ！！！！！！！」

ゴチャックの拳を受け止め、それをカウンター技でシャドウは応戦した。

「ムオオオオツ！！！！！！！」

カウンター技に耐えるようにゴチャックはシャドウの横腹に蹴りを入れる。これによりシャドウはバランスを崩してしまう。

さらにゴチャックは追い討ちをかけ、シャドウに対して容赦ない鉄拳の連打を当てた。

（！！！！？！！何て奴だ…前よりも強くなっている…）

だが、シャドウも負けてはいない。直ぐに態勢を立て直し、

「アーム・トリガー！！！！！」

ゴチャックに対して強烈な攻撃を与えたのだ。アーム・トリガーの刃により、ゴチャックの体から火花が飛び散る。

「ウオっ!!?!?!やるな!!!!」

直ぐにゴチャックはシャドウに向かっていき、拳を放つシャドウもまた同じように応戦する。

二人の拳、そして蹴りが互いに応酬し凄まじい衝撃が互いの身体にダメージとして響く。

(負けるわけには行かない!!!!)

シャドウの目に力が籠る。それをゴチャックは…

「それは、俺も同じだ!!!!戦闘ロボットとしての使命を果たすために!!!!」

シャドウの考えていることを察してゴチャックは言った。シャドウは

「戦闘ロボットとしての使命か…戦うためだけに生まれた自分の宿命を果たすために…」

「そつだ!!!!ロボットは与えられた使命を果たすために存在する!!!!」

故にゴチャックは強い。自身の生まれた宿命を受け入れ、それを全うする生き方をする彼は………

「それは僕も同じだ！！！！仮面ライダーとして、やり遂げなければならぬ使命がある！！！！！！」

シャドウもまた同じだった。自身の発した言葉に呼応するように拳に力を込め、ゴチャツクの頭部に重い一撃を与えた。

「グオウ！！！！」

頭部に来た重い衝撃に対してゴチャツクの資格センサー及びAIの動作にバグが発生した……

だが、それで攻撃を中断するゴチャツクではない。直ぐにシャドウに向かって攻撃を繰り返すが、

「ハアアアツ！！！！！！！！」

シャドウは雄雄しい叫びを上げながら、飛翔しゴチャツクの鋼鉄の身体に強力な二段蹴りを与えた。

衝撃が走り、ゴチャツクの体が後方へと吹き飛ばされた。重い金属音と共にゴチャツクの体が通路に仰向けとなって倒れた……

それでもゴチャツクに対して警戒を解かずに、シャドウは慎重に歩みを進めた……

二人の戦いを監視していたものが居た……

「標的…仮面ライダーシャドウ…これより全ての火力をもって殲滅する」

ドランガーは自身の戦闘AIを起動させ、視覚センサーに映るシャドウに対してロックオンの標準をあわせ、自身に備え付けられた様々な火砲を展開したのだ。

太い左腕に持った盾からは小型のマイクロミサイル。背中からは大砲が、頭部の上部分が二つに割れ、中からまた大砲が現れる……

右腕は変化し、ドリルのように禍々しい鋭さを持ったガトリング砲へと変化した……

「全火砲発射！……！！！」

ドランガーは、ボディーに装備された全ての兵器の戒めを開放し、圧倒的な火力を持ってシャドウとゴチャックを吹き飛ばした。

突然のドランガーの襲撃に対してシャドウは、直ぐに行動を移すことができずに襲い掛かってくる爆風と炎に巻き込まれるように瓦礫の雨に沈んでいく……

ドランガーの攻撃は凄まじく施設一体を揺るがす振動となり、大きく揺らしたのだ……

この衝撃に対して、施設に居る様々者達も何事かとそろいもそろって眉を寄せる。

仮面ライダー1号

「何事だ…まさか、シャドウの身に……」

1号の前には、ヘル・サラマンドラが居る……

ラミ

ラミはやってきたサンダルフォンとにらみ合うように対峙していたが、突然の振動により、施設の天象が崩れ、サンダルフォンが瓦礫に埋もれてしまった。

「な、何が起こっているの？」

そう呟くがサンダルフォンは直ぐに瓦礫を退け、彼女に向かってきたのだった……

「……………!!……………!!」

綾波レイ……………

「何？」

ゲヒルン本部を襲った衝撃は、地下のターミナルドグマにも響いており、天井の一部が破壊されるという事態に陥っていた。

自分の知らないところで起こっている事態に対して彼女は、戸惑いを覚えたが、直ぐにそれを振り払い、足早にその場を後にした。

彼女の背後に居たクールギンは……

「ドランガーめ。何か不測の事態が起きたのか……」

彼は直ぐにレイがいく別の方角に足を進め、その場から去るのだった……

衝撃の中心地にたつ元凶 ドランガーはもはや通路の原形さえとどめていない場所を見据えていた。

「……殲滅完了……これより確認に掛かる……」

サーチシステムを作動させ、シャドウを確実に倒せているかをドランガーは確認する。

そこへ、一体のロボットがやってきた。それは、ゲバローズである

……

「ドランガーっ！……！貴様！……！何故、ゴチャックを巻き込んだ
！……！……」

抗議の声を上げるのはゲバローズである。今にもドランガーに食って掛からんという勢いである。

ゲバローズに対してドランガーは無言で視線を向け…

「必要な犠牲だ…そもそも奴は、大隊長の許可を得ずに修復した存在……破壊してもこれといった支障はない…」

「貴様！…！」

あまりに冷たい物言いをするドランガーに対してゲバローズは、自身の思考が熱くなってくるのを感じた。

腕をブレードにして、彼はドランガーに向かおうとするのだが…

「ゲバローズ、立場を弁えろ。このドランガーに抗議を上げることが、重罪だぞ」

ドランガーの立場は、機甲大隊？2であり、ゲバローズ、ゴチャツクは単なる戦闘員でしかない……

険悪な空気になっている二人を他所に瓦礫の一部が動いた…

「仲間割れか？」

瓦礫から現れたのは、強制的に変身を解かれたシンジであった。先ほどのダメージが酷いのか体の至る所から血が出ている…

「あいつらが争っている間に……」

今の状態で真正面から当たるのは危険だ。幸いにもドラランガーによる攻撃により至るところが吹き飛ばされているので横穴がいくつも開いているのを確認できた。

その横穴の一つからシンジはこの場を離れたのだった……

だが、瓦礫から立ち上がったのはシンジだけではなかった……

「まだだ、まだ……終わっていない。勝負はついていない……」

ゴチャックは、自らを再起動させて、ゴチャックは思い身体を引きずるようにしてその場から立ち上がった……

綾波レイは、リフトにたどり着きそれを使いターミナルドグマの真上にあるLEVEL6の収容施設にたどり着いていた……

「ここは？」

普段は、沢山の研究員達で賑わう施設だが、今はがらんとしており誰一人としてこの場には居ない……

だが……

「グウウウウウウウ……」

突如、背後から不気味な唸り声が聞こえてきた。振り返るとそこには、白い装甲を持った異様に大きく裂けた口を持った醜悪な怪物が居た。

量産型E・ソルジャーである。一体だけではない…二体、三体と数をそろえている。

「……………!?！」

自分よりも遥かに大きな三体の怪物達にレイは目を見開き、そして一目散にその場から逃げ出した……

三体のE・ソルジャーもまた彼女を追うこととなった……………

同じ収容施設の入り口では、ラミは襲い掛かってくるサンダルフォンにより危機に陥っていた……

「……………!!」

サンダルフォンの長い前足ののような器官から繰り出される攻撃に対して避けるのが精一杯だったが、ところどころで掠り傷をおい、少しずつであるが痛みが彼女を襲う。

サンダルフォンは、逃げ続ける彼女に対して苛立ちを感じたのか、長い尾を使い彼女の脚に絡ませ、転倒させたのだ。

「しまった!!!!」

彼女に覆いかぶさるようにしてサンダルフォンは、向かってくるが

.....

「トオオツ!!!!!!!!」

そこへ壁を突き破り、シンジが割って入ったのだ。突然の予期せぬシンジの登場にサンダルフォンはびっくりし、そのとき動きが僅かに鈍ってしまった。

それを好機と見たシンジは急いでラミを抱えてサンダルフォンから距離を取った。

「シンジ...その傷.....」

ラミの目に入ったのは、血に塗れた彼の腕だった.....

「ああ、ちょっとね.....」

気丈な言葉と笑みでシンジは答えた。実を言うとかかなり辛い状態なのだが、こういうことは以前にも良くあったので特に苦になることではなかった.....

「今は、僕の心配よりもあいつを何とかしないとイケないね.....」

そう言って、シンジは構えを取り...

そのころ収容施設の奥へ進もうとするシャドウとラミがいくコースを歩く存在が居た……

デッド・ライオン……………

「仮面ライダーか……勝負しようじゃないか……このデッド・ライオンが相手になる！……！」

鉤爪を挑戦的に構えながらデッドライオンは、足を進めるのだった……………

「はあ、何？はあ、はあ……………」

レイは背後から追ってくる三体のE・ソルジャーに対して声を上げた。いかにも襲ってきそうな人相の悪い怪物たちから逃げるのは当然である……………

僅かに息を切らしながら彼女はある部屋に逃げ込み、勢い良く扉を

閉めた……

特殊な装甲でできている扉のため、三体のE・ソルジャーは身体をぶつけ、こちらに入ろうとしている……

「しつこいの……」

レイは不満の声を上げて、扉の向こうで暴れる三体のE・ソルジャーに対して頬を膨らませてそう呟いた。

「でも………」

このままでは、自分が餌食になってしまうのは時間の問題だ。直ぐに逃げ出したいが、逃げ道すら見当が付かない状況でどうすればいいのだろうか？

彼女は部屋を見渡し、あるものが部屋の中心にあることに気が付いた……

それは、単眼の黄色のヘルメットのようなものと同じ色とのスーツが置いてあったのだ……

「これは？………」

レイはそのスーツに歩み寄り、それらの手前に逆三角形の物体があることに気が付いた……

警戒することなく彼女は、その逆三角形の物体に触れた……

<これより、所有者の認識コードを入力及び登録を開始します……>

触れたと同時に機械音が物体から発せられた。

<トリニティー・システム 機動開始…>

その言葉と同時にヘルメットとスーツが物体に溶け込むようにして消えた…

物体はレイに向かって飛び出し、彼女の腰に付くと同時にベルトが現れた……それに呼応するように青と紫の炎が現れた。

「私達の所有者がきまったようね……」

「そうだね…ボクも嬉しいよ……さっそく活躍できそうだし……」

青と紫の炎は、レイの周りを回遊しながら言葉を発した…

突然のことにレイは戸惑いを覚えたのだが、背後では扉が大きくへこみ、E・ソルジャーがいつ入ってきてもおかしくない状況にあった…

「あなた…はやくトリニティーのマテリアルを作動させて…そうしないと力を出せないわ…」

青の炎は、レイに対して指示を出した。

「え？指示ってどつするの……」

「ベルトの右側のボタンを押せばいいわ…」

言われるがままにレイはボタンを押す。その瞬間、彼女を光が包み黄色の単眼を持ったヘルメットを被った同じ色のバトルスーツが彼女の身体を覆った……

「こ、これは?……」

不思議そうに自分の手を見た瞬間、三体のE・ソルジャーたちが扉を破壊し、レイの前に立ったのだ……

「ああ……」

レイは三体のE・ソルジャーに対して恐怖を感じたのか、少しだけ足を後ろに引いてしまう。

「大丈夫…あなたは、私達が護るもの…紫苑……」

「分かっているよ…藍……」

青と紫の炎は、レイのベルトに吸い込まれるようにして入っていった。また、光りが彼女を覆うのだった……

黄色のバトルスーツに紫の装甲が付けられ、まるで鬼を思わせる一本の角を持ち、特徴的な黒い突起物のようなショルダーアーマーの排出口から煙が噴出され、右腕には、日本刀のようなものを持っていた……

「……グウウ……」

三体のE・ソルジャーはそれに対して、警戒の色を浮かべた……

それを知ってか紫のトリニティー・フォーム”紫苑”を纏ったレイからは、大胆不敵な笑みがこぼれ……

「ボク！！！！、参上！！！！ってね」

刀を三体のE・ソルジャーに突きつけ、宣言したのだった……

「私、何も喋っていないのに………」

自分ではない声が出てきたことにレイは戸惑いの声を上げた……

「安心して、貴方は私達が護るもの……心配は無いわ……」

今度は、頭に響いてきた……レイの戸惑いを察することなく、戦いは始まるうとしていた……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3253w/>

仮面ライダー SHADOW ~福音の疾風~

2011年12月9日23時45分発行